ピーター・ハワード

フランク
ブックマンの
秘　訣

国際ＭＲＡ日本協会

フランク・ブックマンの秘訣

ピーター・ハワード著／相馬雪香訳

目次

一　世界の良心……3
二　革命の道……17
三　不左不右一直前進……38
四　天上の炎……60
五　立ち上がるアフリカ……73
六　憎しみをこえて歴史を変える……87
七　アメリカはイデオロギーを必要とする……105
八　奇跡の日……132
九　内閣もこの答を……153
十　将来のリーダーシップ……171
十一　勇気ある人は選ぶ……192
訳者あとがき……199

フランク・ブックマンの秘訣

一　世界の良心

フランク・ブックマンの生涯には一つの秘訣があった。今、これを世界に知らせるときがきた。

その秘訣のために彼は愛されもしたが、憎まれもした。博士は会う人のだれでもが、富んでいようが貧しかろうが、黒人だろうが白人だろうが、社長であろうが労働者であろうが、だれでもが全く新しい生活の基盤を発見することができるし、またそれを必要としていると信じていた。そのことが階級や社会制度の壁を越えて、彼を国の生命の中心に触れさせることとなった。

彼が常に世界的な基盤でものを考え、かつ生きたのはそのためであった。死に臨んで彼は次の挑戦をのこした。

「世界は神に導かれた人々によって導かれねばならない。全世界を神の支配にゆだねようではないか」

今から四十五年前、一九一六年に彼は人々に向かってこう言った。「諸君は大陸という基盤で生きなければいけない。そして大陸という規模でものを考えなければいけない」当時その考えを理解した人はごく少なかった。

この秘訣によって博士の生涯そのものが現代の世界に対するひとつの挑戦となった。有名なドイツのフランクフルト・アルゲマイネ紙は博士を「世界の良心」と呼んでいる。

またニュージーランドのホーリオーク首相はこう言っている。「ブックマン博士ほど、人種、階級、宗教などによる偏見を越えて世界じゅうの人々を融合させるのに貢献した人はない」またビルマの高僧ウナラダ大僧正（管長会議事務総長）は四人の僧正を伴って、一万キロの道を踏破して博士に会いにきた。「博士は千年に一度しか現われないような偉大な人物であった」と大僧正は言っている。

この本の目的は博士を称賛することではなく、真実を語ることである。

フランク・ブックマンとはどんな人だったのだろうか。

逝去の数ヵ月前のこと、当時ミラノにいた博士は、ある朝早く数人の友人たちと話していた。

その日、ある国の新聞が博士を攻撃した。博士は言った。

「もちろん私は完全な人間ではない。私は一生をただひとつのことにささげつくしてきた。それは自分の会うすべての人がキリストのもたらした精神によって輝かしく生きるようにすることである。それは今朝、朝食を運んでくるボーイについても言えることである」

そのホテルのバーには三人のパーテンがいた。ブックマンは酒を買う代りに彼らに生命の糧を与えた。三人の男とその家族たちは博士との交友を通じて、何か新しいものを発見した。その中の一人はこう言った。「ブックマン先生は他の人とは全く違っていました。先生にお会いして私たちの生活はずいぶん変りました。このバーにはイタリアの指導者たちがたくさんきます。ついこの間も外務大臣がきました。私たちがブックマン先生の話をすると非常に興味を持たれて、お酒を飲むのも忘れるほどでした」

ミラノの郊外にセスト・サン・ジョバニという鉄鋼の町がある。当時、博士はそこでMRAの革命を指導していた。三人のパーテンもそれに加わった。この町は貧困と社会不正が横行し、深い憎しみが人々の心を支配していた。町なかで労働者が射殺されたり、つい数年前にも経営者が何人も生きたまま熔鉱炉の中に投げ込まれるという事件が起きた。工場の中で多くの人が故意にトラックにひかれ、事故死として葬り去られた。冬の夜、何百という共産主義者の家の戸口には

槌と鎌の飾りが赤々と輝いていた。

ところがその年のクリスマスには、共産党員であるセストの市長が、市民主催のMRA晩餐会に党のホールを提供した。その集会では、共産主義者も非共産主義者も、キリスト教徒もそうでない人も、立ち上がって自分がどのようにしてチェンジし、世界を再造するために働くようになったかを語った。

その年、共産党の本拠地ともいわれるこの町に、はじめてクリスマス・ツリーが立ち、クリスマスを象徴するキリスト生誕の光景が飾られた。

博士は逝去の数ヵ月前、オックスフォードに旧友の元総長リビングストン卿を訪れた。リビングストン卿は世界的な教育家であるが、長年にわたって博士の仕事に興味をもっていた。ブックマン博士がはじめてオックスフォードを訪れたのは一九二一年のことだった。そのころ、学内に非常に優秀な学生で、卒業試験を受ける前にすでに講師として迎えられるほどの男がいた。彼の父親は牧師であったが、彼自身は徹底した無神論者であった。

日曜の午後、彼はよく集会を開いて名のあるキリスト教信者を呼んでは、議論をふっかけていた。信者の話が終ると彼は自分の無神論をとうとうと述べ、聴衆はこれに魅了されてしまうのを常としていた。

だれかがこの男にブックマン博士は「聖霊の力」を信じていると言った。そんなばかなことが、と思った彼は、ある夜、自分の部屋に博士を招き、コーヒーを飲みながら議論することにした。一時間にわたって、彼は得意の無神論をひれきした。博士は議論にまきこまれることをしないで、時々「そう」、「大変面白い」などと相槌をうちながら聞いていた。一時間あまり話したあとで、無神論者はこんなことでは、のれんに腕おしで何の役にも立たないことに気がついた。彼は突然博士に向かって、「一体、あなたは私のことをどう思っているんですか」と聞いた。

「本当のことを言ってもいいですか」と博士が聞くと、無神論者は「ぜひ」と重ねて頼んだ。そこで博士は、「私はあなたについて三つのことを感じます。第一にあなたは不幸な人だ」といった。

「そのとおりです」

「第二にあなたの家庭も幸福ではないでしょう」

「そうです。私は父を憎んでいます。子供のときから憎みつづけてきました」

最後にブックマン博士はこう言った。「君はだれにも言えない不純潔な習慣のとりこになっていますね」

無神論者は強く反発した。「それはうそだ」急に座が白けた。

博士は言った。「ではおいとましょう」
「もう少しいてください」
「いや、もう行かなければならない」
「どうぞ行かないでください」と学生は懇願した。
そこで博士は言った。
「もし君が私といっしょに神の声を聞くというなら残ってもいい」
無神論者の答は驚くべきものであった。「ぼくは神の言葉を聞くことはできない。なぜって、今あなたにうそを言ったばかりです。おっしゃるように私は不純潔な習慣のとりこになっているのです」
「よくわかっています」と博士は答え、二人は正直にいろいろのことを語り合った。別れる前に彼らはひざまずいて祈り、無神論者は、「私は自分の生涯を神の手にゆだねます」と誓った。
次の日、彼は父に謝罪の手紙を書いた。彼はそのころ、ある教授とともに無神論哲学についての本を執筆中であった。その原稿をもって教授のところに行き、「もうこれはつづけられません」と言った。
「どうしたんだ?」

「われわれは真実に対して忠実でありたいと思って、これを書いてきました。ところが、私は神を知ってしまったのです」

教授は煙草をふかしながら「そうか、それではほごにしなければなるまい」と言い、その原稿はくずかごに捨てられてしまった。

それから数週間後のことである。ケンブリッジで、会合が開かれたとき、この男は次のように語って人々を驚かせた。

「私が前に何を言ったとしても、今日ここでみなさんといっしょに神を認めているということは否めない事実です」

リビングストン卿はブックマン博士とこのような思い出話をつぎつぎと語り合ったあとで、感慨深く言った。

「われわれの若いころには、道義的な一種の垣根があったものだ。必ずしもそれに従ったとは言わないが、垣根を乗り越えた時にはすぐに意識したものだ。今では、そういう垣根は全部なくなってしまった。その結果が今日の世界の状態なのだ。あなたの仕事は垣根を新しくつくることだ」

卿はまた、現在の問題は、人々が道義標準に反対するというよりは、善と悪、正しいことと間

違ったこととの区別がわからなくなってしまったことにあると言った。彼は現在の大学における乱脈な男女関係や、同性愛の傾向について語り、学長だったころを思いおこして次のように言った。「当時、あなたは私よりもずっとよく、悪の根源を知っておられた。しかも、あなたはそれを直す力をもっておられた。あなたのようになりたいと思う」

「もちろん、おなりになれますとも」と博士は答え、どのようにして人を変えることができるかをいろいろと話し合った。

リビングストン卿が帰ってから、博士は自分の泊っているホテルの部屋の掃除婦を呼んだ。彼女は北部の炭坑町の出身と一目でわかる、ふとった中年の婦人で人がよく、気さくなくせになかなか抜け目のなさそうな人だった。

博士はこの人にいすをすすめて三十分以上も心の底からいろいろなことを話しかけた。彼は相手が大国の重要な人物であったとしてもそれ以上のことはできないほどの心づかいを見せていた。部屋を出ると彼女は言った。

「私はホテルで二十五年も働いていますが、お客さまが私に友だちのように話しかけてくれたのはこれが初めてです。なんだか私にも大きな役割があるような感じがしてきました。部屋を掃除するばかりでなく、世界のためになにかできるような気がして非常にうれしく思いました」

それから数週間後、ブックマン博士はリビングストン卿との会話をもとにした演説を発表した。ラジオ・ローマは直ちにこの演説を三十六ヵ国語で放送した。東京をはじめ、全世界の放送網がこれに呼応し、さらにアフリカ諸国における十六の放送局もこれを広く放送した。新聞社の推定によればこの演説は、新聞、ラジオ、テレビを通して十億以上の人々に到達したと言われている。

ブックマン博士はきわめて謙虚な人であった。ある時、博士はイギリスに着いて、ロンドンの自分の家に落ち着いた。たまたま彼の留守を守っていた人たちが、その日、その家で英国の政界の人たちを招いて夕食会を催すことになっていた。それを聞いて博士はこう言った。「私が今日ここにきたからといって、無理に私の席を設けなくてもよいのですよ。もちろん私がいて役に立つのだったら喜んで出席しますけれども、そうでなければどうか私に気兼ねをしないでください」

「ブックマンの秘訣」の一つは自分というものが全くなかったことである。博士に会ったことが一生の転機になったと言っている人がきわめて多いのはそのためである。

博士は神がすべてを行なうのであって自分はその器にすぎないと深く信じていた。

ある時、スコットランドの炭坑夫のピーター・オコナーがブックマンを訪れた。彼はブックマンの中に彼を愛し、彼の失敗をも必要をも理解し、彼が自分の最高の使命を生きるように助けてくれる人を見出した。「わずか三十分の間にあなたは、私が今まで会っただれよりも私を助けてくださった」とオコナーが言ったとき、ブックマンは答えた。「それは私じゃありません。神が助けたのですよ」

数年前、ブックマン博士は病の床についていた。そのころ、世界じゅうから何百という人々がミシガン州のマキノ島の世界大会に来ることになっていた。ブックマン博士は彼らの到着の前に、みずから来客のリストを手にして一部屋一部屋を見て回った。「すべての人に最善の待遇を与えなければならない。今日は私自身がすべてをたしかめたいと思う」夕方になるころには、疲れて顔も青ざめていた。ベッドにも一人でのぼれないほどであった。沈黙の中に一時間が過ぎた。日が沈み、星影のもとを米国中西部の工業都市に鉄鋼をはこぶ輸送船が五大湖の水をきって静かにすべって行った。突然、博士は言った。「これはきっと偉大な前進の前ぶれに違いない」そばのものがこの言葉におどろいて、そのわけを聞くと、博士は次のように言った。「今、私には全く力がない。一人では寝がえりさえ打てないくらいだ。自分ではなに一つできない。今までに何回

も大きな前進の前にはいつも自分はこのような状態におかれた。きっと神が私の無力さを示し、すべては神の力によるものであることをさとらせるためだったのだと思う」しばらくして、彼は子供のように祈った。「神さま、私を良い人間にしてください。この体の痛みに感謝します。痛みは私を潔め、力づけてくれます」

晩年のある日、ヨーロッパ諸国の貿易金融に大きな責任をもっているある閣僚が博士を訪れた。この人はかつてドイツのルール地方で共産主義の流れがMRAによってまきかえされたことを語った。その結果、四年間に労働評議会の中に占める共産党の割合が七十二パーセントから八パーセントにおちたのである。

彼はまた一九六〇年の日本の危機を救ったのは、ブックマンによって訓練された人たちであったという日本の総理大臣の言明を記憶していた。彼はブックマンに向かって「すばらしいお仕事でさぞ御満足でしょう」と言った。

博士は答えた。「私はそういうふうには思っていません。私は何にもしなかったのです。神がすべてを行なうのです。私はただ神の命ずるところに従うだけです」政治家は重ねて言った。「それは御謙遜でしょう。あなたご自身のなさったことも偉大です」ブックマン博士は再び答え

た。「私は何もしなかったのです。というよりも、あなた方政治家がなさらなければならないことを私がかわりにしていただけなのです。私は大分前から自分の考えや自分のやりたい方法でものごとをするのをやめる決心をしました。そしてそのかわりに私は神に聞き、すべてを神の意に添うようにしてきたのです。あなた方政治家がそれを始められるならば、今のように自分たちでつくり出した問題の中でもがいてばかりいないで、本当に正しい政治をすることができるでしょう」

フランク・ブックマンはその政治家に、国々の必要に答える唯一つの方法は人を変えることだと話した。博士は、故ソールスベリ卿がイギリスの上院で言った言葉を繰り返すのだった。「新しい世界をつくるのに必要なのは神に導かれる人であり、国である」ソールスベリ卿がブックマン博士の仕事に興味をもっていることを聞かれたジョージ六世は人をつかわして、そのわけをたずねられた。「私は神の力が本当にこの仕事に働いているのを見たので傍観していることができなくなったのです」と卿は答えた。

国際連盟の全盛期時代からその解散に至るまで議長をつとめていたカール・ハンブロウ氏はジュネーブでブックマン博士にこう言った。「あなたはわれわれが長年求めて得られずにいる平和を作られた。われわれがいくら政策を変更しても達成できなかったことを、あなたは人間を変え

る事によって成功された」

ブックマン博士の周囲では、その生涯の最後の瞬間まで人々がチェンジしつづけていた。博士が息を引き取ったのは南ドイツ黒い森（シュワルツヴァルト）の美しい町、フロイデンシュタットのあるホテルの一室であった。

奇しくもそこは一九三八年MRAが発足した同じ場所である。「フランク・ブックマンの道」と今では名づけられている森の道を歩きながら、博士は次のような歴史的な構想を得たのであった。「道義的、精神的再武装。世界史の次の重要な展開は国々が道義的に再武装されることであろう」

ホテルで博士の部屋の世話をしていた若い娘はつけまつげに厚化粧といった典型的な現代娘であった。彼女は八十三歳になるこの老人が自分の生れ故郷の北欧の町に行ったことがあり、また、国王や前国王にも会ったことがあるときいて全く驚いてしまった。

だれかが彼女にブックマン博士の演説集を一部与えた。彼女はそれを読んだ。博士は彼女に「仕事は楽しいか」と聞いた。

「楽しくありませんわ。私は辛い仕事は大きらいなのです。ここはずいぶん人使いが荒いんで

す。私はほんとうは飛行機のステュワーデスになりたいと思っています」

博士は静かに彼女に話しかけた。神は彼女の生涯にもまた大きな計画をもっていること、そして彼女が静かに心の底にひびく考えに耳を傾けるならば、新しい人生の方向が与えられることなどを語った。

間もなく容体が急変して博士は亡くなった。数日後、博士の友人の一人が部屋を片づけに中にはいると、くだんの娘が友だちと二人でベッドのわきにひざまずいて祈っていた。

娘は立ち上がった。顔からは厚化粧がとれ、目は輝いていた。「あの方は私の四倍近くも年をとっていました。そうたくさんお話をうかがったわけではありません。でもこのお部屋の掃除をしたことは私の生涯忘れられない経験となるでしょう。あの方の生き方を知って私も神への信仰というものがわかったような気がします。私はもう前の私とは変ってしまったのです」

二　革命の道

モスクワ放送局はしばしばフランク・ブックマン博士の仕事を攻撃する。ある放送では彼らはこう言った。「MRAは世界的なイデオロギーで、各大陸に橋頭堡を持ち、今や全世界に拡大する最後の段階にきている。MRAは急進的で革命的な人の心をとらえる力を持っている」

ブックマン博士もまた、現代の世界にとって必要なことは、歴史上かつてなかった大規模な革命だと信じていた。彼の心は、それは「キリストの十字架にあらわされた精神が、全世界のあり方を一変させるようなきびしい革命」だと考えていたのである。

革命家としてのブックマン博士を理解しなければ、彼の神髄はわからないだろう。彼はまさしく革命家なのである。博士の世の中や人々に対する考え方は、普通の人と違っていた。彼は人々

を黒人とか白人とか黄色人種とかいう皮膚の色によって区別することなく、すべての人が同じ弱点をもち同じ答を必要としている神の子であると考えていた。「問題は肌の色でなく人格である」と彼は言った。博士は一九一五年以来何回もアジアを訪問しているが、その最初のときに「カラスは世界じゅうどこに行っても黒い」と言って、人間性がどこでも同じだということを語っている。

博士はまた、階級によって人を区別することもなかった。国王だからといってへつらうこともなく、同時に故意に彼らを軽蔑するようなゆがんだプロレタリア意識をも持っていなかった。

富のあるなしで人の価値が左右されるとは思わなかった。博士は貧しい人に同情し、物質的にもできる限り助けようとはしたが、それだからといってその人が人間として直面しなければならない不正直とか不純潔を見のがしはしなかった。ある時、MRAは階級的な運動だと人がなじったとき、博士は即座に「そのとおりです。確かに世界には二つの階級があります。チェンジする人とチェンジをこばむ人と」と答えた。

博士はまた言った。「世界にはすべての人の必要を満たすだけのものはあるが、貪欲を満たすものはない。すべての人が互いに思いやりを持ち、分かち合えばすべての人の必要が満たされるのではないか」

博士はこの精神を生き抜いた。そして自分の周囲の人々にもこれを生きることを要求した。

亡くなるまでの四十年間、博士には月給も定収入も何もなかった。彼は「神の導くところ神そなえたもう」という信念を生きたのである。彼の支出は、洋服、旅行費、散髪、そして靴の修理などの最小限の必要に限られていた。自動車を持ったこともなかった。博士の所有していた財産は、ペンシルバニア州のアレンタウンにある親ゆずりの家だけであった。彼は与えられたものをすべて必要に応じて惜しみなく分け与えた。

一九三〇年代の経済恐慌のおり、イギリスは失業者であふれていた。その指導者の一人が博士に会いに行った。この人は自分の仲間の状態に怒りを感じ、自分より富んだ人を羨み、ブックマン博士が資産家の手先ではないかと疑っていた。博士は彼の言葉にじっと耳を傾けていたが、この男の情熱とその貧しさに心を動かされた。二人は静かにともに神に聞いた。「私の持っている全部の半分をあなたにあげるというガイダンスでした」博士はそう言って引き出しから貯金帳を出しそのまま相手に見せた。その額は、世界的な仕事をしている人のものとしては、驚くほど少ないものであった。博士はその場でその半額の小切手を書いて渡し、その上、ポケットに入れていた手持ちの現金も半分渡した。全部で九ポンドであった。当時のことを思いおこして、のちにこの指導者は言っている。「もちろん、社会主義というものは、自分の財布の半分を分けることだけじゃないことは博士だって知っていたのです。しかし、私の心を打ったのは、博士が神の意

志だと信じて私に与えようとした人間愛にあふれたそのものごしだったのです」この人はチェンジし、生涯をブックマンとともに働いたのである。

あるとき、友人の一人が金のことを心配していた。博士はこう言った。「どうしてそう心配するのか私にはわからない。私がこの仕事をはじめたときは二、三人しかいなかった。そのときから今まで、神はこの仕事を何十という国、そして何百万の人々に広げてくださった。今でもそれは大きくなろうとしている。今までに負債を負ったことはない。もちろん必ずはいってくるというあてもなかった。しかし神は私たちを飢えさせたことはなかった。これからだって同じではないだろうか」

博士は一方、お金の使い方には非常に気をつけていた。むだな使い方は極力避け、手渡しできる手紙は郵便で出すことを控えた。乱費をきらう一方、しなければならないことは金のあるなしにかかわらずこれを断行した。そのことが正しいかどうかを注意深く検討し、一度決まればあとは信念を持って前進した。例えば二百五十人に二つの劇の道具を持たせ、五万六千キロの世界一周の大旅行を企てたときなども、払うだけのお金は当時手元にはなかったが、必ず神が行く先々で必要を満たすだろうという信念に燃えていた。五十年の間、博士はこのようにしてありあまるということもなく、また、しなければならない仕事には間に合うだけのものが与えられていた。

あるとき、インドのボンベイで新聞記者たちが質問の矢をあびせ、金融のことについてアメリカ資本のバックを受けているのだろうとつめよったときも、博士はありのままを語った。彼はMRAはこれを信じている何千という人々の寄付、それも大口の献金よりも、犠牲を払った浄財の献金によってまかなわれているのだと言った。あとになってどこかの大資本のうしろ立てがあるのではないかと言った人のことを思い出して、博士は笑いながら「ときどきそうだったらいいと思うこともある」ともらした。

事実そのような機会があったことがある。アメリカのある金満家が博士の人を変える力を買って、自分のつくった大きな団体の会長になってくれと頼んだ。立派な事務所、たくさんの働き手、そして無制限のお金の提供を申し出た。しかしこの人の申し出を受ければ、その財力で自分のすることを制約するだろうということを見てとった博士はこれを拒絶した。もし申し出を断わればアメリカの他の財団から援助を受けることはできなくなるだろうとおどかされたが、博士のガイダンスははっきりしていた。「私は人でなく神に従わなければならない。神は必ずそなえたもう」

ブックマン博士が革命家として完成されるまでには四つの転機があった。

第一は一九〇八年であった。若い彼は野心家であると人から指摘された。この言葉に反発し、彼はそうでないことを証明するためにフィラデルフィアの最もむずかしいといわれる場所で不幸な少年たちの世話をはじめた。最初、彼は馬屋の二階を借りて彼らと住んだ。床をとおして馬のにおいが鼻をついた。少年たちは手に負えなかった。「小さな野蛮人たち」とブックマンは彼らを呼んでいた。日曜日の朝食に遅れないようにさせるのに罰をもってするのではなく、特別おいしいパンケーキを定刻にテーブルに並べたものだ。そこで彼は生涯を通じて役に立った教訓を得た。それは決して人の失敗で驚かず、また人のあやまちを笑うなということであった。「なぜなら自分だって同じような間違いをするのだから」

この小さい試みはやがて施設となり、他の町にもセッツルメントとなって採り入れられた。彼の施設は六人の理事によって管理されることとなった。あるとき資金が不足したので理事会は少年たちの食費をけずった。少年たちは腹をすかせブックマンは憤慨した。一晩中うつうつとして眠られぬ夜を過ごした。朝になって朝食におりて来ないので、友人が部屋に行ってみると彼はベッドの中で義憤にもえていた。そしてその日の中に彼は辞表を出した。憤懣がおさまらぬままについに、彼は健康を害した。専門医に相談すると、毎日温浴と冷浴をくり返すと気分がよくなるだろうと言った。半年の間、彼は忠実にこの処方に従った。彼は世界中で最も清潔な男になった

かもしれないが、心の中は一向に晴れなかった。せっかく初めて成功しそうに見えた彼の仕事も、こうして挫折してしまった。彼は傷つけられ、心は憎しみに満ちていた。その結果、健康は悪くなるばかりであった。

三十年前に彼の語った言葉そのままを引用して、当時のことをここに回想しよう。

「私は失敗した。私に言わせれば理事たちのしたことは非常に間違っていた。しかし私も自分の仕事を偶像にしてしまっていた。ただ辞職するだけでよかったのだ。私の考えは正しかったのだが、心に悪感情を抱いたことは間違っていた。私は海外に旅行した。その途中、ホレースの詩にあるように〝心労〟が馬に乗って追いかけてくるように感じた。私はそのひずめの音を聞き、荒々しい鼻息を首すじに感じるような思いがした。

ヨーロッパに渡った私は、イタリアからその他の国々を回ってイギリスに戻り、湖水地方のケスウィックの町にたどりついた。そこで思いがけないことが起こった。私はそのことに生涯感謝している」

ケスウィックである日曜日、博士は教会に行った。そこにはわずか十七人の人しかいなかった。ちょうど一人の婦人が十字架について語っていた。

「キリストの十字架の意義については、少年時代から知っていたし教会でも教えられ、自分でも

人に教えてきたものだが、この日、突如としてそれが鮮明な現実として私に迫ってきた。その教会にはいったとき私の心は、プライドと利己心と憎しみで乱れていた。ところがその婦人の素朴な話の中から突然私は十字架の意義をさとった。私は十字架上のキリストの姿を明らかに見た。私は例の六人の理事のことを考えた。そして七番目にまちがっていたのは私であったことを知った。

私はキリストの生涯の中にあらわされた神の愛によって、私と神をわけへだてている深い淵がうめられてゆくのを感じた。気もはればれとして宿に戻りこの深い経験をだれかと分かち合いたいと考えた。

私はアメリカに手紙を書いて長い間憎しみをいだいてきた六人の理事たちに、新しい体験を伝えた。十字架のもとで自分の罪以外のことは感じられなかったことを書き、その手紙の一番上に次の句を書いた。

栄光の御子のみまかりし
奇しき十字架みあげれば
富も栄誉もすべて捧げ

傲りの心をさげすまん

そして――あなたがたを憎んでいました。申し訳ありませんでした。お許しください。親愛なるフランク――と結んだ」

逝去の一年半前、ちょうど八十一歳のとき、ブックマン博士はケスウィックでのこの経験を数人の人たちに語った。

「今日、私は十七人の人が集まっていたあの日曜の午後のことを思い出した。その時、私は十字架にかかったキリストをまのあたり見た。キリストはわれわれの罪をあがなうために十字架にかかった。しかし私はキリストのために一体何をしたのであろう。

神こそがいのちの泉
わきいでるいのちの水を
われにくませ、わが心にみたし
あふれさせたまえ、とこしえに

そのとき私ははっきりと〝償い〟の経験をした。教会を出たときの私は自分のあらゆる問題や罪に完全な答を得たというはっきりとした意識をもっていた。私は天国の風の音を聞いた。その風が私を貫きおおいつくして、私は今までとは全くちがった人間になっていた。

教会の外で私は若い元気のよい青年に出会った。彼は家族と一緒にダーヴェントウォーター湖を見おろす丘の上の家にきていた。それは私の住んでいる家の隣だった。〝散歩に行きませんか〟と彼が言うので、私たちはダーヴェントヴォーター湖のまわりを散歩した。私は今、教会で得た経験、十字架上のキリストの啓示が私の心の悩みを直ちに解決したと話した。散歩が終る前にこの青年も同じ経験を得た。彼はケンブリッジ大学の一年生であった。彼はその経験を直ちに両親に話した。両親の喜びようはいうまでもない。それは一九〇八年のことだった。このすべては五十一年前におこったことであるが、それは以後の私の生涯のすべてを変えてしまった。

十字架のもとで
私ははじめて光を見た
罪の重荷がとりのぞかれ
信仰の光によって私の目は開かれた

今では幸福に満ち満ちている

それは私の生涯に新しい秩序を与えることとなった。たくさんの人が十字架について語っているが多くの場合全く意味がない。なぜならそれは自分の体験に根ざしていないからである。人から聞いたり本で読んだりしただけでは切実なものとならない。しかしそれが本当の経験として受け入れられたとき、それは生き生きとして現実的で生活の根本に直接の影響をもってくる。

パウロの経験を思い出してごらんなさい。ダマスカスへの道でパウロは天の声を聞いた。姿は見なかったけれど、彼の人生は一変してしまった。私たちが静かな小さな神の声に耳を傾けるときに天の力に接近し、それによってこのような変化がおこるのである。

十字架を経験するとき、人は何者をも恐れなくなる。ケスウィックで私が学んだことは自分が最も変る必要があるということだった。つまり私から始めなければならなかったのだ」

第二の転機はペンシルバニア州の州立大学に行ったときに起こった。ケスウィックでの経験の後、ほどなくブックマン博士はアメリカ合衆国の民主党全国委員会の委員長の要請でその大学に行くことになった。この委員長は大学の理事の一人で学内の状態に頭を悩ましていた。学生たち

は教授に反抗してストライキを起こし、酒を飲むことが学内の流行になっていた。その州は禁酒法施行中であったにもかかわらず、ブックマン博士が到着した夜は、校内の十九ヵ所で酒盛りが行なわれているというありさまであった。当時のことを回想して博士は「軍艦を浮かべるほどお酒がたくさんあった」と形容した。

ブックマン博士はその大学の鍵ともなるべき男が三人いることを見てとった。一人は無神論者の学長、一人は最高裁の判事の息子で人気者のブレア・バックという学生、彼は孔子の教えを信じていると言っていたが、実際には信仰は持っていなかった。最後の一人は、通称ビル・ピックル、本名ウィリアム・ギリランドという町医の馬丁で、夜は学生にお酒を密売している男であった。

この三人がチェンジした。そのことをとおして学校の空気が一変し、キリスト教的教育の模範学校となった。当時千六百人の学生の中、千二百人が毎週聖書研究に集まるようになった。ブックマン博士の影響で再び教会に戻ってきたカトリック信徒のために、神父はしばしば礼拝式を開いて「ブックマンのミサ」と呼んだ。このような奇跡的な変化を実際に見るために、各地から大勢の人が集まって来た。(注、フランク・ブックマン著『世界を再造する』参照)

ビル・ピックルは以来亡くなる日まで二十年間、ブックマン博士とともに働きつづけた。八十

歳のとき、ブックマン博士に伴われてジュネーブに行き、国際連盟の代表たちに自分の経験を話したこともある。ブレア・バックはアメリカ南部諸州の黒人教育の基礎を築くのに非常に貢献した。南部において黒人・白人共学実施のさいに不穏な事態が予測されていた地域でも、バック氏の影響で平和裏に事がはこばれたところが多かった。ブックマン博士の逝去は二人が会って五十四年後であったが、そのとき、ブレア・バックは妻とともにMRAの勢力に加わってペルーに行っていた。一九六一年ブックマン博士の葬式にはビル・ピックルの子供たちも参列し、半世紀以上前に自分たちの父親の見出した信仰が今では孫に伝えられていることを語った。

ペン州立大学でブックマン博士は神の声に絶対服従する秘訣を学んだ。一九〇八年から一九一五年の間に彼は生涯の指針となる多くのことを学んだのである。そのことを博士は次のように語っている。

「あまりにたくさんの人が会いにくるので私は部屋に二つの電話をそなえた。それでも十分の結果は得られなかった。そこで私は突飛なことを思いついた。それは朝五時から六時の間、電話のかかってこないときに、静かに心の中の小さい声に耳を傾け生活の指針をうけるということだ。私は心に浮かんでくる考えを書き止めた。何も特別に書かなければならないという規則はないが、一つの理由は私の記憶が非常にあいまいなことである。まるでふるいのようでなんでも抜けて忘

れてしまうので、書きとめることにした。もしあなたの記憶が非常に確かで写真のように写し止めておくことができるなら、それは立派なものだ。けれども私は忘れっぽくて書かなければ忘れてしまう。中国の諺にも『最も強い記憶でも、最もうすい墨よりも弱い』というのがある」

ブックマン博士のこの「聞く」という特質が人の注目をひいたのである。一九三八年、スエーデンのストックホルム・テイドニンゲン紙にハーバート・グレビニウス氏は次のように書いている。「ブックマン博士の特質としては深くて明るい笑顔、きわめて示唆に富んだ言葉、そして自分は表に立たずにしかも大会を指導する特技などがあげられるが、それだけでは博士の全貌を知ることはできない。ためしに博士の写真をじっと見つめてみると、そこに何かを聞いてでもいるような表情が見える。数日間、博士のそばにいて親しく彼を見守っていると、どうしてよいかわからないといったような無力な表情を見かけることが多い。博士自身このことを隠そうともしない。彼のきわめて活動的な生活の基礎は実はそこにあるのである。すなわち、博士は瞬間々々神から与えられる導きを求めているということである。博士はあたかも風がはらむのを待つ帆のような人で、非常に大きなあたたかい、しかもへりくだった心の持ち主である。すべての人に神のみのもつ真の自由を与えようとつとめている、いわばほんとうの民主主義者なのである」

また、他の新聞の編集長はこのように書いている。「ブックマン博士は常に神の意志の中に行

動の方向と力の源泉を求めて生きている。この点を把握しない限りブックマン博士を理解することはできない。博士はこれが健全な人間の自然の生き方だと言っている」

ブックマン博士は言う。「私はペン州立大学でもう一つ別のことを学んだ。ビルがお酒を学生たちに売ると、きっとその晩には何人かが泥酔して運びだされた。学生たちの中には、酒のために一生を台なしにしてしまった人もいた。

神の道から離れてしまったとき、人々は救いがたい生活に陥ってゆく。そのとき唯一のよりどころとなるものは、つねに自分を愛し、その生活を一変させてくれることができる人がいるものだという事実である。そのような力をもった人のところには、夜となく昼となくあらゆる種類の人々が答を求めて集まってくるであろう。

これはすべての人が求めている秘訣である。そしてきわめて大切なことである。子供たちの将来のためにわれわれはこの秘訣を学ばなければならない。子供たちがあなたのところにきて素直に自分のことを話せるようでなければいけない。あなたもまた子供たちに率直に自分のことを話せるようでなければならない。それが子供たちの信頼をかちとる道であり、今日ここにたくさんの若い人たちが集まっているのはそのためなのだ。青年は自分を理解してくれる人、そして善良ぶったり利口ぶったりせず、自分について正直な人のところへ行くものである」

すでにそのころ、ブックマン博士は自分自身の生活に規律をもたなければ道義的に敗北している人を助けることができないことを学んだ。正直、純潔、無私、愛の絶対標準について博士はこう言っている。「これはキリストの教えた標準である。これが諸君の標準になっているだろうか」しかし、だからといって、博士は人に規則をおしつけるようなことをしなかった。MRAは「小羊も歩いてわたれるかと思えば象のような大きな動物が泳ぐこともできる湖のようなもの」と博士は説明した。

またある時こうも言っている。「MRAは多かれ少なかれすべての人の心の中にある。われわれの仕事はそれを高めることである」

しかし、ビル・ピックルのような男の生活を台なしにした酒の害悪を博士は忘れなかった。ビル・ピックルはもしブックマン博士やその友だちが、たとえ一滴でもお酒を飲んでいたならば決して神への信仰を得ることはできなかったであろう。ブックマン博士は次のように言っている。

「私はいつでもお酒を飲めるような環境に育った。しかし、ビル・ピックルのような男のために私は一滴も飲まないことにしている。カクテル一杯でも口にしたらああいう男は救えない。酒を飲むことが悪いといっているのではない。だれでも正しいと思うことをすればよいのだ。しかし私はビルのような男のことを考えざるを得ない。

煙草についても同じことがいえる。私は煙草を吸わないがあなたにも吸うなといっているわけではない。そのころのビルはニコチン中毒だった。ところが不思議なことに彼がチェンジしたときそういうものが全部いらなくなってしまった。私が何もいわないのに煙草も酒もやめてしまった。こういったものは元来小さな悪習ともいうべきもので、私はこれを罪とはよばないが、それにもかかわらずこれが全生涯の鍵となっていることがしばしばある」

結局、問題は自分の快楽を中心として生きるか他人のために生きていくかの違いだと博士は信じていた。あるスコットランドの青年は、自分は非の打ちどころのない生活をしていると信じていたが、人を変えるということになると全く無力であった。ところがブックマン博士と親しくなってから、彼も人を変えることができるようになった。彼はこう言った。「私は酔っぱらいの友人たちに誘惑されるようなことはなかったが、かといって彼らに酒をやめさせることもできなかった」

ブックマン博士は「他の人の心をかちとることができないのは、こちらのどこかに罪があるからだ」と信じていた。

この言葉は多くの人を怒らせたが、博士が言おうとしたことは自分のまわりの人たちが、恐れ憎しみ、不純潔などの問題に答を見出していないときには自分のどこかに間違いがあるというこ

となのだ。

第三の転機は一九一二年、カナダを汽車で旅行していたときのことである。突然、目がひらいたように博士はキリスト教は、元来、道義的なバックボーンをもっていたのだと確信した。あまりにも多くの善意にみちたクリスチャンが国のあり方はいうに及ばず、家庭生活に対しても全く影響力を失っているのは、口にキリストを唱えながら生活は妥協にみちたものであるからだということをはっきりみてとった。真実の信仰の経験というものは必ず深い道義的な改変を伴うものであることをさとった。口に信仰を説きながら生活の汚れている人は神の力が人々に働くのを阻止していることを彼は知った。

もうひとつの大きな転機は、一九二一年のことであった。博士は当時、軍縮会議に出席しているイギリスのある将校からワシントンに招待を受けた。博士はそこで人々の気のつかないことに気がついた。すなわち、大戦争は終結したが、今や文明自体の崩壊がはじまろうとしているということだった。それまで受け入れられていたあらゆる道義的価値がすべて崩壊し、否定し去られようとしていたのである。

このイギリスの将校がブックマン博士に送ってきた絵葉書には人の顔がえがかれていて、その

下には「神は人間に二つの耳と一つの口を与えた。なぜしゃべる二倍聞こうとしないのか」と書いてあった。

夜行でワシントンに向かったブックマン博士は一晩中絶え間ない車の音に耳をかたむけていた。その音に合わせて心の中にひとつの声がはっきりと聞こえていた。「辞職、辞職、辞職」当時、彼はニューイングランドのある大学で安定した職についていた。しかしワシントンについた時にはすでに彼の心はきまっていた。彼は辞職した。それ以来、生涯を通じて彼は二度と職についたことはなかった。つまり彼は世俗的なすべての安定を断ち切って神の手に運命を託したのである。

まもなく博士はヨーロッパへ行った。ある月の夜、彼はケンブリッジに旅装をといた。彼の心は世界をおおいつくす巨大な混迷にうちひしがれる思いだった。どの国も地すべりのような道義の崩壊を経験していた。戦争による憎しみと恐れは増大の一途をたどり、信仰はくずれ、家庭生活はみだれるにまかせ、懐疑的な観念論の遊戯が流行する一方、共産主義が世界的新興勢力として急激に抬頭しつつあった。このような現実に直面し、その対策を考えあぐんでいた博士の心に突然鋭くひらめいた考えがあった。「お前の生涯は世界を再造するために用いられるだろう」

彼はおそれた。この考えの余りの大きさに圧倒されて三日間、だれにも話さなかった。何年も

前から頭に浮かぶ考えを紙に書くという習慣ができていたのに、この考えだけはどうしても書けなかった。それなのに同じ考えがくり返しくり返し浮かぶのであった。博士は自分には到底そんな力がないということをよく知っていた。しかし同時に一人の人間が完全に神の意志に従うときに、神はその人をとおして驚くべきことをなしうることを博士は信じた。

ついに博士はこの考えを自分に対する挑戦として、また使命として受け入れる決心をしたのである。

それからまもなくオックスフォード大学の一室において博士は二、三人の友人を前にしてこう言った。「われわれの数は少ない。しかし、われわれが心をひとつにしていっさいをなげうち、神の意志と信ずることだけをひとすじに行なうならば、やがて神はわれわれを使って世界の考え方、あり方を一変させていくであろう」

こうした決意がブックマン博士を単なる信仰の人からイデオロギーの人に変えていった。そして、そのような決意から生まれてきた深い洞察力と世界観が近代史の方向を変えることになったのである。

ベテランの外交官で戦後、ソ連その他の国々との交渉に積極的に働いたある人がブックマン博

士について次のように語っている。「博士は三つのことをした。第一は博士はわれわれよりずっと早くから問題の根本がどこにあるかを見抜いていた。第二に博士は人の生活の変化を通して問題に解答を見出した。第三には一番困難なことであったが、あらゆる大陸に勢力を築きあげこれによって、この解答を世界にもたらしたのである」

三　不左不右一直前進

ブックマン博士の友情は、長つづきすることがその特徴であった。ある人と友だちになると往往にして、その孫、曾孫の代までつづくのであった。博士は一九一五年（大正四年）以来、何回もアジアを訪れているが、最初に彼を迎えたのは日本の近代産業の父といわれる渋沢栄一翁であった。以来五代にわたって栄一翁の曾々孫たちまで世界再造の一役をになっている。

その同じ年、博士はインドでガンジー翁に会っている。その友情も生涯つづいた。ガンジー翁はＭＲＡのことを「西欧の生んだ最もすぐれたもの」と評した。ヒンドスタン・タイムズ紙の社長兼編集長であったガンジーの令息、デバダス・ガンジー氏は「もしＭＲＡが成功しないようなら、全世界が崩壊するだろう」と言った。ガンジー翁がその昔、南アフリカで発行したインディ

ア・オピニオン紙の編集長をつとめているもうひとりの令息、マニラル・ガンジー氏は「MRAは南アフリカにおいて、人種問題解決の新しい基盤を提供している」と言いこのテーマに基づいた特集号を発行した。翁の令孫ラジモハン・ガンジー氏は数年前、新聞の仕事をやめて、今はMRAを全世界にもたらすため、全生涯をささげて働いている。

ブックマン博士の友情の秘訣はすみやかに人の生活の根本にふれていくことであった。かつて有名なリットン卿がインドの総督代理をしていたころ、ブックマン博士と親交をもっていたが、晩年、当時を回顧して次のように言っている。「ブックマン博士との友情は他のどの交友関係よりも得がたいものであった」英国とインドの関係が非常に緊迫しているときでもブックマン博士は両方から信頼をもって迎えられた。これは他に全く類例を見ないことであった。

ベルゴーム会議の最中のことである。博士は、時の総督と昼食を共にしていた。「どこからおいででした?」との問に対し、博士は答えた。「ベルゴームに行っていました」

「ベルゴームですって? まさかアリ兄弟に会わなかったでしょうね。彼らはけしからん人たちです」当時、アリ兄弟はイギリス人を暴力をもって国外に追放しようという策動の急先鋒であった。

ブックマン博士は、さりげなく「けしからんとおっしゃいますけれど、私は彼らと友だちづき

合いをしています」といって食事をつづけた。総督は興味をもって、さらにくわしく自分の立場を説明したのち、「あなたが私の立場だったらどうしますか」ときいた。

博士は食べる手を休めて、「それなら申しますが、私だったらあなたが私にしてくださったように食事に招待して正客としてもてなします」と言った。

総督は驚いて、いらだたしげな表情をした。しかし、考えなおして彼は博士の提案に従った。アリ兄弟は総督の招待を受け入れて、総督の左右にすわって食事をした。その後、二人は総督の支持のもとにセント・ジェームス宮殿の会議にインド代表として出席した。この会議はのちにインド独立に至る長い道程に、重要な一段階を画するに至った。

また、ミント卿がインド総督であった時、その夫人は姉妹のアントリム夫人とともにブックマン博士と親交が厚かった。今日、アントリム夫人の曾孫はＭＲＡのために働いている。

ミント夫人とアントリム夫人はブックマン博士とともに世界各地を旅行した。中東へ行ったとき、一行はキプロス島で半日を過ごすこととなった。彼らはラーナカというところでタクシーをやとい、いなかへドライブした。それから約二十年後にキプロス島に駐在している数人のイギリス兵がそのときの運転手に出会った。彼は二十年前、ブックマン博士をのせて運転したことで、自分の生涯の方向が変ってしまったと語った。キプロス島で英国との間に流血の惨事がおこって

いる最中にも、このタクシーの運転手は、MRAに関係のあるイギリス人たちとともに、問題の解決に力をつくしたのである。

二十数年前、ブックマン博士はインドのマドラスで、あるホテルに滞在していた。最近になって博士の友人の一人がこのホテルに泊った。ところがクローク係のボーイが彼を博士の友人と知っていきなり足もとにひれふして、次のように言った。「先生はどこでしょう。私は先生のことが忘れられません。長い年月、時には食べるものも仕事もないことがありましたが、先生のお陰で私と家族は仕合わせな心をもちつづけることができました」

ブックマン博士がガンジー翁に会ってから四十年後、その令孫ラジモハン・ガンジーはイギリスで若い新聞記者として働いていた。ブックマン博士のすばらしい業績に感激して、彼は自分の仕事をやめてMRAを天職として受け入れる決心をした。ところがインドの指導者のひとりがこれに反対して新聞人として生きることが彼の義務であると説いた。ラジモハンは答えた。「私の祖父が南アフリカから帰ってきたとき、家族は弁護士の仕事をつづけるよう要請したものでした。しかし、祖父はインド解放のために自分の生活を捨てたのです。今日ではひとつの国を自由にするよりも、もっと大きな仕事があります。それは全世界を独裁と腐敗と戦争から救うことで

す。私はMRAの仕事に専心します」

それから一年以上たってから、ガンジーはこの人と再会した。車に乗ろうとしたとき、ラジモハンは一歩下がって年上のその人を先に乗せようとした。ところがこの人はラジモハンを先に乗せると言ってきかなかった。「あなたの決心が正しかったことを私は認めます。その証拠に今日はあなたが先に乗ってください」と言うのだった。

一九六〇年、プラサド大統領はラジモハンと数人の友人たちを官邸に招き、「MRAの仕事は、今日のインドにとって最も大切なことである」と言って称賛した。

ラジモハンの変り方は家族全体に非常な影響を与えた。

「母と十五になる弟はスイスのコーで開かれているMRA大会にきました。弟はチェンジする決心をして、自分の一生を四つの絶対標準に照らし、すべてを母に正直に話しました。その中には学校の成績簿をごまかしたことなどもありました。『実はあの時、ぼくのとったのは九点だったのをゼロを書き足して九〇点にしちゃったんだよ』と弟は母に言いました。

ところがそれ以来、弟は国を救おうという非常な情熱を持つようになりました。『大統領にMRAの〝最高の経験〟という映画を見せよう』と言い出しました。十五の少年がそんなことを考えるのは、気違い沙汰だという人もありました。

しかし、インドに帰ると、弟はあちこち電話をかけたり、手紙を書いたりしていましたが、二週間後には実際、その映画を大統領に見せることになりました。しかも、大統領とその家族だけでなく、閣僚や軍の指導者もいっしょに見たのです。つまり、弟は国のために正しいと思うことを実行する心の自由を得たのだと思います」

インド一の金持ちがあるときカルカッタでブックマン博士に会った。博士はちょうど数人の友人たちと、ガイダンスをもとうとしていたところだった。インド人は様子がわからないまま黙ってすわっていた。やがて博士は言った。「不思議な考えが浮かんだのだが、『盗みをやめろ』というのだ。どういう意味なのか私にはさっぱりわからない。この間、時計を盗まれたが、そのことか、それとも自分のことかもしれない。もっとも最近は何も盗んだ覚えはないけれど、不思議な考えだ」このとき、くだんのインド人はそそくさと部屋を出ていった。

「あれは一体だれだったのか、だれか紹介してくれればよかったのに。会いたかった」と博士は言った。次の日、そのインド人は再びやってきた。

「どうして博士が私のことを知っていたのか、全く不思議だ。実は長年の間、私は税金をごまかしていたのです」その朝、彼は何千ルピーかの小切手を税務署にとどけてきたばかりであっ

た。そして彼はブックマン博士と二百人にあまる勢力を招待して、カルカッタの実業家たちに会わせた。その人たちに向かって、彼は今後正直な人生を送る決意をしたことを語った。

一九一七年、博士は中国を訪れて、孫文などと親交をむすんだ。博士と孫文とはあるセメント工場の地下室で会うのをつねとした。そこには三つの出入り口があった。迫われる身の孫文は、そういう安全な隠れ場所以外に出歩くことを好まなかった。ブックマン博士とのこうした会見は自分の一生に大きく影響したと孫文は述懐し、博士については、「私のことを率直に話してくれたただひとりの人だ」と言っている。

当時、博士はまた金持ちの弁護士、兼外交官ともつきあっていた。彼はばくちが好きだった。ある日、彼は自宅に博士を招待し、酒や高級たばこをすすめた。もちろん博士はこれを受けなかった。この人の指先はやにでよごれ、いすに腰かけている時でも、小きざみにけいれんしていた。二人は食事前にテニスを楽しんだ。食事は豪勢をきわめ、三十種類もの皿が次々と運ばれ、一皿ごとと言っていいくらい数多くの酒がつがれた。

この話をするたびに博士は二十年がかりで味つけした卵がチーズの味をしていたこととか、なまこや、つばめの巣のスープだとか、いろいろの甘味に浸した菊の葉などを思い出すのであっ

た。食事の終るころ、弁護士は大分めいていしていて、博士をかごで宿まで送ろうと言い出した。しかも六人の苦力にかつがせようというのだった。「人間というものは自分に一番必要なものを人に与えようとするものだ。私はかごなどいらなかったのだが、彼は一人で立っていられないくらいであった。ともかく、その晩は彼の好意を無にしないために、私はかごに乗ってかえった」と博士は当時のことを語っている。

次の夜、こんどは博士がその弁護士を自宅に招待した。食事をしながら博士はガイダンスについて話をし、次のような経験を語った。ある夕方、博士が散歩をしていた時、急に少し先を歩いて行く男に話しかけるべきだという考えが浮かんで来た。「あの男は悩んでいる」とはっきり感じた。しかし、あまり唐突なので、信じることができなかった。そこで、「もし彼が次の電柱のところで立ち止まるようなら思いきって話しかけよう」と考えた。ところが、男は電柱のところでピタリと止まった。博士はつかつかと近寄った。「失礼ですが、何かお困りのことでもあるんじゃないですか」。「ええ、困っているのです。どうしておわかりになりました？　ちょっと、外の空気を吸おうと思って出てきたのですが、実は母がそこの病院で死にかけているのです。弟妹が七人もいるのですが、全く途方にくれているのです」

博士はその男といっしょに病院に行き、いっしょに祈った。以来その家族は博士の仕事に興味

を持つようになり、いまでも連絡を保っているのだった。

博士が話し終ると中国人は言った。「私のような人間にも神は話しかけると思いますか」

「もちろん、思いますとも」と博士は答えた。

外はいつかひどい嵐になっていた。博士は中国人に泊って行くようにすすめた。

「でも妻が待っていますから」

「何も今日、はじめて待たすわけでもないでしょう」と博士は言った。中国人は笑いながら、うなずいた。そして今度は苦力(クーリー)を帰してやらなければと言った。博士は最近、三人の苦力(クーリー)が近くの谷で虎に食われた話をして、きっと彼らも泊りたがっているだろうと言った。ついに中国人は泊ることになった。

その夜、博士は弁護士に聖書の中の好きな章を読むように頼んだ。彼は特に好きなところも思い当たらないので、手あたりまかせに開いてよみ出した。ぐあいのわるいことに、そこは人の名前ばかりが並んでいる個所だった。でも彼は終りまでがまんしてよみおえた。そこで二人はお祈りをして床についた。次の朝、弁護士は聖書をよんだお陰で眠くなって、よく眠れたと言った。

博士はそこで言った。「それじゃもう一章よみますか」

弁護士はすかさず、「こんどはあなたが読んでください」と言った。博士はコリント前書の六

章九節から十一節までを読んだ。

弁護士は目を丸くした。「そんなことが聖書に書いてあったんですか。まるで私のことじゃありませんか。実をいいますと、夕べ泊りたくなかったのは、睡眠薬を飲まないと寝られないからなんです。眠るために薬をのみ、目をさますためにまた別の薬を飲んでいるというありさまなんです。このことは本当はだれにも言ったことはないのです」

この男はチェンジした。そして多くの人々に自分が生活の敗北と妥協の中から、いかにして神によって救われたかを話すようになった。彼は妻にも正直になり、家庭は一変した。この人のチェンジはすぐに中国の指導者たちの間に知れわたった。孫文もこのような人のチェンジを通して、ブックマン博士との親交を持つようになったのである。

当時、中国にいたルイス牧師は二十八年の滞在の記録の中でブックマン博士とその友人たちの仕事ほど、中国の最高指導層に影響を与えたものはなかったと報告している。

ブックマン博士はこのころ、いわゆるクリスチャンと称する人たちの生活の中にも頽廃があることを見ぬきはじめた。キリストの福音を口にしながら、生活の中では道義的に敗北している人たちの問題を博士は追及しはじめた。同時にまた同性愛などの悪徳におぼれて、チェンジを拒否する人たちはブックマン博士の鋭い挑戦を感じると、積極的にこれに敵対し、悪意にみちた根強

い反対運動を展開することをはじめて経験したのもこのころであった。

さらにまた、中国においてブックマン博士ははじめて共産主義者の反対に出会った。この人たちは、もし神の権威というものが正しい意味で世界に確立されたならば、彼らの革命は成功の機会を失ってしまうことをよく知っていた。レーニンは共産主義革命について次のようにのべている。「神の概念が人の心から完全に抹殺されるまで、われわれの革命は成功しないであろう」

インドでも、当時ブックマン博士との交友を通じて、人々の生活の中に数々の奇跡が起こっていた。

一九一五年、マドラスではじめてガンジー翁に会ったころ、博士は有名な私立学校の校長に招待されて、ヒマラヤ山中の夏季キャンプへ行った。そこではヴィクターという少年が反抗的で先生たちは手をやいていた。テントをささえている杭を突然ぬいて中の人を驚かしたり、いたずらばかりしていた。集会にはいっさい出席しないし、教師たちも困ってこの子を家にかえすことに決めた。

ブックマン博士は校長に聞いた。「その子と直接にお話しになったのですか」

「いえ。われわれの間では話しましたが、直接には話したことはありません。あなたからひと

つ話して見てくださいませんか」

博士は引きうけた。校長は朝の十時半に少年をおくると約束した。ところがヴィクターは現われなかった。昼食の時、校長は早速様子をたずねた。

「ヴィクターはこなかったんですよ」と博士は答えた。

「しようがないですね。行くと約束したのに」

「ノーというところをイエスと言ってしまう人がよくあるものです。それじゃこんど二時半に来るように言ってくださいませんか」

みんなが昼寝をしている間も、博士は寝ないで少年を待った。しかし、ヴィクターは姿を見せなかった。午後のお茶の時に、校長は、「私にはあんなに約束したのに」と言った。

その夜は美しい十五夜だった。ヴィクターは博士に会いに来ると言っていたが、またしても川にボートを漕ぎに行ってしまった。「無理もない。こんな美しい夜だもの」とブックマン博士はつぶやいた。

次の朝の十一時ごろ、「ヴィクターがいました。すぐきてください」と校長は息せききって、駆けて来た。博士が急いで行ってみると、ヴィクターはもう一人の少年と竹の棒をクルクル回して遊んでいた。ちょうど、軍楽隊の先頭に立つ指揮官が指揮棒を宙にほうりあげたり、回したり

するようにして。

ブックマン博士はヴィクターに近づきながら、「とてもじょうずだね、ぼくにもやらしてくれないか」と言った。

ヴィクターはいつも年上の人が近づくと逃げていくのだったが、このときは、「やってごらんよ」と言った。

博士はやってみたが失敗した。その失敗がヴィクターを喜ばせた。そこで博士は腰をおろして言った。

「子供のころ、ぼくもキャンプに行かされたけど、大きらいだったよ」

「あんたもそうだったの、ぼくもそうなんだ」とヴィクターは言った。

そして彼はテントの杭をぬいたり、いろいろな人を困らせていることを話した。「ぼくの中には何か悪い虫がいるんだ。自分ではどうにもならないんだ」

しばらく話しあったのち、ヴィクターはふと言った。

「悪いとは思っているんだよ」

「そうか、どのくらい、悪いと思っているのかね、後悔することもあるのかい」

「うん、後悔はするよ。だけどだめなんだよ。後悔してもまたやっちゃうんだよ」

「それじゃ、しようがないねえ」

「うん、本当は〝悔い改め〟ってやつが必要なんだ。もう二度としないほど悪いと思わなけりゃだめなんだよ」とヴィクターは言った。

ブックマン博士はこの子が〝後悔〟と〝悔い改め〟とをはっきり区別しているのに感心して、それ以来自分もこの区別をしばしば用いるようになった。

そこで博士は少年に言った。

「君のいい友だちになれる人がいるんだよ。いつもわかってくれて、いつもいっしょにいてくれて、それだけでなく、面白くってもう逃げだす必要のないような人がいるんだよ」

「わかっているよ。キリストのことだろう。ぼくも友だちになりたいんだ。だけど、どうしたらいいかわからないんだよ」とヴィクターは言った。

ヒマラヤを見わたす丘の上で、ブックマン博士はその少年に〝罪〟について話をした。罪というものは結局自分の〝我〟であって、神と人間の間を隔て、他人と自分との間をも引きはなすものだということなどを話した。そして博士自身がひざまずいて、自分の罪も欲望もすべてを、神の手に無条件でゆだねる決心をしたときのことを話した。

「そういうことなら、ぼくもやってみたい」と言って、ヴィクターは博士といっしょにひざま

ずいて祈った。

「ぼくには、自分がどうにもならないんです。神さま、なんとかしてください」

あとでヴィクターはこう言った。「なんだか重くて、きたない荷物がなくなったような気がします。みんなに話してやらなくちゃあ」

「そうだね。キリストが君の一番の友だちになったんだから、みんなに紹介しなくちゃ悪いわけだね」とブックマン博士は言った。

夏休みも終って、キャンプが解散するとき、校長はブックマン博士に言った。「一体、ヴィクターはどうしたんですか。まるで別人みたいに変りましたね」

「それはヴィクターにお聞きになったらいいでしょう」とブックマン博士は答えた。

ところが、ヴィクターは見あたらなかった。彼は警官が一人のインド人をつかまえて、手錠をかけてつれていくのを見たのだった。彼はかけより、同情をこめてインド人に話しかけた。「ぼくもついこの間まで、あなたと同じようにしばられていたんだよ。ぼくの場合はね、罪がぼくをしばっていたんだ。昔、パウロっていう人がいてね、牢屋につながれていても、心は自由だったんだよ。あなたもそういうふうに自由になれるんだよ。出てきたらまた会おうね。そして、もっといろんなことを話そうよ」ヴィクターはこう言って、かたわらで売っているライスカレーを買

ってやった。

数ヵ月後に、ブックマン博士がヴィクターの学校に行ってみると、彼の友だちがたくさんチェンジしていた。その中には回教徒の学生も、ヒンズー教徒も、イギリス人の少年もいた。

この話はインドのすみずみまで伝えられた。のちにブックマン博士がある牧師に会ったときも、「わざわざご紹介には及びません。わたしはヴィクターに会ったのです」と言ったほどである。そればかりか、この牧師はケンブリッジ大学で学んでいる親類の青年に対しても同じことをしてほしいと頼んだ。このすすめによって博士はケンブリッジ大学に行き、その後さらにオックスフォード大学に行くことになった。そのオックスフォードが、MRAの世界的発展の出発点となったのである。

このインドの少年や中国の弁護士に対して示されたブックマン博士の秘訣は、生涯を通じて変ることがなかった。

一九五九年のある日、日本の千葉三郎代議士がブックマン博士を訪れて、一日を過ごすことになった。彼は当時、治安対策委員長の要職にあった。

博士の友人たちは、「千葉氏はアジア、欧州、米国と長い旅行のあとだから、いい部屋と十分

な休息が必要にちがいない」と言った。ところが博士は、「休息だって？　とんでもない。この人の上に国の将来がかかっているのだ。一分だってむだにしないで、できるだけ深いチェンジの経験をしてもらおう」と言った。

千葉氏は夫人といっしょに到着した。態度はていねいであったが、はじめはやや警戒的だった。朝食は八時十五分からはじまったが、みなが席を立ったときは、十一時四十分だった。その間、ブックマン博士やその友人たちは、世界中におけるＭＲＡの活動について千葉氏に語った。人々がチェンジしたために、南アフリカ連邦や米国南部諸州で、人種問題が解決されつつあること。キプロス島のマカリオス大司教とトルコ人のクチュック博士がともどもに、「キプロスの民族抗争を解決したのはＭＲＡであった」と言ったこと。またドイツ、イタリア、インドのケララ州などでは共産主義者たち自身が、ＭＲＡが共産主義に優る思想であることを認めて、「ＭＲＡは新しい型の人間を作り、人間の心の底にある一番深い問題にも解決を与えている」と言っていることなどを話した。

朝食後も、千葉氏は庭を散歩しながら、いろいろと話しあった。昼食には大へんにおいしい日本料理が出た。千葉氏は感激して、料理した人たちにあいたいと言って台所に行った。そこで彼は思いがけず、ウォール街の大銀行家の娘に会った。

彼女はブックマン博士をたずねるお客に、最も心のこもった料理をつくるために無報酬で働いていると言った。千葉氏はおどろいて、博士に言った。「こんなお金持ちのお嬢さんがこの思想のために自分からすすんで料理人になって、あんなおいしい料理をつくり、しかも一銭の給料も要求しないなんて、これはよほど大きな考え方ですね」

その夕方、千葉氏夫妻が別れをつげようとした時、ブックマン博士は、「今朝早く、あなたについて一つの考えが浮かびました」と言った。

「どんなことでしょう」

「全世界があなたの心にはいってくるだろう。そしてあなたは全世界を心の中に入れるだろう」

千葉氏は帰途、飛行場で見送りの人たちに向かって、こう言った。「今日、私はブックマン博士の中に神さまを見たような気がしました。私はすっかり考えを改めました」

その後、千葉氏の全家族がチェンジした。令孫の笑子さんは、今MRAの勢力の中で働いている。彼女は家族の一人々々に手紙を書いて、自分の間違っていた点についてあやまった。その結果、両親の考えも変ってきた。笑子さんの妹はどちらかと言えば、冷たい感じを与えるほど頭のいい人であった。彼女も変って、たくさんの友だちから慕われる心の暖かい人になった。千葉氏

の令息も変りはじめた。あるとき、彼は夜中の二時にお父さんの部屋の前をいきつ、戻りつ、考えこんでいたが、ついに勇気をふるい起こして、中にはいって、正直になった。

「私の息子は善悪を見わけるようになった。孫は人生の方向を見出した。私自身は、だれに向かっても、どんなことでも言うことのできる勇気を得た」と千葉氏は述懐している。

千葉氏は四百三十万の会員を有する日本の青年団の指導者の考え方を変えたという話に興味をもった。ソ連が青年指導者を百名以上もモスクワに招待したと聞くと、ブックマン博士は直ちに青年団に電報を打って、同じ数の人たちをＭＲＡ大会に招待した。議論百出ののち、結局百二名がＭＲＡにきて、わずかに七名がモスクワに行った。

三ヵ月間、ブックマン博士と彼の友人たちは、彼らに道義的なチェンジを与えるために夜となく、昼となく働きつづけた。多くの者はマルクス主義者で、反西欧的であった。道義的にも混乱していて、彼らの生活の中からありとあらゆる問題が浮かび上がってきた。姦通、私生児、同性愛、手淫、近親相姦、断種、堕胎、麻薬、金銭に対する不正直など、ひとつひとつについて徹底的な戦いがすすめられた。三ヵ月も過ぎるころには、この青年たちの大部分は変っていた。帰国後の彼らの働きによって、それ以来青年団役員の改選にあたっては、つねに共産主義の候補者は

落選し、MRAの訓練を経た人々が大多数を占めるようになった。ある共産主義者は、「君たちのおかげで完敗した」と言った。「それはわれわれじゃない。思想の力なのだ」とMRAの人は答えた。共産主義者はつづけた。「MRAは買収できない人を作り出した。それが敗因だった」

アイゼンハワー大統領の賓客としてブレア・ハウスに滞在していた当時の岸総理は、ワシントンからブックマン博士に電話をかけて、日本の青年たちに対する博士の指導に感謝した。博士はこのとき、「ここで青年たちは右でなく左でなく、まっ直ぐに生きることを学んでいるのです」と言った。帰国後、岸総理は記者会見のとき、自分は日本を右でもなく、左でもなく、まっ直ぐに導きたいのだと発表した。その後スイスのコーで岸前総理はこう言った。「もしMRAがもっと推進されていたなら、一九六〇年のような危機は起こらなかったであろう」

この一九六〇年の危機とは、日米安保条約改定をめぐって、アイゼンハワー大統領訪日阻止にまで至った全学連デモを中心とする騒動のことである。その後、この日本の学生たちが、MRAの訓練を受けるためにヨーロッパにきた。彼らはチェンジした。そして、彼らは学生の中にあって共産党が資金面をもふくむ活発な活動をしていたことについて語った。間もなく、彼らは〝タイガー（虎）〟という劇を書いた。この劇の中で学生たちは非常な情熱と正直さをもって、人々

の道義的妥協が、現実に国々を腐敗し、共産化する原因となっていることを訴えた。

この劇はドイツとフランスにおける広範囲な上演ののち、アメリカに行った。そこでは、アイゼンハワー大統領の新聞係秘書で羽田空港事件の中心人物となったジェームズ・ハガチー氏もこれを見にきた。

劇のあと、ハガチー氏は学生たちに会った。彼は特に学生のひとりを羽田空港以来よく見おぼえていた。

「君の顔をよく覚えているよ」

「ええ、あなたの車のそばにいましたから」

「そばにいたって言うけれど、大へんな元気で、今にも車の上にのぼらんばかりだったじゃないか」と笑った。そして学生たちの謝罪に答え「謝罪の必要はない。この劇にもられた精神こそが、どんなにありがたいかわからない」と言い、この劇は人間のチェンジを如実に示し、さらに東西両陣営共通の唯物主義に答えるすぐれたイデオロギーをきわめて明確に表わしていると結んだ。

次に学生たちはアイゼンハワー前大統領に会った。アイゼンハワーは非常に喜んで、「私は君たちを百パーセント支持する。こんどはひとつぜひ南米に行って諸君の確信のほどを伝えてほし

い」と言った。

やがて学生たちはブラジル、ペルーをはじめ、南米大陸を席巻した。五ヵ月間に百万以上の人たちが劇場やスタジアムで観劇し、彼らの確信を聞いた。また、テレビをとおして二千万の人たちが劇を見た。南米第一のシャトーブリアン系のラジオ、新聞網がこれをとりあげ、その他の報道機関と相まって、一日に七千万以上の人たちがこのニューズに接したこともしばしばであった。

ブラジルの大統領は彼らの活躍を聞き、直ちに陸海空軍に命じて、一行二百名の輸送に当らせることにした。彼らの旅程はブラジルだけでも、二万四千キロにのぼった。多くの土地は非常な貧困と憎しみにみちていて、ある町では彼らの行く二週間前に戦車が出動して暴動をしずめたというようなところもあった。

ブラジルの大統領が突然辞職したとき、国は内乱直前の状態となった。その時、劇「タイガー」によって新しい考え方をもち、勇気をもって戦う一群の人々が、冷静、的確に事に処し、国を守った。南米有数の革命家で、かつてはモスクワから派遣され、ペルーその他の国で共産党の草分けともなったユドシオ・ラビーネス氏は「ブラジルを内乱から救ったのは、MRAと劇『タイガー』であった」と語った。

四　天上の炎

ブックマン博士は一九三一年にはじめて南米に行った。そのとき、博士を迎えたのは、まえに中国で知りあった例の弁護士であった。彼は当時チリー駐在の中国公使であった。

公使は博士を公式の晩餐会に招き、列席した外交官や国の指導者たちに自分がかつてチェンジしたときの体験を話した。チェンジしたあと、彼は生まれ故郷で知事をつとめることとなった。そのころ、ひとりのソ連の工作員が彼をたずねてきた。彼はその州を共産化する使命をおびていた。その男は知事に向かって、彼の施政の中における道義的な戦いをやめることを要求し、もしそれをきかないならば、暴動をおこして彼を殺し、その首をさらしものにすると言って脅迫した。彼はたとえ首をきられても、自分の信念をまげることはできないと言いきり、「イエス・キ

リストに私は忠誠を誓っている。彼を裏ぎることはできない」と言ったのだと話した。

ブックマン博士は次にペルーへ行った。そのとき、ベンチンク卿という人が英国大使として駐在していた。大使は親類のヘッケレン家の人たちがチェンジしたのを見て興味をもち、ブックマン博士と友だちになった。ヘッケレン家の人たちは今でもMRAとともに働いている。

ベンチンク卿は博士にペルー人のタクシーの運転手を紹介した。この運転手はすっかりブックマン博士が好きになって、リマ滞在中はずっと博士の運転手として働いた。博士はたびたび運転手の家庭を訪問して、その家族とも知り合いになった。お客がわざわざ家をたずねてくれたことは彼にとってはじめての経験であった。家族はチェンジした。

ペルー人は情熱的な国民で、多くの人はきわめて貧しかった。当時また革命がおこった。ちょうど、英国皇太子がリマ滞在中であった。治安当局は身辺をきづかって皇太子を一歩も宿から出さなかった。町にはバリケードが作られた。至るところに銃声がとどろき、人々が次々と殺されていった。有名なハンガリーの共産主義者ベラ・クンもリマにいて、英国皇太子や博士と同じホテルにとまっていた。ベラ・クンはペルーおよび南米全域にわたって共産革命を画策していたのである。

この騒ぎの最中にいつもの運転手がホテルに現われて言った。「実はこの革命をやっている連

中は私の友だちなんです。私は彼らの計画や目的をよく知っています。ですから、私はどこへでも行けるんです。銃声やバリケードにお構いなく、もしお出かけになりたければ、どこへでもお供します」

ブックマン博士は即座にその申し出を受けた。革命のあいだじゅう、博士とその友人たちは彼の車で自由に市中をゆききすることができた。このような事件や、また南米全域にわたる革命的な状況の中で得た体験は、ブックマン博士のその後の考え方に深い影響を与えた。その年の暮れ、博士はスコットランドのアバディン大学の学生たちに話をした。南米の革命的な状況について語ってから、彼は言った。

「町をやく炎が夜空を赤く染めているのを見ながら、私の心にひとつのガイダンスが炎で書かれたようにはっきりと浮かんできた。『今後の世界の危機に対処するには思いきって勇敢なリーダーシップが必要だ』と」

ブックマン博士はさらに南米のある国では、若い共産主義者たちが二人ずつ一組になって、政府要人のすべてに接近し、彼らの政策を共産党の欲する線にのせるために戦っている事実を語った。当時まだ、共産主義というものは一般の人はもちろん、政治家の間でも大した問題とはなっていなかった。共産主義者と言えば、ちょっと風変りで危険な人物ぐらいにしか考えられていな

かった。人々は共産主義を好まなかったが、さりとて真剣にとりあげるわけでもなかった。

しかし、ブックマン博士は彼らをきわめて真剣に取りあげていた。中国や南米での体験、さらに世界各地での出来事を総合して博士は、共産主義というものは文明の本質を変えて、全世界を無神論のイデオロギーで統一しようとする広範な戦いであるという結論に達した。しかもその戦いには現代の最も有能な人たちが参加し、絶え間なく、かしゃくなく、世界全体を通じて賢明に、かつ、強力にこれをおしすすめているのであった。博士はアバディン大学の学生たちに挑戦した。「すでに南米では共産主義者たちは行動を開始している。諸君の中に何人が生涯をかけて戦う覚悟をもっているだろうか。われわれは政府や政治家が正しい方向を見出すために全面的に戦わなければならない」

一人の学生が感動して博士の所にきて、その挑戦を受け入れたいとのべた。博士は、その仕事をするには彼自身の生活が正しく、清潔でなければならないということをはっきり言った。

「ぼくは世界に答えをもたらす一人になりたいのです。ぼくの生涯をあなたのしているその仕事に打ち込みたいのです」

それはスコットランドの駅のプラットホームでのことであった。ロンドンに帰ろうとする博士は青年を車中にまねいて、「一緒にガイダンスを持とう」と言った。博士は次のような考えをも

った「君は野心的だ。君はこの仕事を自分のためにやろうとしている。神のためでない。それではだめだ。『おのれのために栄光を求めず、キリストのみを求めよ』」

青年はその教えと挑戦を受け入れ、その後、三十年間、彼は博士とともに各国で戦いつづけた。博士はまた彼が亡くなる日まで、彼の人間としての真の成長のために戦い続けたのである。博士はユーモアも交じえて独特な方法で彼を訓練した。あるとき博士の一行がイギリスの南部からスコットランドまで遠い夜道をドライブした。ある町について、博士はそこで泊ろうと言ったが、運転をしていたこの学生は疲れきっていたにもかかわらず、なお目的地まで直行しようとがんばった。ブックマン博士は彼のために用意された部屋の前まで連れて行って、彼の名をしるしたカードを指さして笑いながら言った。

「君はスコットランド人のくせに、このインクをむだにする気かね」(これはスコットランド人のケチに対するかいぎゃく)青年も笑って泊ることにした。彼の中にあるかたくななプライドはブックマン博士との交友をとおしてこのようにしてくだかれていったのである。

彼はその後、ブラジルや南米の人たちにMRAをもたらすために大きな働きをした。その結果のひとつとして一九六一年には、南米から何百名の代表がMRAの訓練を受けるためにヨーロッ

パにきた。このことのかげにはベツレム将軍のようなひとたちの深い決意があったのであるが、ブックマン博士は〝巌と砂〟と題する演説の中にその経緯を詳しく物語っている。これは博士の逝去のわずか三ヵ月前に新聞、ラジオをとおして広く発表されたものである。

一月ほど前「道義の防壁が崩れている」と題してイースターのメッセージを発表したところ、直ちに非常な反響がありました。全世界にわたり各国のあらゆる階層の人々から「それが問題なのです。どうかわれわれの国に、そして世界に道義の防壁を打ちたてることを助けてください」という切実な叫びが寄せられました。

ブラジルのベツレム将軍も、今そのために戦っている一人です。

フロリダ州マイアミで将軍は南アメリカの指導者たちと会いました。ペルーの陸軍総司令官、ウルグァイの国会議長、アルゼンチンの陸軍大臣代理、チリーの建設大臣夫人、ブラジルの港湾労働者や実業界の指導者たち、さらにはペルーの共産党指導者であり、チリーの人民戦線を組織した人もそこに交っていました。

将軍はまた日本から来ていた井上元中将にも会ったし、劇「タイガー」に出演している青年にも会いました。カナダのインディアンの大酋長にも会見し、スイスの実業家、フランスやド

イツの組合指導者にも会いました。

そこには南アフリカで六十万のアフリカ人によって選出された代表者、フィリップ・ヴンラ氏もいました。この人は南アの警察が「最も危険な人物」と折紙をつけた人です。また南インドのヴァイテシュワラン氏もいました。彼は、六年間の党歴をもった元共産党員で、彼のチェンジこそがケララ州に共産主義に対する答を与える契機となりました。

米国の元ペルーおよびブラジル駐在大使をしていたポーレー氏の令息、英国の著名な作家ピーター・ハワード、コクラン提督もおりました。この人の大叔父はチリー、ペルー、ブラジル諸国の解放を助けた人です。

来合わせたジャマイカの指導者はこう言っていました。「カリブ海の現状に対しては、あなた方の考え方が唯一の希望だ。この答のためにわれわれはすべてを動員しなければならない。さもないとわれわれもまたキューバへの道を歩むことになるだろう」

ベツレム将軍は元ブラジルの大使としてボリビアおよびパキスタンに駐在していました。夫人とともに休暇でニューヨークにおもむく途中マイアミに立ち寄ったものです。この人々の話すのを聞いているうちに、彼はすっかり心をとらえられました。

この人々の間には厳のような融合と神に導かれた団結があったのです。これこそが南アメリ

カに対する答です。

一週間とたたないうちに将軍はこれをブラジルにもたらす決意をして、直ちにきびすを返して先発隊とともにブラジルに向かいました。

数日後には、さらに二十四ヵ国の百二十九名からなる大勢力が特別機でブラジルに出発しました。モンテビデオのエル・ペース紙はこれを評して「南米における史上最大の思想攻勢」と名づけました。将軍は母国ブラジルに堅実な思想的基盤を与えたいと思ったのです。それこそが世界のすべての指導精神の基礎とならなければならないものです。ベツレム将軍と行をともにした先発隊の中には、マハトマ・ガンジーの令孫ラジモハン・ガンジー、コクラン提督、ヴァイテシュワラン氏、そして日本の実業家三井高維氏もいました。

やがて本隊の勢力が到着したときには、ラジオ、テレビ、新聞が総出で迎えました。一人のテレビカメラマンは、夢中になって乗客がまだ降りないうちから飛行機の中に飛び込んで行きました。これは本当の国家的ニュースだったのです。

彼らは直ちに昼食会の席上、四百人の実業家に向かって話しました。その中には、フォード、ジェネラル・エレクトリック、グッドイヤータイヤ、スウィフト食品会社などの代表もいました。ベツレム将軍はこう言いました。「米州大陸は南北ともに史上最大の危機に直面して

います。キューバ、ヴェネズエラ、私が大使をしていたボリビアなどにおける最近の事件、そしてまたメーデーを機会にメキシコで開始されようとしているソ連の新攻勢などに鑑み、中南米諸国は今やMRAか共産主義かのいずれかの道を選ばねばならなくなりました。

諸君のような実業家のお気持ちはわかるつもりです。なぜなら私も諸君と同じ実業家であるからです。われわれは妻には純潔の生活を要求するが、われわれ自身は決して純潔ではありません。労働者の正直さは求めるが、われわれ自身は不正直であります。自分はこの点をチェンジしました。そして自分の全生涯をかけて戦うつもりです」

将軍自身が全く驚いたことには、実業家たちは途中三回も立ちあがって拍手をしました。そんなことは考えられないと思われるかもしれませんがこれは事実です。ベツレム将軍と彼の一行は直ちに六百人のブラジル産業界の指導者に話をするように招待され、さらに一時間半のテレビのプログラムに出演を要請されました。この時の昼食会に出席した「歩く牡牛の酋長」といわれるインディアンの酋長は非常な人気を集め、会場の外には何百の学生や子供たちが彼を見るために集まってきました。

子供たちに向かって酋長は、二十八年前に私と血兄弟の契りを結んだときのことも話しました。彼はその時私に「アオ・ザン・ザン・トンガ（暗闇に輝く偉大な光）というインディアンの

名前をくれました。

曾長が話をしている時、道の向かい側にあるサンパウロで最も有名なカトリックの女学校の校長から使いがきて、七百人の生徒が集まっているから至急きてぜひ話をしてくださいとのことでした。生徒たちの反響は電撃的でした。校長先生は言いました。「今日はこの学校の歴史の中でも記念すべき日です」また他の尼僧は「これは聖霊の為した業です」と言いました。

こういったことをこの国の日常の出来事にすることもできるのです。それなのに人々はもうあまり希望がないと言っています。私たちが今戦わないならば実業家たちはたくさんのお金や社会的地位を持ちながら唯物的な神のない世界に迷いこみ、民主主義の基本である道義の防壁を破壊し、そして最終的には共産主義の支配下に属することになるでしょう。

メーデーの日を期して日本の学生は劇「タイガー」の南米における初演の幕をあけました。サンパウロの市民劇場の外にはあまりにもたくさんの観客がつめかけたため、交通も止められたくらいでした。

日本の岸前総理は次のような電報を寄せました。「何百万の日本人が全世界から共産主義、搾取、そして奴隷制度を根絶するための戦いに参加するでありましょう」

わずか数ヵ月の間に、ベッレム将軍の影響はブラジルの歴史を変え、また大陸全土に波及していった。そのすべてはきわめて単純な道義的決意から出発しているのである。将軍は「ラダー〈出世の階段〉」という劇を見た。

「あの晩、私は舞台の上に自分の姿を見ました。自分のまわりにあるすべてを、環境も、友情も、自分の成功のためにのみ搾取していく男、それが私でした。私は生涯をかけて、このようなあり方に答をもたらす決心をしました」

将軍はちょうど夫人といっしょに休暇を利用してニューヨークに遊びにいく途中であった。二人はその計画を取りやめ、そのために用意したお金をＭＲＡの仕事に提供した。

二人はそのまま国へもどった。そして将軍は自分の事務所を閉じ、いままで関係していた仕事をやめ、すべてをあげてブラジルにまんえんしている分裂と汚職を一掃する決心をした。

一九六一年六月、ベッレム将軍は特別機で南米を代表する百十五名の人々とともに、スイスのコーにきてブックマン博士に会った。その中にはタボラ元帥もいた。元帥は過去四十年間に起こったあらゆる革命に参加してブラジルの国民的英雄といわれている人である。彼はＭＲＡのことを「世界中であらゆる悪を正す最終革命」と呼んでいる。

この一行が、南米に帰る前、ブックマン博士はあらん限りの力をこめて言った。「何十万、何

百万、何千万の人たちがあなた方の中に新しい世界秩序の希望を見出すであろう」そしてさらにつけ加えた「神はあなた方を堅くささえるだろう。問題はあなた方が神にまかせられるかどうかだ」

タボラ元帥とベッレム将軍の二人は二十八ヵ国のＭＲＡの勢力を率いてコミュニストの支配下にあるブラジルの東北地帯を席巻した。何千、何万という群衆が劇「タイガー」を見るためにスタジアムになだれこんだ。八人のカトリック大司教が一行を歓迎した。その中の一人ナタールの大司教は次のように語った。「ＭＲＡは地上を清めるために使わされた天上の炎です。それは心と知性と意志を動員する強力な軍隊です。それは明日の世界を武装し、準備するものです」

アマゾン川を二千キロさかのぼるマナウス市では九万人の記録的な観衆が蹴球スタジアムを埋めつくして、ＭＲＡの劇を見た。この日はキューバの革命記念日にあたっていたが、近くの広場で行なわれたそのための記念行事にはわずか四十人しか集まらなかった。

マナウスまではブラジルの陸海空軍が協力して一行と舞台装置いっさいを輸送した。空軍はさらに数千キロ、アマゾンの密林を越えて、ペルーのイキトスまで飛行機を提供した。ペルーのプラド大統領はブラジルで行なったと同じことをペルーでも行なってほしいと要請した。ペルーの首都リマではＭＲＡの劇を見るために、国立スタジアムに六万人が集まった。彼らはフロイデン

シュタットにおけるブックマン博士の逝去の報を聞いて全員起立して哀悼の意を表した。

五　立ち上がるアフリカ

ブックマン博士が死去する数週間前のことである。博士の友人二人が公開の席で共に壇上に立って話していた。

一人は黒人で一人は白人であった。黒人は名をヴンラといって南アフリカのヨハネスブルグ地方の六十万人のアフリカ人に選出された代表で、長年の間、アフリカ人の権利のために強烈な闘争をつづけてきた人である。

白人のほうはトレンゴーヴという有名な検事で、南アフリカで三年もつづいた反逆事件の主席検事をつとめた人である。この事件は多くの人の心に憎しみを植えつけ、分裂をきたし、当事国はもとより、その余波は世界中にひびいていた。

トレンゴーヴは数年前、ヴンラを捕えるために策謀をめぐらし、彼の主催した会合の席にテープレコーダーを隠しておいたことを話した。その録音によって犯行は決定的になるところだったが、突如、裁判官が被告全部を放免したために使わずじまいになってしまった。

しかし、今ではこの二人はチェンジを通じて堅い融合を発見していた。その場に居合わせたベテランの新聞記者はこのように言った。

「この目で見、この耳で聞いたのだが、それでも信じることができないほどだ。これを記事にしてもおそらく南アの人はだれも信じないだろう」

トレンゴーヴはまた言った。「私はヴンラといろいろ話し合った。彼はたしかに憎しみと恨みに対する情熱的な解答を発見していた。

今になってわかったことだが、私のような白人のあり方が、彼のような多くの人の心に恨みと憎しみを植えつけていた。白人の優越感、利己心、妥協がシャープヴィルでおきた暴動、反逆、破壊の原因をなしていた。

私はブックマン博士やヴンラと知り合うようになってから、十字架の精神をうけ入れて、まちがったことをやめ正しいことを行なうことを決心した。それはまた自分の行動の動機を正直に認めることでもあった。私は自分の罪や自分の国のあやまちをたなにあげて、いつも相手に自分の

国の立場を理解させようとしていた。アフリカの全域で、私たちが正しい生き方を学ばない限り、決して真の平和を作ることはできないだろう」

一方、民族主義者のヴンラは言った。

「私たちは真に男らしくなって、正しいことのために一緒に戦おうではないか。多くのアフリカの指導者たちは、『目的を達成するまで共産党と共闘しよう。共産主義者をしめ出すのは、それからでもおそくはない』と言っているが、今までの経験によると目的を達成したころには、逆に彼らの手中に陥っているのがつねだ。私は人種、皮膚の色のちがいにかかわらず、アフリカばかりでなく、全世界にMRAをもたらすために、名声も地位もすべてを賭して働く人たちと協力する覚悟だ。

南アフリカの人種問題は、全世界の人々を分裂させる好材料に使われている。多くのアフリカの指導者が北京やモスクワで訓練されている。私の国は、今まさに爆発寸前の状態で、いつ流血革命がおこるかわからない」

ある夜、六人の暴漢が家に押し入り、背後から彼を刺し、死んだと思って引き揚げていったこともある。これは彼が白人と同様、黒人も変るべきだといったことを怒って彼を葬り去ろうとしたのであった。しかし、いかなる脅迫にも彼は信念をまげなかった。彼ばかりでなく、数知れぬ

多くのアフリカ人たちが、彼とともに一歩も退くことなく戦う決心をしている。彼らはトレンゴーヴのような人々の変り方を見て、はじめてアフリカが憎しみ、恐れ、貪欲から解放された、真に自由な大陸となる希望を見出したのである。

ブックマン博士が最初にアフリカに行ったのは、一九二八年のことである。博士がイタリアのフロレンスにいた時、ギリシャのソフィア皇太后に会った。皇太后は博士が南アフリカに行くということを聞いて、当時の総督アスローン卿に紹介状を書いた。アスローン卿はギリシャ現皇后の大叔父にあたる人である。

博士はその紹介状をもって総督をたずねた。ふたりは一時間にわたって話し合った。帰ろうとする博士を、アスローン卿は玄関まで見送りに出てきたが、車に乗ろうとするところを呼びとめて、こう言った。

「そう言えば、あなたに会ったら聞こうと思って忘れていたが、ジョージ・ダニールは一体どうしてチェンジしたんです？　よかったらもう少し話を聞かしてくれませんか」

博士は誘われるままに再び席にもどって話をつづけた。

ジョージ・ダニールはスポーツの英雄で、スプリングボックと呼ばれる南アフリカを代表するラグビーの選手であった。ダニールはオランダ系植民者の中でも最も由緒ある家庭の出身で、人

柄もよく、国の指導者たちも一目おいていた。ある朝、ダニールはブックマン博士を訪れた。お茶を飲みながら彼はふと聞いた。

「先生に接する人はみなチェンジしてしまうようですね」

「そうです。君に接する人はチェンジしませんか」

ダニールはチェンジしないと答えた。

「どうしてだろうか」と博士は聞いた。

ダニールは興味をおぼえ、もっと話を聞くために昼食に残った。お茶の時間がきた。さらに夕食をともにした。そしてついにそのまま、一生涯を博士とともに戦うことになった。

その日、彼は自分を捕えていた不純潔な習慣から自由になった。この不純潔が、人をチェンジする力を彼から奪っていたのである。

その後、彼がチェンジした人の中にウィリヤム・ヌコモ博士がいた。彼はアフリカ国粋主義青年同盟の創立者で初代会長をつとめた人である。この団体は南アフリカで最も革命的なものとして知られていた。ヌコモ博士自身、当時の彼の考え方をこのように説明している。「南アフリカの唯一の希望は流血革命をおこして、すべての白人を殺すか、川に投げ込むかして絶滅してしまう以外にないと私は堅く信じていた」

一九五三年、北ローデシアのルサカでMRA大会が開かれた。そこでヌコモはダニールの話すのを聞いた。ヌコモは言った。「私は白人が変るのを見た。そして黒人が変るのも見た。私も変らざるを得なかった」

オランダ系の白人たちはヌコモを共産主義者と呼び、ヌコモは彼らをファッシストだといって攻撃した。その彼が今ではこう言っている。「私は生まれつきの革命家です。MRAの中に国家主義よりも、もっと大きな革命を発見したのです。MRAはすべての国の、すべての人のための革命です。これこそ最上のイデオロギーで、私の民族のためにも、南アフリカのためにも、最も正しい道なのです」

一九六一年九月十日、ヨハネスブルグ市のニュークレアで開かれた大会の席上、ヌコモとトレンゴーヴは一緒に立って話した。そこはほとんど毎週暴動がおこっているような所で、多くの共産党の指導者もそこに住んでいた。一九六〇年に多数の黒人が殺害された事件のおきたシャープヴィルからたくさんの人がこの二人の話を聞きにきた。

アスローン卿は生涯を通じてダニールとの友情を保ち、その仕事に興味を持ちつづけた。ロンドンのケンジントン・パレスにある卿の自宅にはこの南アフリカの黒人と白人たちが招待された。そこで英国内閣の閣僚たちに自分たちの信念を語る機会が与えられたのである。

アスローン卿はまた南アフリカのホフマイヤー副総理がブックマン博士の仕事によせている評価にも注目した。ある時、ホフマイヤー副総理は英国下院に次のように打電した。

「一九二九年のブックマン博士の南アフリカ訪問は、わが国にとって非常に有意義なことであった。白人、黒人間、およびオランダ系、イギリス系の植民者の間にはじまった和解の成果は全国にその影響を今なお持ちつづけている。南アフリカにおける民主主義の発展はこの人たちの努力の結果にまつところが多い」

戦時中、アスローン卿は全英コモンウェルスに向かって次のように放送した。「MRAの呼びかけは全世界に及んでいる。それは何百万の人たちに新鮮な希望を与えている。MRAは個人、家庭、さらに国のすべてが神の意志に従うことを挑戦する」

ブックマン博士が人に接する時間は必ずしも長いとは限らなかった。しかし、生涯忘れることのできない深い影響を相手に与える鋭さと的確さをもっていた。

コンゴが独立する直前のことである。「ハリケーン（台風）」という劇を見たあと、数人のコンゴ人とベルギー人が博士に会いにきた。この劇は憎しみと恐れのとりこになっているアフリカの人たちがチェンジして互いに融合を見出し、一緒に新しい世界の建設のために立ち上がるという

筋のものである。

まずベルギー人が言った。「幸いなことにコンゴにはあのような憎しみは見られない」

みんな黙っていた。しばらくしてコンゴ人が口を開いた。

「それは間違っている。コンゴにだって憎しみはありますよ」

ベルギー人は笑いを浮かべながら言った。「私はコンゴを相当よく知っているつもりだ。そりゃあ多少の意見の相違はあるさ。だけどお互いに憎しみ合ってなどいやしない」

コンゴ人はそれをさえぎるように言った。

「私たちのブラックリストにはあなた方ベルギー人の名前がたくさんのっています。独立のあかつきには全部暗殺する予定になっているのです。私もそれを作った一人ですからよく知っています。ブックマン博士とMRAの人たちに会うまでは、私もその暗殺計画に加わるつもりでいました。これが憎しみでないと言えるでしょうか」

今まで黙っていた別のベルギー人が勇気をふるいおこすようにして言った。「あなたのいうことは本当だ。確かに憎しみがある。私のような人間がその原因だった。私は二十数年もコンゴで知事をしていた。その間、甘い汁を吸い、君たちを見下して暮らしてきた。ここで、そのあやまちがはっきりわかった。利己主義で凝り固まった私のような人間がいたるところで自由と人間ら

しさを破壊しているのだ。まことに申しわけありません。許してください」

ブックマン博士が口を開いた。「みなで静かになって、心に聞こえてくる神の声に耳をかたむけよう」と言った。部屋を出て行く時には、この人たちは全くチェンジして、互いに和解していた。彼らは一緒にコンゴに戻った。暗殺リストは破られた。その後、コンゴでは数々の血なまぐさい事件が起きたが、あの日、ブックマン博士の部屋にいた人たちは、これにまきこまれることなく、殺害されることもなかった。

コンゴから、一九六一年の夏を通じて、多くの人たちがコーのMRA大会に出席した。九月にはカサブブ大統領夫人も特に数名の代表をともなって参加した。夫人は一同を代表して次のように語った。「私たちはMRAに全幅の信頼をよせています。コンゴの問題を解決するのはあなた方であると堅く信じています。ブックマン博士の築きあげたこの仕事は全世界を席巻するでしょう」

カサブブ大統領の令息アドルフ・カサブブ氏は言った。「ここでは融和がつくり出されている。できるだけ多くのコンゴの人たちが、コーのMRA大会に出席すれば、私の国のどんな困難な問題でも必ず解決されるにちがいありません」

次に彼はレオポルドビルでバルーバ族とルルア族が和解したときの模様を報告した。カサブブ

大統領と閣僚や五千人の人たちが集まっている席上、ルルアのカランバ大酋長は言った。「これで私はブックマン博士との約束を果たすことができました」カサブブ氏はさらに、わずか二ヵ月前までは何世代にもわたる仇敵同士のこの両族が和解するなどとは、だれも夢想だにしなかったと説明した。「ルルアとバルーバ両族の和解は思想戦のさ中にあるコンゴにとって非常に深い意義があります。この戦いはさらにつづけなければなりません。コンゴはアフリカの心臓です。コンゴが共産化されればアフリカ全土にその危険が広がるでしょう。いわゆる未開発国に対する経済援助だけでは足りないのです。大衆の心を把握し、いかにしてこれをチェンジするかが問題です。言いかえれば、イデオロギーを持たずに、いくらドルをつぎこんでも役には立ちません。MRAこそ、そのイデオロギーです」

つづいてカサブブ大統領の内閣官房長官ヌザオ氏は過去十二ヵ月間に、レオポルドビルで四百八十三回のMRA放送が行なわれたことを報告して次のように言った。「私はMRAが世界中に浸透することを心から願っている。MRAは津波のようにおしよせる共産主義に対する答であると同時に、アフリカが払いのけようとしている帝国主義に対する答でもある。国を自由にし、その自由を保つためにMRAの力は強化されなければならない。われわれもこれを生きる決意である」

ブックマン博士に北アフリカ行きをすすめたのは、フランスの前総理ロベール・シューマンであった。シューマンはコーにきた。朝の会合の終りに発言を求めて言った。「私はたくさんの会議に出席します。大概の会議は失望に終るのをつねとしますが、ここには輝かしい希望があふれています」

それからブックマン博士のところへ歩いて行き、フランス式な大仰な身ぶりで、博士を抱擁して、その両ほおに口づけをした。昼食のとき、シューマンと博士は北アフリカのことについていろいろと話し合った。それはモロッコが非常な危機にさらされている時であった。シューマンは言った。「ぜひ、あそこに行ってください」

博士は答えて、「モロッコは、どうも私には不向きなようです。第一アラビア語ができません。フランス語のほうも、これでも昔、若いころ、グレノーブルの学校で勉強したのですが、お恥ずかしいことに覚えているフランス語といったら、mauvais garçon（いたずらっ子）という二言だけなのです」

シューマンは笑いながら言った。「mauvais garçon をご存じなら、モロッコといわず、フランスといわず、世界中に通用しますよ」

博士は数人の友人をつれてモロッコへ行った。その結果、フランス植民者たちがチェンジした。一方モロッコの国粋主義者たちは、はじめのうちは博士の一行を帝国主義者のまわし者と疑っていた。ところがそのうちに国粋主義者の一人が、あるフランス人についての珍しいうわさを聞いてきた。そのフランス人はモロッコ人の労働者を集めてこう言った。

「私は地下室にある酒を全部捨てる決心をした。君たち回教徒が酒を罪悪だと考えているのに、われわれフランス人が単なる悪習慣として勝手気ままに飲みほうけていたのは間違いだった。フランス人が自分たちの間違いを正すべき時がきたのだ。ひとつ酒をすてるのを手伝ってくれたまえ」

酒びんは運び出されて、片っ端から割られていった。酒は太陽の強い光線にかわききって、ほこりにまみれた地面に吸いこまれていった。労働者たちは大喜びだった。国粋主義者は頭をかしげて言った。「そりゃどうも口だけじゃない。本物らしい」

このことがあってから、国粋主義者はブックマン博士に会った。彼はコーにきた。そしてチェンジした。コーである人がこの男に言った。「あなたが一番きらいだと思っている人との距離が、とりもなおさず、神とあなたの距離なのです」この男は心の中でマラケッシのパシャ（回教の高官の尊称）であるエル・グラウイを深く憎んでいた。この男のためにモロッコのサルタン皇帝が

フランス人の手によって流罪に処せられていた。彼はエル・グラウイのところに行き、心で憎んだことを謝罪した。パシャは感涙にむせんだ。それから一週間たたないうちに、不可能と思われていたことが、事実おきた。エル・グラウイが皇帝のところに行き、膝を屈して詫びたのである。ロンドン・タイムズ紙は、このできごとを次のように報道した。「今日のこの会見で敵対していた二人の間の最終的和解がなりたったかと思われる。エル・グラウイの行動は、一見、自己を卑下したようではあるが、実に気品と尊厳に満ちたものであった」

その後、まもなく皇帝(スルタン)は帰国が許され、モハメッド五世として位についた。やがてモロッコはフランスから独立し、流血の惨事はさけ得られたのであった。

モハメッド五世は、コーのブックマン博士に次のメッセージを送ってきた。「危機に際し、貴下がモロッコ国、国民ならびに私に対して示された好意と協力を深く感謝する。MRAは回教徒にとっても、キリスト教徒に対するのと同様、道義の支柱であり、精神の刺激である。武力のみによる再武装の失敗は明らかである。道義の再武装こそ不可欠である。道義的価値と神の意志を基礎としたMRAの精神を、この国の大衆に与えられることを私は切望してやまない。私は貴下の事業に絶大な信頼をよせるものである」

ブックマン博士がモロッコを訪問したとき以来はじまった人々のチェンジは、その後、チュニ

ジアに波及していった。一九五五年、六月チュニジアの国務大臣マスムディ氏はワシントンで次のように語った。「MRAによって今日、チュニジアとフランスは苛酷な戦いからまぬかれている。MRAはフランスとチュニジア、アフリカとヨーロッパの間に橋をかけている。アフリカは目ざめつつある。そしてMRAの精神にもとづいて、その使命を果たそうとしている。MRAなしではチュニジアは第二のインドシナとなったであろう」

ブルギバ大統領は後に次のようにのべた。「世界はチュニジアにおけるMRAの影響を知るべきである」また、フランスのロベール・シューマン氏も「MRAがなかったら、モロッコとチュニジアの歴史は全く違っていたであろう」と語った。

アフリカ全土にわたって数限りない人々がブックマン博士に会ったために、今日、博士の秘訣を全大陸に与えるために戦っている。

「白人は帰れ」の怒声の聞こえるアフリカですでに十七ヵ国の指導者たちが、ブックマン博士を招待し、またMRAの勢力を送るように要請している。

あるアフリカの指導者が博士の仕事を次の言葉で評価している。「かつてリンカーンがアメリカに与えたと同じものを、MRAは今、アフリカに与えている。すなわち、国々の傷あとをいやし、人々に自由を与えている」

六　憎しみをこえて歴史を変える

一九六〇年のある夜おそく、当時アメリカにいたブックマン博士のところにUPIの記者から電話がかかってきた。

それは、その日の午後ジョージア州のアトランタ市で行なわれた記者会見についての問い合わせであった。その記者会見でアメリカ訪問中のドイツの外交官が新聞記者から次のように質問を受けた。「第二次世界大戦後のヨーロッパにおける、政治的な動きの中で一番意義深いものは何だとお考えですか」

「それはドイツとフランスの間に新しい融和と理解が築かれたことだと思う。これは永久的なものだと私は信じている。この成果は主としてMRAの働きによるものである」

その一、二年前にアデナウアー首相もまた新聞記者に向かって「重要な国際協定の陰には目には見えないが、効果的にMRAが大きな役割を果たしている」と語った。

このような大きな成果はブックマン博士が長年にわたってたくさんの人々のために、そしてまた国々のために戦いつづけてきた結果である。

その中の一人はマックス・ブラデックという男であった。彼はルールの炭坑夫であった。その地区最大の炭鉱の労組委員長をつとめ、非常に戦闘的な共産主義者であって、そして二十五年の党歴をもっていた。

戦後まもなくMRAの国際勢力が西ドイツで活発な攻勢を展開していた。各地の工場や組合で何百という会合が開かれ、各州の州議会はこぞってMRA代表を迎え入れた。

この勢力の人々は炭坑夫の家に泊って戦いつづけた。ブラデックはMRAの仕事を破壊するために全力をつくした。そして党員をつれてコーにやってきた。そこで彼は深い挑戦を受けた。革命家をもって任じていた彼はこれを受け入れざるを得なかった。そして絶対、正直、純潔、無私、愛の道義標準を自分の生活に受け入れる決心をした。彼はチェンジした。ルールに帰るや共産党の執行部は彼および同行の党員たちを喚問した。彼らは答えた。

「われわれはMRAの中に共産主義よりも大きなイデオロギーを発見した」

西ドイツ共産党は深刻な困難に直面した。長い間、彼らはレーニンの作戦によって行動していた。それは社会組織の中に浸透してこれを共産主義の目的に添うよう変えていくことであった。ところが今回に限り、コーに出かけて行った党の幹部たちは逆にチェンジしてしまったのである。この結果として党は四十人の地域指導者を反党行動の名のもとに除名せざるを得なくなった。

党はこのことを次のように説明した。「MRAの目的は人間性の再教育、階級の和解である。したがって階級闘争の路線を混乱させるものである」

ブラデックはルール地区でMRAの代表者として知られるようになった。共産党はあらゆる手段をつかって彼をひき戻そうとした。酒が彼の弱点だと知っていたので、とうとう飲ませることに成功した。そのあげくに女を与えた。酔っていたブラデックは誘惑を払いのけることができなかった。これは共産党の思うつぼだった。

「コーから帰ってきた男を見ろ。あいつは偽善者だ」とルール全域にわたって猛烈な個人攻撃が開始された。ブラデックはこの失敗に非常な衝撃を受け深くこれを恥じた。彼はブックマン博士に手紙を出して信念を生きぬくことができず、博士の友だちとして価値のない人間になってしまったと書いた。そして自分を仲間の一人と考えることをやめ、MRAの人々にもたずねてくる

ことをやめるように頼んだ。

その手紙がアメリカにいるブックマン博士のもとにとどいたとき、博士はすぐさまブラデックに次のような電報を送った。

「罪におちるのは人の常である
その中におぼれるのは悪魔の仕業である
たち上がって新しく生きること
これこそが神の道である

キリストの血潮はすべての罪を浄める。最悪の人こそ偉大な聖人となり得る。
私は新しいマックスを信頼する。

親愛なるフランク」

その時まで、ブラデックは道義的なチェンジを経験していたが、信仰はもっていなかった。ところがこの電報によって彼の無神論と冷笑的(シニシズム)性格が根本からくつがえされた。新しい信仰が生ま

れた。その結果、何百というマルキストやコミュニストがチェンジしていった。そして多くの人が信仰を見出した。

その後、ブラデックがインドにいたとき、両親が数日の間に相次いで亡くなったという報せをうけた。ブラデックはさっそくブックマン博士と話し合いの上、両親の信じていたカトリック教会で追悼の式を行ない、そして二百名以上のＭＲＡ勢力をこれに招待した。それはまた自分の中に新しく生まれ得た信仰を象徴することにもなった。

ブラデックは自分がチェンジした経過を次のように語っている。「私は共産主義に生涯を打ち込む決意をした。これが正しい世界秩序を作る道だと信じ、その手段として階級闘争を戦ってきた。しかし、今日その結果として、人類は互いに憎しみ合う二つの陣営に分裂してしまっている。原子力時代の今日、共産主義のように階級の対立に基礎をおくイデオロギーはあまりにも小さく、また時代おくれでもある。私がＭＲＡとともに戦っているのは、反共のためでも、反資本主義のためでもない。ＭＲＡはすべての悪の根元をついて人を変えるからである。どんな組織でもそれを失敗させるのは人間である。

私は理論と実戦との間に非常な開きがあることに気がついた。私はよく平和、自由、平等について大演説をしていたが、家では妻との間には平等はなく、隣人との間には争いが絶えなかっ

た。そして私自身は自由どころかニコチンとアルコールの奴隷となっていた。私は年中集会に行くといって家を出たが、妻に隠れてたびたび勝手なことをしていた。また私は『万国の労働者よ団結せよ』と大声をはり上げたが、私の権力欲のために組合内部には分裂が絶えなかった。

新しい世界秩序を作るにはまず自分から始めなければならないことがわかった。それを受け入れるためには私の生き方と考え方に革命的な変化が必要だった。家庭でも職場でも数々のまちがいを正した。また私の動機がまちがっていたために迷惑をしていた人がたくさんあった。これに対してもあやまちを正さなければならなかった。この経験をとおして私はこのイデオロギーがきわめて堅実な基礎の上に築かれていることを知った。私がチェンジできるならば世界のすべての人に同じ経験が可能であることは明らかである」

ブラデックやその他のドイツ人たちがフランスの指導者たちとも肩を並べて戦うことを学ぶようになった。イレン・ロール夫人はそのようなフランス人の一人であった。彼女は長年社会主義者として活躍し、社会党中央執行委員をつとめ、マルセーユ選出の国会議員でもあった。

職業は看護婦であった。戦時中、夫人は南フランスで反独抵抗運動の中心人物の一人として活躍していた。ドイツの秘密警察(ゲシュタポ)は彼女の息子を捕えて拷問にかけた。戦争が終ったとき彼女の心

はドイツに対する憎しみでいっぱいだった。「私はただ一つのことを願った、それは全ドイツ人を抹殺することだった」と彼女は述懐した。

ロール夫人はコーに招待された。彼女は楽しい週末をすごすつもりで家族連れでやってきた。第一日にドイツ人が大会場で話すのを耳にした。彼女はすぐ部屋にもどると、帰り支度をはじめた。ドイツ人と一つ屋根の下にいることはとうていできないと思った。

ところが部屋から出会いがしらにブックマン博士に会った。「あなたは労働者のためのすばらしい闘士だ。ヨーロッパの融合のためにもあなたは戦っている。あなたがドイツ人をそんなに憎んでいて、どうしてヨーロッパの融合ができるのだろうか」と博士はきいた。

何日もロール夫人は悩みつづけた。心の苦闘が毎日つづいた。どこかに逃げ道がないものかとさがし回った。しかしついに心に憎しみをもった人間は融合を作ることはできないこと、そしてまた、階級闘争は人類愛と本来、矛盾していることに直面しなければならなかった。

「私の心に深く根ざしていた憎しみを取り除くには奇跡が必要だった。私は当時ほとんど神を信じてはいなかった。それにもかかわらず、奇跡がおこった。私の心は自由になり、はじめて全世界のために戦うことができるようになった。そして過去のあやまちを償いたいということが私の燃えるような願望となった。私はドイツ人を抹殺したいと願ったことについてドイツ人に心か

ら謝罪した。

私は夫と息子といっしょにドイツに行った。そして西ドイツの各州の州議会でも私たちは確信を話すことができた。私たちは当時、共産圏に閉鎖されたベルリンにも航空回廊(エヤー・ヴェーク)で出かけて行った。ラジオで放送したり、数限りない集会や記者会見を通じて話をした。私たちは自分たちをめぐらにしていた憎しみについて謝罪した。そしてまた、人間のチェンジをとおして憎しみのない世界を作ることができることを語った。

今日、マルキシズムはすでに時代おくれの思想である。私の夫はフランスの有名な共産主義者、マルセル・カシャンの弟子で、四十六年間マルキシズムを信奉してきた男である。われわれの信じてきたマルクス主義が誤っていたことを認めるのは容易でなかった。しかし、ついに私たちは憎しみや嫉妬や復讐心に根ざした考え方や、また一つの階級や国を、除外したり破壊したりする考え方の上に、新しい世界の団結をつくることはできないのだという事実に直面せざるを得なかった。

今日、フランスとドイツの関係は一変した。長い間、感情的な方法だけではどうにもできなかったこの二つの国は共通のイデオロギーの基盤の上に、歴史上初めて真の融合を発見したのである」

ロール一家はドイツ中をくまなく訪れた。当時のことを回想してロール夫人は言う。「私がどんな気持ちでそこに行ったと思いますか。かつて私は心の中でドイツの抹殺を願っていたのです。子もあり孫もいる私、しかも社会主義者としていつも人類愛を口にしていた私が一つの民族の破滅を願っていたのです。さんたんたる戦禍の中に住むドイツの人たちを見たとき、私は心から謝罪せずにはいられなかったのです。私はベルリンの焼け跡を片づけている疲れきった五万人の婦人たちにあって、直接謝罪しました。

私はドイツがフランスや他の国々に与えた損害を忘れたわけではありません。私が直面しなければならなかったことは、私の心の中の憎しみが実際にヨーロッパの分裂を作っていた事実です。

私がチェンジしたために、たくさんのドイツ人がチェンジしました。私の心の深い憎しみをも取り去るほどの力をもった思想は、歴史の流れを変えることのできる思想なのです」

アデナウアー首相は、この十五年間に、宿敵のフランスとドイツを融和するためにロール夫妻ほど功績のあった人はないと、語っている。一九六〇年に首相はブックマン博士の仕事について次のようにのべている。「MRAの仕事が前進しなければ、世界の平和は保てない。イデオロギーを持たない国は自己満足の中に死んでいる。共産主義は間違ったイデオロギーである。しか

し、あくまでもそれはイデオロギーなのである。したがってこれに対しては道義的な、精神的な武器をもってあたらなければならない。現代はイデオロギーの戦いの時代である。そこにわれわれの使命がある。この戦いはたとえ何十年かかろうとも、必ず勝たねばならない。今こそＭＲＡを通じてより強力な融和をつくり出さねばならない。人間のチェンジこそが、世界の平和を達成する唯一の希望である」

一九六〇年三月、アデナウアー首相がロサンゼルスでブックマン博士に会ったとき、次のように語った。「私は貴下と、ＭＲＡの仕事をきわめて高く評価しています。これは世界の平和のために絶対に必要な仕事です」

イタリアの有名な愛国的思想家ルイジ・ストルツオはイタリア、フランス、およびドイツに非常な勢力をもっているキリスト教民主党の思想的基礎をつくりあげた人である。彼はブックマン博士の仕事を「天上から与えられた炎」であると評した。それは彼がビオテロ一家におこったような数々の奇跡の物語を聞いたからである。ビオテロ一家というのは「貧困、失業、戦争、そして憎しみ」という悲惨な歴史をくり返してきたヨーロッパの数限りない労働者を代表するような一家であった。

彼らはミラノ市に住んでいた。父親は、電車事故で両脚を切断し、二度と働くことができなかった。五人の子をかかえて母親は工場に働きに出た。そして三十年間働きつづけた。その間に彼女は共産主義を唯一の希望だと信じるようになった。そして自分をこんなに苦しめた社会を破壊したいと考えた。彼女の確信に動かされて家族全員が入党することになった。息子のレモは教会を憎んでいた。一九五四年のある日、党の細胞として活躍していた娘のロランダがふとしたことからブックマン博士に会った。そして彼女はチェンジした。彼女はMRAをイタリアにもたらすために戦う決心をした。弟のレモは激しくこれに反対した。労働階級を裏切る者だと罵った。しかし、ロランダが今までになかった心の自由をもっていることをレモもみとめざるを得なかった。憎しみから自由になった彼女は反目し合っている人々の間に融合をつくる秘訣を身につけはじめていた。

それから二年後に、北部イタリアの工業の中心地、セスト・サンジョバニでMRAの「消え行く島」という音楽劇が上演されることになった。ロランダはレモを説いていっしょに出かけた。この町は小スターリングラードと呼ばれ、北部工業地帯の共産主義の牙城であった。劇場は超満員で、あふれでる群衆をさばくために扉を補強しなければならないほどだった。一週間に二万三千人が劇を見た。その八割が共産党員だと警察は推定していた。レモの心になにかが動いた。彼

はロランダに言った。「お姉さんの言うとおりだ。ぼくが間違っていた。自分の心が憎しみで一ぱいなのに、ぼくは憎しみのない世界を作ろうとしていたのだ。ぼくもチェンジが必要だ。世界を変えようと思いながら、自分のチェンジを拒むものこそ反動的なのだということがわかった」

ではどこから変らなければならないと思うのかとロランダが聞くと、レモはこう答えた。

「口を開けば、平和ばかり唱えたぼくだ。まず自分の家族と平和に暮らさなければならないと思う」彼は兄や嫂(あによめ)に今までのことを謝罪した。そのおかげで、仲たがいをしていた家族に再び平和がおとずれることになった。

その後、レモは病に冒され交通病院に入院した。彼は電車従業員組合の書記長兼財政部長をつとめていたのである。組合員の総数は一万二千人で、ヨーロッパでも最も戦闘的な組合として知られていた。レモは立場上、運動方針を左右することのできる一人だった。病院で肺に腫瘍ができていることがわかった。もう手おくれで手術は不可能だった。レモは四六時中、痛みに悩まされながらも他の入院患者や医師たちのチェンジのために戦いつづけた。病勢が進み、病院では治癒の見込みがなくなったのでレモは家に帰ってきた。再び信仰を見出したレモは、神の声を聞く秘訣を学んでいた。ペンを持って物を書く力をなくしてからも、姉のロランダに頼んで、自分の頭に浮かんでくる考えを書きとめてもらうのだった。

ある日、彼は妻のマリサに言った。「ぼくは教会に戻りたいと思う。そしてぼくたちの結婚を教会に祝福してもらおう。神父さまに式をやってもらおう」

レモはマリサの養母のラ・ジア（伯母の意）に頼んで神父を迎えに行ってもらった。ラ・ジアも十五年間共産党員として過ごしてきた人である。ロランダと二人で党のために百万の署名をとってきたこともあった。彼女は最初、教会に行くのだけはいやだと断った。しかし、衰弱したレモが精一ぱいの情熱をこめて頼んだので、ついに聞き入れて出かけて行った。神父はラ・ジアの来るのを見てびっくりして、「悪魔が聖水を取りにきたのか」と口をすべらした。ラ・ジアは怒って一言も言わずに帰ってきた。一部始終を聞いたレモは、もう一度行ってくれと頼んだ。ついに神父がきて、動けないほど衰弱したレモの枕元で二人の結婚式を行なった。

そのころ、アジアを旅行していたブックマン博士がコーへの帰途、ミラノを通ることになった。これを聞いたレモの心に強く次の考えがひびいてきた。「起きて、ブックマン博士に会いに行け。博士といっしょに世界を変えようとする決意を話すのだ」その容体で駅に行くのは気違い沙汰だという家族に彼は言った。「神が行けというのだから、ぼくは行く」

ブックマン博士の汽車はわずか十一分しかミラノに停車しなかった。博士はプラットホームに降りるなり、出迎えにきていたロランダに、「レモが病気と聞いたが、容体は」と尋ねた。「こと

にお出迎えにきています」とロランダは答えて、レモを引き合わせた。レモと博士の間には、世界を神に向けようという共通の決意にもとづく堅い融合が生まれた。これは二人にとって最初でしかも最後の会見となった。「私は残された生涯をMRAのために、そして子供たちの将来のために生きていきます」レモは博士にこう言った。

汽車が動き出してしまうと、レモは周囲の人に言った。「さあ、家に帰ろう。ぼくの心には平和がある。ぼくは神の与える使命を受け入れたのだ。だから神の平和が与えられたのだ」

それから二週間後にレモは死んだ。その間にレモを見舞いにきたたくさんの人がチェンジした。その中には共産ゲリラの一員として戦時中、いっしょに戦ったラファエル・ダンジェロもいた。この男はイタリア共産党党首トリアッチがミラノにきたときには、その護衛をつとめていた。もう一人はラ・ジアだった。レモの最後の日に、彼女は彼の枕元にいた。衰弱したレモは口もきけずに、ただ彼女の顔をじっと見つめていた。後になってラ・ジアは言った。「あのまなざしの中に、私はレモの深い挑戦を感じました。そのとき、私はチェンジする決心をしたのです」ラ・ジアはカトリック教会に復帰した。レモの葬儀は教会で行なわれた。長い間、教会にそむいていた共産党の同志たちも何百人となく、組合旗をかかげてその式に参列した。ラファエル・ダンジェロとその妻も、人をチェンジしはじめている。その中には前には共産党員だった人も多い。彼

は言っている。「レモは私に希望を与えてくれた。彼の信仰が私をささえてくれる。彼が生きていたらいっしょに戦いつづけていることだろう。この戦いには勝者もなければ、敗者もない。憎しみも、恨みも残らない。そのかわりに、新しい世界を作る役割りをもったという深い満足感で心がみたされる」

ブックマン博士は共産世界も、非共産世界も、同じ点で失敗していると信じていた。すなわち、どちらも利己心から完全に自由な新しい型の人間をつくることができないということである。しかも今日の原子力時代に世界が直面している非常な危険と大きな可能性にかんがみて、これからの世界の運営にはどうしてもそうした新しい型の人間が必要なのである。

一九二三年にノルウェー共産党を創立し、三十年にわたって執行委員をつとめたハンス・ビヤコルトも、同じことを言っている。「私はクレムリンで開かれた多くの会議に出席した。しかしつねに未解決として残っている問題は、どうやって新しい型の人間を作るかということであった。われわれは経済組織を変えることによって、新しい型の人間ができると信じていた。もちろん、経済、社会、政治的変革はぜひ必要である。しかし、それだけでは利己心と憎しみと貪欲から自由な新しい人間を作ることはできないことを、われわれは認めざるを得なかった」

ビヤコルトはブックマン博士に会ったとき、彼の中に、自分よりもはるかに深い決意をもった革命家を見た。数日後に彼は言った。「私はついに答を発見した。人間がチェンジするのを私は目のあたり見た。あらゆる階級、あらゆる民族を融合することのできるイデオロギーがここにあった。レーニンは階級を超越したイデオロギーはないと言った。彼はまちがっている。私でもチェンジできるのだから、どんな共産主義者でも、また非共産主義者でもチェンジできることはまちがいない。前途に横たわる仕事はきびしく、苦しいかもしれない。しかし、正しいとわかった以上、どんな障害をのりこえても私は前進する決意である」

一九六一年に、ビヤコルトは南米で戦っていた。ブラジルの東北地域やペルーの何百万という労働者や農民が彼を通じて、新しい考え方と生き方を見出したのである。

ビヤコルトのような人を感動させたのはブックマン博士のあらゆる人に対する限りない友情であった。博士はすべての人に対して、その経歴のいかんを問わず、王者の礼をもって接した。博士はまたすべての人がチェンジを通じて偉大な使命を果たすことができると信じていた。

戦後、西ドイツの労働総評議会議長ハンス・ベックラーは、あるときMRAの人々がドイツの財界人百五十名に対して講演するということを聞いた。彼は招待されてはいなかったが、出かけて行った。「行くには行ったが、資本家があまりたくさん集まっているので、気色が悪くなって、

ビールを飲みに外へ一度出たほどだった。経営者どもは黙って聞いていた」と、彼は言った。一杯飲んで帰って来てみると、MRAの人たちは炭鉱や工場や農場で労働者たちに与えたと全く同じ挑戦を、資本家たちに与えていた。ベックラーは後でブックマン博士のもとにきて言った。「経営者たちに対する挑戦の激しさを見て、私もこのイデオロギーに確信を持つに至りました」

ブックマン博士は相手が貴族だからといって見下げもしなかったし、また労働者だからといって過大評価もしなかった。彼はすべての人を人間として同様に相対した。博士の病態が急に悪化したとき、ドイツのヘッセ家のリチャード親王が遠くから自動車でかけつけた。博士がドイツ王家と知り合ったのは四十一年前のことであった。その間、王家とドイツの運命の消長浮沈にかかわることなく、博士の交友はつづいた。

博士はその昔、クロンボルグ城にヘッセ家をしばしば訪れた。王家の人々は博士の滞在期間を「ブックマンの季節」と呼んでこれを期待していた。

リチャード親王は博士の枕元にすわった。友人たちは博士の好んだ詩編第二十三と第百二十一、その他を読んでいた。親王は博士の耳元で言った。「リチャードです、フランク。私です」博士はもはや口をきく力はなかったが、わかったようすだった。親王はつづけて言った。「フランク、私です。今度はいつまでもいますよ」ブックマン博士はこの言葉のもつ深い意味を理解し

てうなずいた。

ブックマン博士の秘訣は、ここにもあった。博士によって信仰を見出した多くの人は、二度とゆるがぬ信念を持ちつづけるのであった。

七　アメリカはイデオロギーを必要とする

最近、アメリカ軍の指導者たちは、いかにして国民にイデオロギーを与えるかを熱心に研究している。ある海軍提督は、たびたびマキノにブックマン博士をたずね、MRAについて学んでいた。あるとき彼は、ワシントンで軍の最高幹部たちにMRAについて話すように求められた。

たまたま話がイデオロギーのことにふれた。一人の将官が「イデオロギーとは一体何か」と聞いた。

提督は答えた。

「私はマキノに行くとき、ウイスキーを一本と小説を何冊か持って行った。ところがあまり面白くて滞在中、本を読むことも、ウイスキーを飲むことも忘れてしまった。諸君、これがイデオ

ロギーなのだ。つまり、イデオロギーとは不必要なことをやめて、今まで当然やるべきでありながらやっていなかったことをやり始めることだ。しかも生涯を通じて、一日二十四時間絶え間なくそれをやることなのだ」

アメリカのある陸軍大将が二年前にブックマン博士にこう言った。「アメリカは武装に身を固めてはいるが、中身は死んでいる騎士のようなものだ。武器は持っているが、勝とうとする精神も意志もない」

ブックマン博士は母国をそのままの姿で愛していた。しかしアメリカがその真の使命に生きるために恐れなく、また絶え間なく戦いつづけた。アメリカがイデオロギーを持ったときに、全世界に自由をもたらすことができると彼は信じていた。

アメリカの国民生活に影響を及ぼす人たちに対して博士はイデオロギーの秘訣を与えた。CIO（全米産業別労働組合）副会長、ジョン・ライフもその一人であった。ライフはある時、彼に会いにきた上院議員にこう言った。「ブックマン博士がこのジョン・ライフをチェンジしたことは、アメリカの産業にとって少なくとも五億ドルの価値がある」

ジョン・ライフが言おうとしたことは、彼がチェンジする前のように労働者の真の利益のためでなく、自分の権力や地位に汲々として、行きがかりの争議やストライキをつづけていたなら

ば、労働者にとっての損害はもとよりのこと、国家や産業界に対しても生産低下などにより少なくとも五億ドルの損失を与えていたであろうということである。ジョン・ライフにはジョアナという若い娘がいた。ブックマン博士が彼女をどういうふうにチェンジしたかを彼女の口から聞こう。

「わたしたちは四人兄妹でした。父は五百五十万の組合員をもつ組合の副会長でしたが、四人の子供には手をやいていました。父はウイスキーを毎日二びんあけるほどの大酒飲みでした。父は自分たち夫婦のことをよくこう言っていました。

『大声でののしりあい、犬と猿みたいに引っかき合い、またくじらの夫婦でもあるかのように大酒をがぶがぶ飲んでいたものだ』とうとう離婚沙汰になりました。母はファッション・モデルで毎日お化粧にたっぷり一時間はかかっていました。母がチェンジしたとき、はじめて家族のために朝ご飯をつくるようになりました。

父は自分のことを酒飲みの、女たらしの、ばくち打ちだと言っていばっていましたが、チェンジするにしたがって、もうろうとした目で会議に出かけて行ったのでは、労働者のためにはもちろん、経営者のためにだって正しいことは考えられないということがだんだんとわかってきました。そして神に導かれた労働者が世界を導くのだというブックマン博士の、労働者に対する使命

が真実であるということも心の中で感じはじめたのです。ついに父と母はブックマン博士の挑戦を受け入れて、自分たちのためにだけ生きるのをやめてもっと大きい使命に生きる決心をしたのです。もちろん離婚するのもやめました。

四年前に私はマキノ島のＭＲＡ大会に行ったのですが、当時の私は絶対の道義標準などは大きらいでした。だから神様にも反対でした。

人生を楽しむために私は刺激を求めていました。買ってもらった自動車は二週間以内にスピードを出しすぎてめちゃくちゃにこわしてしまいました。ＭＲＡを生きるということになれば、自分の生活を徹底的に変えなければならないということがわかったので、私は逃げ出してワシントンに帰る決心をしました。

そのとき、私はブックマン博士に呼ばれました。部屋に入るやいなや、二十分にわたって私は博士から猛烈にしかられました。博士は私の間違った生活を容赦なく指摘しました。

そして「私の言ったことは当たっているか」と聞くのです。私は内心ふるえながら、頑固に「違っています」と答えました。

博士は激しく体をふるわせながら、「細い点はともかく、私はあなたを知っている。私の判断は正しい。正しい答も持っている。あなたは大きな使命をもったお嬢さんだ。しかし、今のあな

たはセックスと享楽に心をうばわれている。その答はキリストなのだ。キリストはわれわれ罪人(つみびと)を救い、さらに心を満たす力をもっている」(Jesus: Just Seuits, Saves and Satisfies Us Sinners)

間をおいてまた同じ言葉をくり返しました。その時、私はこれは単なる言葉ではなく、博士の生活に根ざした現実であることを強く感じました。博士の心は深い満足に満たされていました。そして本当を言えば、私も内心そうした満足をひたすら求めていたのです。

博士は私のほうを見ながら「導き(ガイダンス)を一緒にもたないか」と言いました。私は「いやです」と答えました。長い沈黙がつづいた後、博士は言いました。「私のガイダンスであなたは帰らないでここに残るだろう。そしてチェンジするだろう。あなたは神によって大きく使われるだろうということです。一緒に祈りませんか」

私はまた「いやです」と言いました。博士は一人で有名な主の祈りを祈りました。「天にましますわれらの父よ……」彼が祈り終ったとき、私は心の中で自分の一生が全く変ってしまうだろうということを深く感じていました。博士は深い思いやりをもって、私の生活の真実をはっきりと指摘して私を正しい道に戻らせるために強く戦ってくれたのです。これは私の生涯の転機になりました。反抗心に燃えている人間に善良になれといったところでなんの役にも立ちません。情熱だけが情熱に答えることができるのです。ブックマン博士の生活の中には、そうした人間の心

に根本的ないやしを与える力があったのです。

私たち一家はお互いに隠し合っていた間違いを、全部正直に話し合いました。それによって私たちは全く新しい出発をしたのです。私たち子供はもう父親を恐れる必要がなくなりました。正直さと正しく生きること。これこそ私たちばかりでなく、今アメリカがもっとも必要としていることだと思います」

ジョン・ライフは、鉄鋼組合の西海岸支部長をしていた時に、ブックマン博士にはじめて会った。当時サンフランシスコにいたライフ夫妻は、ジャック・フラナリーとボブ・シッピーの二人のオルグとその妻たちをさそって、ある週末サンタ・クルズ山中にあるブルックデール・ロッジというホテルにブックマン博士をたずねた。ついたその晩、一行は小川が部屋の中を流れるように趣好をこらした食堂で、ブックマン博士と夕食をともにした。

食後、博士の友人たち——その中には経営者もいたが——が集まっていろいろと話し合った。アメリカの国内を融和させるにはどうしたらよいかということなどが、真剣に話題になっていた。その中の一人が心に浮かんでくる考えを書きとめるというガイダンスについて話した。

ただ、そこにはフラナリーとブックマン博士の姿が見えなかった。いつもの習慣でフラナリー

は食事がすむとすぐにバーに行ってしまった。しかし、いつもと一つだけ違ったことがあった。それはブックマン博士が彼といっしょにバーに入り、スタンドでジンジャーエールを飲んでいたことだ。ジョン・ライフは後でよく博士のフラナリーに対するこの深い思いやりが、自分の生涯の転機になったと語った。

次の朝、朝食の一時間前、博士はコーヒーをもって、ライフ夫妻の部屋の戸をノックした。博士はこう話しかけた。「ガイダンスをもつ間、コーヒーが飲みたいかと思ったので」

「それはまるで私たち夫婦がずっと前からガイダンスをもってでもいたかのような博士の自然な態度でした」とジョン・ライフは後で人々に語った。

朝食の時、ジャック・フラナリーが博士に向かって聞いた。「神様は、ぼくのような人間がいることを一体知っているんでしょうか」博士は答えた。「あなたの名前は神様の台帳にちゃんと書いてあるそうですよ。神様が私にそう言いましたよ」フラナリーはこの言葉を一生忘れなかった。

数週間後に、ライフはタホー湖でまたブックマン博士に会った。博士はこの時、アメリカの西海岸のある実業家の若い息子にライフの世話をさせた。ビルと呼ばれるこの青年は以前はなかなかの発展家だった。彼はこの時、労働条件や賃金については一言も語らずにライフを釣りに連れ

て行った。朝五時に起きてビルが朝食を作った。暁のタホー湖で釣りをしながらライフはいろいろと考えた。ビルは自分がどういうふうにしてチェンジしたかを話した。その朝ライフは小さい魚を二匹釣っただけだった。ところがライフの心はどうやらビルに釣られかかっているのであった。

夕食の時、二人の若い娘が給仕をした。

「あれは一体だれです」とライフが聞いた。

「ビルの姉妹ですよ」と博士はこともなげに答えた。ライフはおどろいて言った。

「じょうだんじゃない。われわれはあのおやじさんの会社でストを計画している最中なんですよ」

次の週末にライフはオルグの人たちを連れてまたやってきた。しかもこんどは野菜や果物をたくさんみやげに持ってきた。

三度目の週末にライフがきた時には、当時アラメダというところで起きていたベツレヘム鉄鋼会社の、もみにもんだストを解決したと報告した。アメリカの西海岸で労働者にとってこんなに有利な契約ができたのは初めてだった。解決の糸口は朝のガイダンスの時に与えられた作戦によるものであった。

「問題はだれが正しいかではなく、何が正しいかだというのがぼくのガイダンスでした」と、ライフは言った。

一九五三年に、ライフはブックマン博士の生まれ故郷のペンシルバニア州のアレンタウンのリーハイ・ヴァレー新聞組合長（CIO）に次の電文を送った。「ブックマン博士は長年の間、多くの国で道義標準と社会正義をもたらすために戦ってきた。私は一九四〇年以来博士を知っているが、博士の影響は健全な労働運動を推進する上で非常に大きいものがある」

ライフ一家は毎朝ガイダンスを持つようになった。これは彼の家庭生活の上でもまた組合長としての仕事の上でも、重要な指標を得る源泉となったのである（注。ウイリヤム・グローガン著『ジョン・ライフ』労働法学研究所発行参照）

ライフが死ぬ少し前のある朝、彼はいつものように頭に浮かんだ考えを書きとめていた。それはそのままライフの体験を要約した言葉だった。「この世界はありとあらゆる人間関係からひきおこされた問題が積み重なって大混乱におちいっている。もはや人間の知恵だけでは解決することはできない。私たちは人間よりも高い権威、すなわち神の意を求めて自分自身をチェンジし、他の人をチェンジして、さらに世界の現状を打開することを学ばなければならない。神の声に従うときにのみ私たちは正しい道を見出すことができることを私は心の底から信じている」

ブックマン博士の友人の中には、こうした組合関係の人もいれば、またファイアーストーン、エジソン、フォードのようなアメリカ実業界の先駆者もいた。この人たちも博士によって深く影響されたのである。

ヘンリー・フォードはブックマン博士に一文も金は出さなかった。しかし彼はつねに博士とその一行を家に歓迎した。「私たちの間には金というものを度外視した人間的な友情があったのだ」とブックマン博士は言っている。

戦時中、生産増強のための真剣な思想戦が行なわれていたころ、フォードはよくMRAを援助した。労使双方のために劇や集会が開かれる時など、フォードもきて人を案内したり、自分の住んでいるグリーンフィールド・ヴィリッジに博士を呼んで、友人たちに会わせたりした。「ブックマンという人を森の中に入れれば、木まで変ってしまうだろう」とフォードはじょうだんまじりに言った。博士とつきあっているうちにフォード自身もいく分その秘訣を学んだらしく、ある時ブックマン博士にこんなことを言った。「昨年、あなたがここにいらしてから、私の下で働いている経営者の間で十九もの離婚沙汰が取りやめになりました。私が自分で彼らの家に行って話してきたのだから本当ですよ」

一九四二年に、フォード夫妻はMRAをアメリカに広めるためにミシガン州のマキノ島に訓練センターを開いてはどうかとすすめた。

ヘンリー・フォードは電話をかけることの極端にきらいな男だった。ところがある日曜の午後、自分でブックマン博士に電話をかけてきた。その晩の音楽会に切符があるが行かないかとさそったのである。博士は喜んでその招待を受け、切符を受け取りに自分で出かけた。大抵、そういう場合には、フォード邸の門番のところに置いてあるものなので、そこへ行くと、あずかっていないという。電話で問い合わせると家までおいでくださいということだった。

家に行って見ると、フォード自身が待っていて、博士を奥まった部屋に案内し、煖炉に火をつけてから、おもむろに、医者に手術をすすめられているのだが、どう思うかと博士の意見を求めた。二人はそれから一時間半、いろいろと話し合った。その結果、手術をすることが正しかろうという結論が出た。そこで、席を立つと、フォードは次の部屋へ博士を案内して、また煖炉の火をつけた。実は遺言のことが気がかりだと彼は言う。まだ書いてないが、書くべきだと思うと言って、いろいろ自分の考えていることを話し合った。そして考えがまとまり、遺言書が書かれた。

ヘンリー・フォードの気にかかっていたのは、自分が入院した後の夫人のことであった。ブッ

クマン博士は、自分が気をつけてお世話しましょうと申し出た。博士がフォード邸を辞したのは夜も大分更けてからであった。

次の朝、フォードは仕事を整理した後、午後に入院した。その日、博士はフォード夫人を訪問し、心配顔の夫人をさそってグリーンフィールド・ヴィリッジへ行き、フォードの最初のころの自動車が展示してある会場を訪れたりして夫人をいたわった。

後になって、ブックマン博士が病気でサラトガ市で入院していた時、フォードはよく電話で容体を尋ねた。

フォードが亡くなった時、博士はヨーロッパにいたが、アメリカにいる友人二人に託して、メッセージを届けさせた。その電報がつくとすぐ、その夜のうちに、二人の友人がフォード家を訪れた。いっさい面会を断っていた夫人は、ブックマン博士の友人と聞いて直ちに会って、博士のその後の様子から、世界中におきているMRAのニュースをいろいろと聞いた。

MRAを通じて、ヘンリー・フォードは個人的な道徳観念を公けの政策に生かす道を見出したのである。ある時、彼は新聞に次のステートメントを発表した。「MRAの業績を見ると、私はアメリカおよび世界の将来に希望を持つことができるのです」

もう一人、ブックマン博士の良い友人はロサンゼルスのジョゼフ・スコット氏だった。この人は有名な弁護士で、一九三六年には、アメリカでも全国的に有力なカトリック信徒として教会から表彰された。彼はまた三人の法王から祝福を受けた。一九二六年から一九三八年の間に、五回にわたって国際カトリック会議で演説している。カリフォルニア州でナイツ・オブ・コラムバス会を組織し、かつてハーバート・フーバーが大統領候補になった時は、おされてその推薦者になったこともある。カリフォルニアでは、彼は「ミスター・ロサンゼルス」として、ひろく知られていた。

ジョー・スコットは単純で、深い信仰を持っていた。若いころ、アイルランドの故郷を後に、新しい世界を求めてアメリカへ渡って来たのである。彼はよくこんなことを言った。「今でもよく覚えているが、ニューヨークの港に船がはいって、自由の女神のそばを通ったとき、甲板にひざまずいて、ここまで無事来ることができたことを神に感謝した。私の母は小さい人で、快く私を手ばなしてくれた。きっと天国でまた、会えるにちがいないと思っている」

スコットの息子の一人は牧師だったが、早逝した。知らせを聞くとブックマン博士は直ぐさまスコット家を訪れた。ドアをあけたのは父のスコット氏自身であった。博士は哀しみに乾ききった父親の顔をじっと見ていたが、その手をにぎると、「ジョー、神はすべてをよく知っておられ

る」と言った。急に涙がスコット氏の両頬を流れた。それ以来、スコット氏が一九五八年に、九十歳で亡くなるまで、二人の間には堅い友情がつづいたのである。

最後の三年間に、ジョー・スコットはＭＲＡの国際勢力に加わってアジア、ヨーロッパ、そしてアメリカの各地を全行程五万六千キロにわたって旅行した。ヨーロッパでスコット氏は各国の代表者に向かってこう語った。「世界には心に苦々しい恨みを宿し、神を無視した世界を作ろうとしている人がたくさんいる。今日、ブックマン博士は世界が直面しているイデオロギーの戦いの最前線にあって戦っている。歴史の十字路に立つわれわれにとって答はひとつしかない。それはブックマン博士の発見した答だ」

一九五六年のある朝早く、スコット氏はカリフォルニアのパサデナの駅でブックマン博士の到着を待っていた。博士が汽車から降りるか降りないうちに彼は言った。「フランク、よくきてくれた。君の助けが必要なのだ。このカリフォルニアはソドムかゴモラのような土地になってしまった」（道義的に頽廃し、同性愛の風習が蔓延し、神の罰を受けて焼き滅ぼされた町の名―旧約聖書）

あるフランスの枢機卿はスコット氏と会見した際、ＭＲＡを評してこう言った。「ＭＲＡは使命を忘れたクリスチャンにとって、鞭のひびきを持っているし、まじめなマルキストに対してマルクス主義にかわるより建設的な考え方を提供している」

スコット氏はブックマン博士のことについてこう言った。「博士はアッシジの聖フランシスのように、議論の余地のない人格をもった人である」

一九五五年、ワシントンでMRA大会が開かれた時、ジョー・スコットはわざわざロサンゼルスから飛来して、世界中から集まっている人たちを前にして次のように語った。「私の長い生涯でも、今日ほど世界の情勢が悪化したときは少ない。人類は原子爆弾などを作る技術は発見したが、それに比べて世界が今日ほど、疑惑、冷笑主義、憎しみ、絶望などにみちていたことはない。今日ほど将来に対する思慮が欠けている時もない。世界に満ちみちている憎しみに対する唯一つの答はブックマン博士の提唱しているMRAだけだ」

その年、スコット氏は、ブックマン博士の発案で二十八ヵ国の二百名以上の人々とともにフィリピンを訪れた。彼は一行に加わっていた日本の政治家をマグサイサイ大統領に紹介した。このことが、両国の歴史的な和解の第一歩となったのである。マニラのある新聞はスコット氏について次のように書いた。「八十七歳のジョー・スコット氏は、カトリック信者として強い信仰の持ち主であるが、MRAが、カトリック教をも含めて、あらゆる信仰を深め、かつ強める力を持っていることを感動的に話した」

ブックマン博士が亡くなった時、スコット氏の令息で、ロサンゼルスの港湾労働者の間で働い

ているジョージ・スコット司教から次のような弔電がよせられた。「ブックマン博士の死を心から悼む。願わくば、その魂に安らぎあらんことを。父をはじめ多くの友人が天国で喜んで博士を迎えるであろう」

真理を、どうしたら大衆に理解させることができるだろうかと、ブックマン博士は絶えず考えつづけ、新しい方法をさがし求めていた。劇、映画、テレビなども使いようによっては歴史の流れを変えるために、無限の可能性をもっていると考えた。

ミュリエル・スミスのような芸術家は彼のこうした信仰に動かされチェンジした一人である。彼女はブロードウェイのカルメン・ジョーンズの主役をつとめ、ロンドンのコベント・ガーデンの王室オペラハウスでカルメンを歌った人である。彼女は音楽家としての舞台での契約をすてて、MRAの映画「最高の経験」などを撮影するためにその才能を無償で提供している。ミュリエル・スミスは自分の経験を次のように述べているが、これは黒人のための憲章ともいうべきものである。

黒人として生まれ、アメリカの人種問題を身をもって経験している私は、自分の生涯をかけ

てこの問題に答を与えたいと願っていました。あらゆることをやってみましたが効果がなく、かえって反対の結果となるばかりでした。MRAに会ったときはじめてわかったことは、アメリカのこの傷をいやすものは、私の心の中から、そして私の生活の中からはじまるということでした。ということは、まず第一に自分自身の過去のあり方を正直にみつめ、動機の不純な点を見きわめて、利己的な野心とか、個人的な利益とかを捨てて、真っすぐに生きることでした。個人が自分の意志を完全に神にささげたとき、世界全体に対する深い愛情が与えられ、新しい基盤の上に生きてゆくことができることがわかりました。

アメリカの黒人問題にどうやって答が与えられるだろうか。黒人ばかりでなく、アメリカ人全体にも解答が必要なのだ。民主主義の最大の汚点となっている人種差別というこの現状をどうすることができるか。私に一体何ができるだろうか。

何世代にもわたって奴隷としてくさりにつながれてきた私たち黒人の経験が、果たして何かの役に立ち得るだろうか。アメリカの黒人の音楽的才能は黒人霊歌となってこの国にも世界にも芸術的伝統を与えてきた。しかしわれわれの経てきた苦しみを通してもっとも大きなものを世界に与えることができるのではないだろうか、と私の心にはひっきりなしにこうした疑問が往来しています。

われわれの国に分裂をひき起こした、過去の憎しみや恨みにとらえられていてはならない。共産主義のイデオロギーは、こうした人間の弱さをたくみに利用して、その勢力をのばしてきています。MRAのイデオロギーは、そうした心の傷をいやす道を与えています。自分の感情の奴隷になって生きていると、知らないうちに、手段をえらばずに世界を支配しようとする人たちの道具になってしまうのです。その結果は、奴隷状態です。黒人が奴隷から解放された歴史的過程は、近代史の中でも特筆される奇跡的な出来事です。私たちは奴隷制度というものがどんなものであるかを身をもって知っています。そして迫害されたからこそ真の勝利ということも体験しているのです。

今日、世界の危機に際して、国々の病をいやす、このMRAのイデオロギーを受け入れようではありませんか。分裂は奴隷状態を再現するものです。しかも今日では、それが世界大の規模で行なわれることになるでしょう。われわれアメリカ人が世界に向かって呼びかけるまえに国内でお互い同士が自由に話し合える状態をつくらなければなりません。

過去の憎しみ、恨みの痛手に答を与えないで放っておくことは昔と同じ矛盾と混乱をくり返すにすぎません。解答はあるのです。

問題は皮膚の色でなく品性にあるのです。われわれの選ばなければならない道はMRAか、

共産主義かです。

われわれ黒人は国民としての権利を得るために戦ってきました。しかし、本来の目的を達成するためにはどうしてもMRAのイデオロギーが必要です。MRAによってわれわれは思想的に攻勢に立つことができるのです。

われわれ黒人は歴史的なあらゆる困難を通じて、この史上最大の戦いのために準備されてきたのだと私は信じています。

女優であるミュリエル・スミスは自然に周囲の男性の心を捕えようと努力することが習い性となっていた。ブックマン博士はそれに気がついた。ある日、会話の途中で博士はふと「目つきに気をつけなさい」と言った。静かにこともなげに、しかし底力をもったその言葉は、当時、舞台上のあらゆる名声をほしいままにしていたこの歌手の心に深くのこったのである。

南部のテネシー出身のアン・バックルスも、人と国を作り変えようというブックマン博士の戦いに加わる決心をしたスターの一人である。

彼女はブロードウェイで「パジャマ・ゲーム」や「マックシング夫人」に出演していた。ある

時、重要なテレビ公演を五日後にひかえて、ふとした機縁でマキノ島にやってきた。

マキノに到着した時の彼女はものすごい厚化粧で、風がちょっと強く吹けば、つけまつげも飛んでしまうようであった。彼女は自分のチェンジについて次のように語っている。

「私は夫と離婚する寸前でした。もちろん、このことはだれにも話しはしませんでした。私がブックマン博士に会った時、博士はじっと、静かに私を見て、『離婚は古くさい』と一言いいました。私はぎくりとしました。これが私の生涯の鍵となったのです。

私は一生懸命でモダーンぶろうとしていたけれど、心の中は寂しく、恐れに満ちていました。大抵の人が私を見れば、ブロンドの女優という以外に何も認めてくれないのに、博士は初めから、私のような人間でも神に用いられれば、国を救うことができるという大きな期待を持っていてくれたのです。大きい仕事をするだろうと本気で期待されていると、自然にそういう仕事がしたくなってしまうものです。

最初にブックマン博士とお茶をのんだときには四十五分間、私が一人でしゃべりつづけました。それほど私は尊大で自分のことばかり考えていたのです。

他の人と会うときと同じように博士をも自分の思うようにしたいと思ったのです。私がさんざん芝居じみた演出を四十五分もつづけた後でブックマン博士は言いました。『あなたのことにつ

いて何かガイダンスがあったら、知らせましょう。もしガイダンスがなければ、それだけの話です』と言ってそのまま博士は立って部屋を出て行ってしまいました。その時、私は初めて他の人の意志に支配されずに、ただ神にのみ従う人に出会ったことに気がつきました。思いあがった私はぺしゃんこになったのです。そして当然そうあるべきだったのです。

博士はまた非常に寛大でした。私がしかられるべき時に、逆に博士は最も親切でした。ある時、私は自分の感じていることをまわりの人に全部ぶちまけたことがありました。その時は人を変えようなどと思うどころではなく、ただ自分を表現し、自分の権利を守ろうという利己主義な気持ちで一ぱいでした。そのすぐ後で、私は本当に恥ずかしいと思い、そっと自分の部屋に帰りました。ところがどうでしょう。私の部屋には美しい花が届けられていて、それにカードがついていました。それには『融合を求めるあなたのすばらしい戦いのために。フランク』と書いてありました。博士はこのようにユーモアと愛情に富んだ人でした。

博士はいつでも人の最悪を見ぬきながら、しかもその人の最上を期待して、そのために戦った人です。何度も博士は私の真の姿を私にわからせてくれました。ある時、私のある友情関係の間違いを指摘したことがあります。私は博士のいう真実を認めて『おっしゃるとおりです。類は友を呼ぶということもありますが私もそういう人間です』というと、博士は精魂をこめて『それな

ら、もうそういう関係は、はっきりと断ちきろうと思うのでなくてはだめですよ』と言いました。その時、私はチェンジするということが、どういうことかをはっきり知ったのです。まちがったことを許され、それをやめ、正しいことをはじめる、このことによってチェンジが可能になるのです。

ある時、私は自分に失望し、自分がもうだめだと思い、ブックマン博士にそのことを書き送りました。さっそく返事がきました。『神はあなたを夢にも想像しなかったほど大きく用いるだろう。あなたが神のために何をするかが問題ではなく、神があなたをとおして、またあなたの中で、働くことを妨げないことが大切なのだ。私たちが自分たちの頭で神を制限することをやめ、そればかりでなく、自分にはこれだけしかできないと、勝手に判断することをやめれば、神はちょうどサウロがチェンジしてパウロになったように、われわれをも全く違った人間にしてしまうことができるのだ』

また、金銭欲が強いのが私の欠点でした。その点を博士ははっきり正してくれました。ある時、博士は世界中で神が行なっている奇跡的な出来事を報じてきている手紙を読んでくれてから、『この手紙は黄金で一杯ですね、アン、あなたのポケットにもそういう黄金がはいっていますか』と私のほうを向いて言われました。博士は博士と一緒に働いているすべての人にしたよう

に、私にも信仰と祈りとで生きるように挑戦したのです。

私はある時、自分の持っているお金を全部MRAの仕事のために提供するというガイダンスを得たことがあります。そのとき博士から次のような手紙がきました。『自己を全部ささげるというあなたの決意の上に全く新しい未来が開かれるでしょう。なぜなら、それは毎日二十四時間、神があなたを用いるチャンスがあるということだからです。こういった基盤における生き方のみが、現代の世界の動向を左右することができるのです』

博士はまた演劇がもっている大きな役割をよく知っていました。あるとき、これから劇をしようというときに、博士は私たちに向かって次のように言われました。『今夜われわれは演劇の真の姿を見るだろう。あなたたちはいっさいを求めず、すべてを与えつくすだろう。気まぐれ、不用意、そうしたものには今夜限り終止符が打たれなければならない。このような劇は見る人々の心をひらき、健全な人を育てる。演劇にはその役目がある。きわめて重要な役目がある。みんなで心を一つにして、全世界を正しい方向に導く、新しい音楽、映画、演劇を作ろう。ものを創造するにはまず心の自由さが必要である。その自由をわれわれはまず作らなければならない』

ブックマン博士はハリウッドの映画産業が世界に対して大きな使命のあることを感じて、その

実現のために長年にわたって業界の人々のためにつくしてきた。一九三九年の七月のある日、ハリウッド・ボール野外劇場には三万人の人がつめかけ、一万五千人がはいれなかったほどであった。そこにはロサンゼルス市および映画関係の指導者が多数集まっていた。博士は言った。

「今夜私たちは新しい世界の予告編を見るのです。ハリウッドはMRAを国々に与えるための共鳴板となるでしょう」

ハリウッドの人たちはその意味を理解した。MGMの社長のルイス・メイヤー氏はその夜、ハリウッド・ボールに集まった人たちに向かって「映画というものはフィルムにきざまれた大使の役目をつとめなければいけない」と呼びかけた。二十一年後にジャネット・マクドナルドはそのときの大集会に参加したことや、ルイス・メイヤー主催のブックマン博士歓迎午餐会に出席したときのことを語った。この午餐会にはハリウッドのおもだった人たち二百五十名が出席した。マクドナルド嬢はそのときに話したブックマン博士の言葉をよく記憶していた。その日メイヤーは立ち上がって、彼女との長年の仲違いを謝罪したのであった。

ブックマン博士はいつでも人に会えば単なる知人ではなく、真の友人となった。

ジョエル・マックレー、その妻のフランセス・デイ、ジャネット・マクドナルドとその夫ジーン・レイモンドなどはブックマン博士の古い友人である。

ジェッシー・ラスキーも古い友人の一人である。あるとき、ナイジェリアで製作したMRAの「自由」という映画の試写会のあとで、ラスキーはブックマン博士やジョエル・マックレーの令息ジョディと一時間も劇場のロビーに立っていた。ラスキーは言った。

「映画製作については私もいくらか知識があるつもりです。しかしこの映画の中であなたは不可能を可能にされた。ハリウッドのわれわれではこの仕事は到底できなかったでしょう」

二十世紀フォックス社のチャールズ・スコーラス社長もブックマン博士の親友の一人であった。彼がロサンゼルスにあるMRAセンターにきたときに博士は歓迎のためにいろいろな歌を準備させた。スコーラスが広間にはいるや、二十ヵ国以上の人たちのコーラスがギリシャの国歌を歌った。ギリシャ出身のスコーラスはそこに釘づけになり、涙がとめどなく流れた。

夕食には特別に腕をふるった鴨料理が出た。食事の途中でスコーラス氏は博士をふり返って笑いながら言った。「この食事は五千ドルぐらいにつきそうです。MRAの劇を私の経営するカセイ・サークル劇場でやってください。照明をふくめてすべて私が提供しましょう」彼は約束を履行した。しかも一回だけでなく、その後、数年間に何回となく提供したのであった。

一九五一年、日本との講和条約が結ばれるときに、サンフランシスコでMRAが劇場を必要としたときも、スコーラス氏がその劇場を提供してくれた。日本の特命全権大使六人の中、五人が

ブックマン博士主催の晩餐会に出席したのち、この劇場でＭＲＡの劇を見た。彼らの態度はすっかり変ってしまった。

会議に出席していたフランスの元首相ロベール・シューマンはブックマン博士に向かって感慨深げに語った。「われわれ政治家が対日平和条約に署名する二年前に、すでにあなたは日本との真の平和を作っておられた」

ブックマン博士は政治家といわず、俳優といわず、労働指導者といわず、実業家といわず、老も若きもすべての人を通じて、アメリカのみならず、全世界が神に与えられた真の使命を生きるように戦った。博士自身の確信を次の言葉がよく語っている。「私の願いは、アメリカの一人一人が神の導きによる自由を得て、アメリカのために戦うことです。そのとき、アメリカ自身が目に見えない実在である神に導かれて、罪悪のきずなから真に自由になるでしょう。このことを私はまた他のすべての国のためにも望みます。次の世代の人たち、殊に戦場で戦っている青年たちに答をもたせたいのです。答のないことは彼らを罪にしばることであって、そのままにしておくことはわれわれに対抗している人々を同じ考え方に彼らを支配させてしまいます。そんなことでは真のデモクラシーはつくりだすことはできません。正しい革命を遂行するには信念をもたねばならないのです。この革命を早く遂行できるかできないかが、アメリカと世界が救われるかどう

かを決めるでしょう。この革命がなければ、混乱の革命が起こるだけです」

八　奇跡の日

人を変える秘訣というものは、年齢とは関係ない。ブックマン博士は八十三歳で亡くなるまで、毎日会う人の年齢にかかわりなく、その心の奥底にふれて彼らのために戦っていた。博士が発病する数ヵ月前のことであった。友人に向かって次のように言った。

「昨日は、三十四人もの人が私をたずねてきた」

これは決して博士が自慢して言った言葉ではなく、それが彼の日常生活であった。たずねてくるすべての人が、新しく生まれ変るように挑戦を受け、今まで自分では思いもよらなかった使命を生きる機会（チャンス）を与えられたのである。

博士ときわめて親しい二十一になる青年が言っている。

「ぼくがはじめてブックマン博士に会ったとき、博士はぼくの靴に目を止めた。当時、ぼくは十六だった。その朝、靴をみがいていなかったので、とてもよごれていた。ぼくは爪先まで赤面するような感じがした。それからブックマン博士は遠くのほうを見て、『君の将来には大きい使命がある』と静かに言った。この言葉と靴をみがくべきこととの両方がぼくの心にやきついてしまった。ブックマン博士はぼくたちのような青年が足の先から頭のてっぺんまで、内も外も清潔であってほしいと願っていた。

誘惑に陥りやすいぼくのような人間に対して、ブックマン博士は青年時代の経験を率直に語ってくれた。そして博士自身の青年時代の経験を通して、誘惑に四つの段階があると次のように言った。見ること、考えること、うっとりすること、そして最後に落ちこむことである。見ることと考えることの間で、神の助けを求めることを博士は教えてくれた。また、ぼくが誘惑されやすい本とか絵とかを避けるようにとも言われた。「ぎりぎりのところは歩かない方がよい。崖から落ちる危険がある場合は、あまり端を歩かないことだね」などとよく言った。

ある晩のこと、ぼくは博士の部屋でお祈りをした。ぼくは立派な祈りをして、ほめられようと努力した。ぼくの次に博士が祈った。それはきわめて単刀直入な祈りだった。「神さま、どうかこの青年がきたない習慣をやめられますように。私たちが正直であるようにお助けください。ま

た純潔に、本当に純潔であるようにお助けください。無私であるようにお助けください。そしてお互いに愛し合い、夜であろうが昼であろうが、どんな時でもこのような時間が持てるようにお助けください」博士のこの祈りは、なぜかぼくの心に深くつきささり、その部屋を出たときのぼくは前と違った人間になっていた」

ブックマン博士は常に人に対して現実的で、直截であった。あるとき、イギリスの陸軍大佐が彼に会いにきた。この人は多才な人で陸軍省でも重要な地位についていた。キリスト教関係の運動にも属していて、英国ではよく知られていた。大佐はこう言った。「私は息子のことで困っています。私も忙しいし、あなたもお忙しい。私と一緒にきてくださいませんか。タクシーの中でその子についてお話したいと思います」二人は一緒に出かけた。

大佐が言うのに、自分はできるだけのことを息子にした。祈りもしたし、聖書も読んでやった。息子を教会にも行かせた。しかし、息子は口数も少なく、怒りっぽく機嫌やで、人を憎んでばかりいるという。

博士は大佐にこう聞いた。「あなたは自分のことを正直に息子さんに話しましたか。そのお子さんの年ごろのときにあなたがどんな少年だったか。また今日、実際にあなたがどんな人間であるか話しましたか」

大佐は答えて言った。「そんなことはできません。そんなことをしたら子供が当惑するでしょう。イギリスではそんなことはしません」

実際は息子よりも父親のほうが、もっと当惑するのではないか、また少年が一番必要としているものを与えるよりも、父親の誇りを守ることのほうが大切だと思っているのではないかと博士は聞いた。

目的地についたので、タクシーは止まった。しかし、大佐は降りようとしなかった。時間がたつにつれ、料金のメーターはあがった。それでも大佐は博士を離そうとしなかった。ついに大佐は言った。「どうせだめだと思います。しかし、いろいろやっても効果がなかったのですから、あなたのやり方をためしてみましょう」

数日後に、大佐は再び博士のもとを訪れた。彼はにこにこ笑っていた。「奇跡が起こりました。私は息子に正直に自分のことを話したのです。彼も正直になってくれました。今までとはすっかり違ってしまいました。息子は信仰を見出しました。私たちはまるで友だちのようになりました」今まではどちらかというと人に敬遠されるクリスチャンだつた彼が、この経験を通して、人を変えることのできる人間になったのである。

ブックマン博士のやり方は簡単すぎるという人がいる。確かに普通の人は自分の問題を複雑だと思いたがるものである。しかし、問題の根源は、その人が認めようとしないほど簡単なところにあることを博士はしばしば見出すのだった。ブックマン博士がはじめてオックスフォード大学に行ったとき、学生たちは博士と何時間も観念的な議論をしようとした。しかし、博士は、「君たちの問題は知的なものではない。道義的なものだ」と言った。そして博士の正しいことが、常に証明された。博士はまたこんなことも言った。「羽根箒などではとても間に会わない人が多い。エンジン付きの強力な掃除機と、強い殺菌剤が必要だ」

しかし、人間の精神に対する博士の外科手術的な熟練はきわめて微妙かつ、デリケートな技術であった。

そしてその手術は相手の生涯をとおしてつづけられるのを常とした。博士が友人の一人に対してとった非常に忠実なやり方は、博士の秘訣を遺憾なく物語っている。

その男は仕事の上では非常に成功していて、地位も高くなっていた。しかし、彼には信仰というものがなかった。

「君はキリストを経験することが必要だ」といって忠告する親切な友人たちもいた。しかし、彼はそれをうるさがり、秘書に命じて、居留守をつかうようになった。彼は幸福な家庭を持ち、

その大きな野心もようやく満たされようとしていた。ふとした機縁で、彼はブックマン博士とその友人たちに会った。彼らは神だとかキリストだとかの話はせず、むしろ彼の仕事のことや、その生活について話しかけてきた。彼は興味をもった。そして彼らの仕事について質問をするようにさえなった。

そこで彼らは絶対道義標準について話をした。彼は大学で習った哲学の議論をふりかざして言った。「絶対の標準なんて、そんなものはありっこない」彼らは答えた。「だってこれは標準なんだ。絶対でなかったら標準にならないでしょう」口では賛成しなかったけれども、彼はそれを認めざるを得なかった。彼らはさらに、彼が正直に神の声を聞くことをすすめた。

「だめだよ。ぼくは神を信じていないんだ」

そこでだれかが、ふと言った。

「それなら、その声を聞いたってなんでもないでしょう。君は別にその言葉に拘束されることはないんだから」

そこで彼はその実験を行なった。静かにすわって、神の語るのを待った。いくつかの考えがはっきり浮かんできた。最初の考えは妻に正直になることだった。その他、金銭のこと、自分の嫉妬心が家庭内に分裂をおこしていたこと、そしてさらに多くの人よりまして、理想家だったと自

負していた自分の生活も、その根本の動機は、成功、満足、保身など結局すべて自分のためであったことなどが次々と浮かんできた。

彼はこれらのことをいっさい書かなかった。そして神の声が聞こえたかと聞かれると、「聞こえないね。ぼくにはこんなことはだめだな」とそっけなく答えた。

彼らはそれ以上、彼に聞こうとせず、こう言った。「はじめてのときには、何も聞こえなかったという人が多いものだ。そういう時に限って、よく自分で認めたくないような考えが浮かんでいることがある。つまらない考えだと思うかもしれない。大事なことはそれを正直になることだ」

この言葉はあまりにもよく当たっていたので、彼は落ち着かない気持ちで家に帰った。ついに彼は自分の考えたことを実行しようと決心し、第一に妻に正直になった。このことによって彼の生活の中に道義的な変化がはじまった。

そこにはまだ信仰はなかった。しかし、毎日神にきくことをくり返していると、次第に自分の性質の深い点がわかりはじめた。かんしゃくとか、悪い習慣、習癖など、今までどうにもならなかったものについても、その原因や影響が見えるようになってきた。これについて彼らはこう言った。

「自分にできることをまず改めると、できないことは神が改めてくれるものだ」

彼が自分の中に、自分の力だけではどうにもならない、性格があることに気がついたことを見てとって、彼らは彼にキリストのことについて話をした。すなわち、キリストの力というものは、人間が最も深い必要を感じている点に対して働くものだと彼らは言った。

信仰というものは、すべてを捨ててキリストを受け入れるということである（FAITH Forsaking All I Take Him）という言葉が彼にわかりはじめた。今まではどうにもならなかった性格が自分以外の力によって変り出したときに信仰が芽ばえたのである。こうして毎朝早く、神の声を聞こうとしているうちに、自分のことばかりでなく、他の人のことについて考えが浮かぶようになってきた。こうしたことをとおして、彼は自分の外に大きな叡智があり、それは自分の知識以上の知識をもっているのだということを認めるようになった。自分がそれに耳をかし、従う決心さえすれば、人のために役立つことができることも知った。

ブックマン博士は彼が規律正しく生き、自分の決意に忠実であることを求めた。博士は毎日神に祈り、また神の声を聞くことを教えた。

「祈ることも大事だが、神がわれわれに言おうとすることをきくことはもっと大事だ」と博士は言った。また聖書を彼に読ませることもあった。コリント前書第六章九節から十一節に、次のような句があることも彼はこうして知った。

「行ない正しからざる者は神の国を嗣ぐことなし。これを銘記せよ。淫行の者、偶像を拝む者、姦淫をなす者、男娼となる者、男色を行なう者、盗みする者、貪慾の者、酒に酔う者、罵る者、奪う者などは、みな神の国を嗣ぐことなし。汝らのうちにもかかる者多し。されどキリストの名により、神のみ霊によりて、洗い、潔められかつ義とせられたるものなり」

博士は彼と一緒に毎朝、毎夕ごく自然に神に心を開いて自分たちや、MRAや、世界の必要について祈った。

博士はまた彼が自分の生活のすべての面で、少なくとも一人の信頼できる人に完全に正直になっていることを求めた。これは単に自分の心を楽にするために打ちあけるのではなかった。あらゆる点で自分の足りなさを知ることによって神を必要とする度合いが深まるからである。「罪の意識の少ない人には、神の意識も少ないものだ」と博士は言った。

自分の生活の中の間違いを認め、神の力によってこれをチェンジした場合には、それは他の人を変えるための武器となるものである。博士はあるとき、彼にこんなことを言った。「君は自分

の罪をどうしていいかわからずにいるようだ。私はどんどん使うことにしている。ちょうど、馬車馬のように罪を使ってやるのだ。それは人の心を開く切札だ。自分がどんなにいい人間で、いいことをしたかを話しても、決して人は心を動かさない。しかし、自分が失敗したことを正直に話すと、相手が正直に自分のことを話す場合が多い」

「このことは決して自分のことを全部いつでもだれにでも言うことではない。それは間違いだ。本当に間違いだ。ただ、ガイダンスがあって、それによって人が助けられることがわかっているときに、話すことを自分のプライドによって妨げてはいけない。もちろん、しかし、第三者の秘密に属することを話すべきでないことは当然だ」

あるとき、彼のいる前でブックマン博士は数人のオーストラリア人と話していた。オーストラリア人たちは自分たちの道義的妥協について正直に打ちあけた。ブックマン博士は言った。「一体どうして君たちはそういうばかなことをするのか、私には全くわからない。私にはそんな不潔なことを考えたり、したりしている時間は全然ない。考えなければならない面白いことがたくさんあるじゃないか」

オーストラリア人たちは怒った。ブックマン博士がいかにも自分をいい人間だと思っているように考えたからである。そこで博士はこう言った。「私だって誘惑を感じないと言っているわけ

ではない。烏が自分の頭の上を飛ぶことを防ぐことはできないが、頭の中に巣を作らせなくたってすむのだ。私は自分が誘惑を感じた場合に、それがもし人を助ける役に立つことだったら、すぐにそれを人に話すことにしている」

あるとき、彼が罪をどう解決したらよいかと尋ねると、博士は簡単に答えた。「罪を憎むこと。やめること、だれかに正直に話すこと、自分にできることは正しくすること。それによって君は精神的に成長していくのだ」

現代の世界には同性愛の傾向が非常にあることに彼は気づいた。この関係に陥っている人たちは、羞恥心のために極力それを否定するか、あるいはそうした行為が間違っていないことを証明しようとする。心の寂しさや憎しみは往々にして悪意や、奇知や、強がりで隠されていることが多い。同性愛の人はしばしば残酷な心をもっている。しかし、ブックマン博士は同性愛を他の罪とちがったものとは考えていなかった。博士は彼に言った。「病源はつねに罪だ。神がそれを癒す力を持っている。その結果、奇跡が生まれる」

博士は自分のひねくれた性質をなんとかして直したいと願う人たちには、無限の理解と忍耐をもっていた。しかし、彼は一人よがりのキリスト教徒、すなわち、罪の力に癒しをもたらす経験をもたないために罪などはないと強弁したり、また罪とは単なる不幸な出来事、ないしは親ゆず

りの病気ででもあるかのように説明する似而非キリスト教徒に対しては、いっさい同情しなかった。「それはキリストの力を否定することだ。ロマ書の第一章を読むべきだ」と博士は言うのをつねとした。

ある朝、彼は二つの考えを得た。

「神の仕事のために絶対純潔を生きぬくこと。一生涯、この革命の中心にあって、生きつづけること」

このことはちょうど、ブックマン博士があらゆる人間的な保証を断ち切って有給の仕事を捨てたときと同じ決意をすることを意味した。あるいは二度と自分の家にも、国にも帰らないことにもなるかもしれなかった。神の要求するあらゆることを受け入れる準備をすることでもあった。ところが彼にはまだそれを受け入れる心の準備ができていなかった。

彼はこのことについてだれにも話さなかった。そのまま、毎日がつづいた。ただ心の中では、そこまでは犠牲を払うのはいやだとひそかに堅く思いきめていた。

ところが心の中のこの妥協は彼の良心をとがめた。そして彼はブックマン博士の歓心を得るために、おだてたり、ほめそやしたりするようになった。

ユダの裏切りは、自分が裏切ろうとする相手、またはその挑戦を拒否している相手に対して、口づけしてこれに媚びることもあり、またその人を殺害するような形をとって現われることもある。

ブックマン博士は直ちにこの男が何か妥協していることを感じた。どこかで神に従うことを拒絶した彼が、だんだん博士の指示や注意に頼り、慰めを求めるようになることを博士は知っていた。そこで博士は自分と彼との間にある戸という戸、窓という窓を全部とざしてしまった。彼のすること、なすことのすべてを博士はよしとしなかった。人前であろうが、二人だけの時であろうが博士は容赦なく、彼を糾弾した。博士は彼がその生活の基盤を、いっさいの人間の権威から離れて、神のみに求めるようにさせようと堅く決意していた。

あるとき、博士が大切なお客を多勢、食事に招待したことがあった。彼もその席に出ることになっていた。ところが、博士は部屋に入るや、彼の顔を見ていきなり大声で言った。「彼を出してしまえ。彼とは同席したくない。このお客の中にも交えたくない」

この例のような関係が、ほとんど四年間にわたってつづけられた。その間に、一度か二度、博士と彼が一緒にガイダンスを持ったことがあるが、そんなとき、彼に対する博士の確信は次のような古い讃美歌の形をとって現われた。

手に何一つたずさえず
ただ、十字架にわれはすがる
神よ、無衣のわれに、衣を与えたまえ
無力のわれに、恵みを垂れたまえ
汚れたわれを清めたまえ
そのときはじめてわれは生きる

あるとき、思い余って彼は尋ねた。「一体いつまでこんな暗黒と失意の状態がつづくのでしょう」博士は答えた。「それは私にはわからない。これは君の決意にかかっていることだ。私にはどうにもならない」そこまできても、彼はまだ正直になることを拒否しつづけていた。

ついに、彼が決意する日がきた。どんなことになろうとも、たとえ一生皿洗いをしようとも、

床みがきをしようとも、自分は神の命ずることをしよう。純潔を生きよう。そして世界の再造のための戦いを自分の戦いとして一生をかけようと、彼はちかった。

彼はかつて得たガイダンス、四年間、心で拒み、だれにも話さなかったあのことを数人の人たちに話した。そしてその人たちと一緒にひざまずいて、神の与える最高の使命と挑戦を全面的に受け入れたのである。

この彼の決意はすぐさま試練にあった。ちょうど、そのとき、彼は十四人の人と一緒にいたが、ブックマン博士から彼らをスイスにおける世界大会に招待する電報が届いた。全部が招待されたが、彼の名前だけがそこになかった。

彼は一人、自分の国に帰って行った。そこで、彼のまわりで人々がチェンジしはじめた。神は彼の新しい決意を大きく使っていた。それから二ヵ月たって、ブックマン博士から招待がきた。彼は行った。博士は丁重であったが、それだけだった。前と同じような気まずさがあった。博士は彼の決意が本物であるか、いまだに人間の思惑に頼ろうとしているかをためそうとしていた。それから数週間後、彼が一人で廊下を歩いていたとき、だれかが腕に手をおくのを感じた。気がつくとブックマン博士がそばに立っていた。「昔にかえったようだねえ、君」と博士は言った。ただ、それだけだった。

そのとき以来、何年もの間、博士と彼は心を一つにして働いた。しかし、二人の間には神があって、人間同士の偽りの忠誠はその姿を消していた。相手がだれであろうとも、人間同士の間柄が神との関係よりも大切になってしまうときには、その関係には何か間違ったものがあるということをブックマン博士はだれに対しても強く主張した。そして自分や、また他のだれにでも頼ろうとする人に対しては、その依頼心の根本にある間違ったものを正すために全力を尽くして、激しく、倦むことなく、戦いつづけるのであった。

こんなことがあってから、しばらくしてのことだった。彼は博士に次のようなことを話した。

「私は妻と子供たちを非常に愛しています。しかし、最近になって、彼らと私の関係の中に私の欲望の根本があったことがわかりました。すなわち人によく思われたい、人にほめられたい、また絶対に非難されたくないという恐ろしいほどの執念はそこから生まれていたのです。それが私の野心をかり立てる根源でした。私が成功しようとしたのも、人にほめられたかったからです。逆にまた、すべてが失敗しても、そこに行きさえすれば、必ず人間的な慰めを得られる一つの安全地帯だけは残しておきたいと思っていました。そして家庭をその場所にしていたのです。その結果、妻も私も子供たちもお互い同士を神よりも大切にしていました。だから、たとえ正しいとわかっていても、本当に心がいたむ恐れのある時には、お互い同士に最高の生き方をさせる

ように戦うことを避けてきました。結局、十字架をごまかしてきたことになるのです。この間、みんなですっかり正直に話し合って決心をしました。あなたが私たちに対して真っ向から戦ってくださったように、私たちもお互い同士に対してはもちろん、また他の人に対しても戦うということです。これからはこういう基盤で生きていく決心です」

ブックマン博士はしばらく黙っていた。が、やがてしみじみと言った。「過去四十年間というもの、一日も欠かさず、夜も昼も絶えず、私はあらゆる人との関係が断たれても構わないという心の用意をしつづけてこなければならなかった。そうでなければ、このような世界勢力をつくることは決してできなかっただろう」

ブックマン博士にとって絶対愛ということは人に対する時に、どんな恐れも持たない自由さを意味した。また、博士は人と神との間に横たわるものはすべて罪であると感じていた。キリストが妻や両親や子供の思惑にとらわれることなく神を選べと言ったのもこれと同じことであった。

ある朝、ブックマン博士は自分のある行為に対して、彼の批判を求めた。彼が正直に自分の意見を述べると、博士は言った。「いつでも私が間違っている時には注意してくれるだろうね。私だって他の人と同じだ。毎日注意される必要があるのだ。それをしてくれるだけの思いやりと常識を持っている人がきわめて少ない」

それからまた数ヵ月後に、彼は自分と妻との新しい決心が、二人の間の愛を深め、広め、そして強めたことを博士に話した。博士はその時、かつて彼の家族をひどく傷つけたことのある二人の人のことについて尋ねた。「いまでも恨んでいるかね」

「恨む？　とんでもないことです。今では私はあの人たちと親友です」

「そう。まあ、もう一度、考えて見たまえ」と博士は言った。

彼はそのことについていろいろ考えた。次の朝、はっきりしたガイダンスがきた。「ちょうど馬にけられたようなものだ。もちろん、馬を恨んではいないが、二度と馬の後ろは通るまいと注意している。恐れだ。私は恐れている。もう一度、彼らが妻や家族を傷つけるようなことを言ったりしたりしないかと恐れている。恐れと憎しみは隣り同士だ。これは改めなければならない」彼はそこで、その人たちに手紙を書いて、自分の中に秘められていた感情について陳謝した。この手紙は、受け取った二人にきわめて深いチェンジをもたらすこととなった。

その後、彼はブックマン博士に、「神の子、キリストの血潮、われわれをすべての罪から清めたまう」という句が自分にとって非常に深い意味を持つようになったと言った。

「君はそれをどういうふうに受け取っているかね」と博士は聞いた。彼は答えた。「私はキリストがすべての人のために死んだということは、すなわち、私自身のために死んだことであり、

私たちがキリストにすがりさえすれば、キリストは私たちの罪を許し、清めてくれるのだと信じます」

「それはそうに違いない。しかし、君の経験はまだ限界があるようだ」そして博士は、キリストの力というものは人間を単に罪の意識から一時的に解放するだけでなく、罪のもっている力自体からも永久に自由にすることができるものだということを彼に教えようとした。彼は今まで自分の性質というものは醜い岩のようなもので、かもめがたくさん巣くい、糞のあとがいっぱいついて、きたなくなっているのだと考えていた。年がたつにつれて、その岩がだんだんと形が整えられ、多少ともきれいになるのかと思っていた。しかし、今、彼が学んだことは、もちろん、神の力による人間の成長ということもあるには違いないが、もっと深い真実は、人間の性質というものは永久にきたない醜い岩であって、われわれは死ぬまでこの性質をかかえて生きて行かなければならないということであった。ところが、ここにキリストという存在があって、人間の生きている限り、つねに一瞬々々、永久に神の愛をもって人間の動機を変化させ、その人を使い、ささえ、導き、そして祝福しようとしているのであった。

「それはまるで、汚れた石段の上に清らかな流れが絶え間なく流れているようなものですね」と彼は博士に言った。

博士は次のような詩の一節を繰り返し、繰り返し彼に読ませた。

豊かな恵みが神の中にある
それは私の罪を蔽ってなお余りがある
癒しの力があふれ、流れるように
そして私の心が内も外も清めつづけられるように
(Make and keep me pure within)

「この最後の一行は英語で書かれたもっとも優れたことばだと私は思っている」と博士は言った。

博士は神が人間の心や意志や理性の構造を瞬間のうちに変えてしまうことができると信じていた。常に自分のまわりの人たちが年ごとにより深い神の体験をもつように助けることが、友情の自然のあり方だと考えていた。人や国の問題に対しての博士の意見があまりにも簡単すぎると考える人たちは、博士がどれだけ多くの時間と努力を払って一般の人や、指導者たちのために戦ってきたかを理解しない人たちである。人を変えることを知らない人たちこそが、問題をあまりに

簡単に考えてしまうのである。

博士を喜ばせようと思っていては、彼との友情は保てなかった。人間としての博士に頼ろうとする人を直すためには、時には理不尽とさえ思われる激しさで、しかも効果的に戦った。しかし、世界を再造するために、すべてをささげて戦っていれば、自然のうちに博士と同志的な間柄ができていた。これが神を愛する人たちの普通のあり方だと博士は信じていた。博士の友情は求めて得られるものでなかったが、ともに戦おうとする者には、つねに惜しみなく与えられた。そして博士はつねに、たとえ間違っていても正直に自分の思ったとおりを相手に告げ、相手もそうすることを期待していた。

「規律の火によって、つねに新鮮に保たれる人間関係」ということを博士はよく口にしていた。また有名なウィリヤム・ペンの言葉もたびたび引用した。「人は神に導かれることを選ばなければならない。さもなければ、独裁者の支配に属することとなる」これはただ独立を勝ちとろうとする国の運命についていえるばかりでなく、すべての人が家庭内での独裁や、不道徳や、悪習の支配に屈するかどうかという場合も、全く同じ選択に直面しているのであると博士は考えていた。

すべての人が神の子として、輝かしい自由の中に生きることができるように博士はそのすべてをささげて戦ったのである。

九　内閣もこの答を

アイルランドの独立をめぐって流血の紛争が相ついでいたころ、ある牧師が「人間の半分は、けだものにちがいない」と嘆いた。これを聞いた外交官が「そのとおり。しかもけだものである半分の方がずっとましなんだ」と言った。たしかに、人間がひとたび道をふみはずして悪の道を選んだとき、どんなけだものも及ばないほどの悪どさを発揮するものである。

愚劣で残虐な今日の世界のあり方を見るとこの外交官にも、また牧師にも同意せざるを得ない。しかし、人間性はチェンジできるのである。また、どんな人でも相手のチェンジを心の底から望むならば、どんなむずかしい相手であっても、その人をチェンジすることができるのである。人をチェンジすることは、現代の世界では忘れられた技術となってしまった。だから、世界

は道を失ってしまったのである。

人間性の扱い方に三つの方法がある。第一は生まれつきの人間性は変ることのできない素材でどうにもならないという見方だ。自由世界の人々は大体この見方をしている。すなわち、最悪を期待していれば、当たらずとも遠からずというわけである。今日、国の指導者たちは信仰の力によって、人をチェンジすることができることを忘れてしまった。だから信仰は、彼らの日常生活には本質的に無関係なものになってしまっている。

第二は人間の性質をたくみに利用することである。これは左右いずれを問わず、すべての物質主義者が用いる手である。例えば、共産主義者は世界中で、虚栄心、恐れ、野心、肉欲、貪欲を利用して国の指導者を自分の思う方向にあやつっている。それでも思うようにならない時は、暴力をもって強制し、時には殺すことさえ辞さない。目的のためには手段を選ばないという彼らの考え方からみれば、人間の存在は世界を共産化するために役立つ限りにおいてのみ価値がある。買収も強制もできないときには粛清してしまうのである。

第三の方法はブックマン博士の方法で、人間の性質をチェンジすることである。この方法は唯物主義者の方法よりも、早く、そして永久的である。人間の心や生活の構造は一瞬にして変えてしまうことができる。それはまた、現実的でもある。人間性を変えることなしに、世界が変ると

信じている人は幻想にとらわれているとしか言えない。ブックマン博士はこのことを次のように語っている。「われわれが人間性を世界大な規模で徹底的に変えることを学ばない限り、国々は暴力と破壊の歴史的過程をくり返すことになるだろう」博士は政治家が国をよく治めるには、人を変える秘訣を学ばなければならないと言っている。確かに現在の緊迫した情勢から見れば、自由世界の人々が人間の動機を世界大なスケールで変えることができることを証明しない限り、人類は共産主義の独裁か、原爆戦争のいずれかに突入せざるを得ないことは明らかである。これはきわめて論理的な結論で、ばかか、極端な利己主義者以外にはだれでも認めていることである。ここで二つのことが明らかになってくる。

第一は自分がしていないことを人に期待することはできない。世の中には、環境や国が変るべきだと言いながら、自分は一向に変ろうとしない反動的な人がたくさんいる。ブックマン博士はおそれることなく、神に聞きさえすれば、神は必ず自分の変るべきところを教えてくれると言った。自分がまず変り出せば神は次に他の人のどういう点を変えることができるか、またその人が変り出すことを助ける方法を教えてくれるのである。

第二にはだれかを本当に変えたいと思う場合、そのことを第一義にして生きなければいけない。そして、活字を読むように人を読むことを学ばなければならない。これには時間がかかる。

共産主義者はつねに人を研究している。クレムリンには自由世界のすべての指導者の性格、長所、弱点などを詳しく調べた資料がある。彼らは人々を意のままにするために研究するのである。かつてヘンリー・ドラモンドが言ったことだが、人が人を研究するにはみな、それぞれの動機がある。「弁護士は金銭的利益のために、芸術家は名声のために、俳優は喝采を得るために、小説家は小説を書くために、それぞれ人を研究する。自分勝手な利益のために人の性格を研究する人がいるのだから、相手のため、また神のために研究する人がいてもよいではないか」

その人のため、世界の将来のため、そして神のために人を変えたいと願う人は、毎朝十分に時間をかけて、神の指示のもとに相手のことを深く考えなければならないと博士は考えた。博士自身、ほとんど毎朝四時におきていた。また博士は祈ることによって全能の神の力が働くことを信じていた。こうした早朝の規律と自己を無にした祈りを経て、急に心をとらえるようなひらめきが浮かんでくる。それは突然で、しかも暗やみに光明を与えるような考えである。恐れなく、その考えを実行に移したとき、思いがけなく相手の生活を左右する鍵となることがある。これは神の仕事であるが、しかし、人もまた行なわなければならない。われわれが人のために規律を持ち、情熱を傾けるとき、その結果は他人の生活の中に道義的奇跡となって現われるのである。

何年も前にブックマン博士は人の心の動きやその必要に対して極度に敏感になりたいと祈った

ことがあった。あとで彼は言った。「時々、あんなことを祈らなければ良かったと思うこともある。人をチェンジするために用いられようと思うなら、相手の靴に穴があいていても、自分の足が冷たく感じるほどのきわめて深く、敏感な思いやりを持たなければならない」

人をチェンジするのに特定の法則はない。しかし、長年の経験によって、だれにでも共通ないくつかの点をあげることができる。

相手を飽きさせるな——相手が興味をもち、友情をかち得る前から、いきなり相手の意志を左右しようとする人がいる。そういう人は相手が話そうとすることより、自分が話すことのほうに興味を持っているのだ。ブックマン博士は全く違っていた。彼はよくこんなことを言った。「黙っていることを学ばなければいけない。人は大体しゃべりすぎる。それでは人の心を勝ちとることはできない。何も言わないでいることが最上の場合が多い。百も知っていることでも、相手が話すまでは黙っていたほうがよい。人を変える秘訣のいろはは相手がだれにも話したことのないことを話し出すときにはじまる」

人に会った後で、ブックマン博士の所に行くと必ず「相手は何と言ったか」と聞いた。決して、「君は相手になんと言ったか」とは聞かなかった。もちろん、他人の秘密に属するようなことは決して聞き出そうとはしなかったし、そうしたことは厳に戒めた。

なんでも本当のことさえ話せば、それで事足りると思っているような人には次のような話をして戒めた。遠くの的に向かって射撃している兵隊に、大佐が「一体、的に当たっているのかね」と聞くと、兵隊は「さあ、どうだかわかりませんが、とにかく、自分は打つだけ打っています」また、「五階の窓から目薬をおとして、下にいる人の目を治そうとしたって無理だ」とも言った。博士は個人々々のために徹底的に集中して考えることが大切だと信じ、そのために十分な時間をかけて祈り、かつ考えるよう人々を訓練した。そうした中から人の一生の転機となるような、時と所を得た適切な言葉が生まれるのである。

浅薄であるな——インテリぶった難問や問題を議論して時間をついやす人が多い。その結果は、何事もおこらない。それは相手の一番深い問題に全然ふれないからである。また、自分でわるいとわかっていながら、やめられず、その生活をつづけている人は、とかくインテリ的な議論をしたがるものである。それは良心をごまかすためである。ヘンリー・ドラモンドはあるとき、エジンバラ大学の講義を次のような言葉ではじめたことがあった。「諸君、今夜、私は道義的に堕落している人を対象として話をしようと思う。インテリ的な議論をしようとしている人はがまんしてもらいたい。私は諸君からたくさんの手紙を受け取っている。それによると道義的敗残者として、追いつめられて、救いを求めている人が非常に多い。今夜はその人たちの問題を優先的

にとりあげたいのだ」

今日、問題の根源をつく勇気も洞察力もなく、表面をかすっている人があまりに多い。あるとき、ブックマン博士がひとりの男と長いこと話し合っていた。

「わがままずぎるのがどうも欠点でしてね」

「他に何か問題があるんじゃないですか」

「そんなことはありません」

そこでブックマン博士は突然いった。

「あなたの問題は……じゃないんですか」

博士はその男の問題をズバリと言いあてた。彼のプライドは折れ、正直になってチェンジした。その男を駅まで送って行く途中、彼は言った

「はっきり言ってくださって救われました。そうでなかったら、結局はあなたを恨んだでしょう」

こうしたことも、博士の深い考えと祈りの結果、おきたことである。

正直はつねに鍵である。自分に正直な人間は人に対しても正直である。人を変えようと思う者は、自分も道義的な弱点とか敗北にも突っ込んでこれを解決する勇気を持たなければならない。

人間の意志と生活に対する戦いの結果、わかってくることは冷笑的な、無神論的な利己主義というものは、その九割までが低級な肉欲的敗北に根ざしているということである。現在の世界の混乱と無秩序の裏には、その原因として不純潔が隠されている場合がきわめて多い。多くの人がこの事実を認めようとしないのは、他人や自分の中にある不純潔を解決しようという意欲がないからである。

ブックマン博士は不純潔の代価をはっきり見ていた。最近、博士はある国の人々に向かって、燃えるような確信をもって「君たちは自分の妥協の代価をどうしても認めようとしない。それが問題だ」と言った。純潔の問題については、また次のように言った。「そんなことは個人的な問題だと君たちは言う。しかし、国の状態はどうだろうか。聞けば、工場などでは不純潔が当り前のこととして行なわれ、しかも破壊分子はそれを組織的に利用しているというではないか。彼らは、人間が道義的に混乱すれば、その考えも混乱することをよく承知している。国を浄化するため戦おうとする人があまりにも少ない。まちがいを正そうとする人が一人もなかったら、国はどうなるだろうか。分裂した家庭、手におえない子供たち、文明の崩壊、革命思想の台頭」さらに博士はつけ加えた。「しかし、これに対してはっきりと、道義標準を生きぬき、そのために戦う人々ができればひとつの勢力が生まれる。それは何物にも負けることのない一つの創造的な力と

なるのである。そのためには道義標準がどうしても必要である。同時に神の力が必要である。この二つがそろったときに、人類が忘れさろうとしていたダイナミックな力が生まれる。それは、聖霊の力と呼ばれるもので、人間の生涯に方向を与え、神の指示を明確に伝えるものである。

驚いたり、だまされたりしてはいけない——多くの子供たちは、自分のことをありのままに両親に話すことができずにいる。それは両親がショックをうけると思うからである。しかし、子供が気がつかないのはそういう両親に限って自分自身のことについて正直になったことのない人たちだということである。人を変えようとする場合、相手のいうことをすべて聞いて理解することが必要である。ブックマン博士はこう言った。「人というものは、自分を理解してくれて、善良すぎたり、利口ぶったりせず、なんでも正直に話してくれる人のところに行くものである。こういう人はどんなことを聞いても驚いたりはしない。自分自身の悪い性質もよく知っているからだ。自分の経験を話し、それ以上のことは話さないほうがよい。自分が現実に体験していないことを話すものではない」

多くの人は相手の反応にだまされる。釣り針にかかった魚がはねたり、抵抗したりすることを忘れてはいけない。長い間、眠っていた良心が目ざめるときには痛みを伴うものである。であるから彼らは自分をチェンジしようとする人に対して攻撃をかけたり、批判したりして抵抗する。

そしてあることないことを言い出してごまかそうとする。時にはブックマン博士自身を攻撃することもある。さらに彼のやり方に対して、あるいはＭＲＡ全般にわたって批判がむけられることもある。ところが、このような批判は、故意にその人の問題を隠すために行なわれる場合が多い。疑問には答えなければならないが、それだけでは相手の必要を満たしたことにはならない。

人が変るためには、罪がまず処理されなければならない。ところが世間は罪をおかしていないといったり、あるいはそんな事は問題でないといったり、さらには、それでいいのだと主張する人たちによってごまかされていることがきわめて多い。例えば同性愛の問題を例にあげて見よう。三、四十年前には、同性愛に陥った人たちはこれをひたかくしにかくして、そうしたものはないように装っていた。その後、同性愛は一種の軽い病気のようなもので、家庭生活や国民生活に影響するようなものではないという考えがたくみに宣伝され、受け入れられるようになった。ついに彼らは厚顔にも同性愛常習者のほうが、より有能で、知的で、しかも自然であるという説を社会におしつけるようになった。何百万の人がこれにごまかされている。そして現在ではこうした行為を是認しなければ、職業によってはつけないことすらある。昨日までは変質者とみられたものも、今日では正常だと思われるに至っているわけだ。この状態がつづけば、昨日は正常だった人が、明日は逆に変質者とみなされるおそれすらある。

いろいろな委員会が設置されて、さまざまの罪に関する報告が行なわれるが、これらも国を誤るものである。なぜならば、こうした委員会に資料を与える人たちは、自分の本当の弱点にふれない場合が多いからである。たとえば、よっぱらいに向かって酒のみ運転の危険を証明させようとするようなものだ。おそらく彼は今までの報告が大げさで、酒を少したしなむことは神経をしずめ、意識をはっきりさせてより良く運転できるというようなことをいうにちがいない。この報告をきいて皆は気をよくし、死傷者の数はますますふえることになる。

「**何もおこらない**」**と決めるな**——多くの人は他人の生活が変るなどとは全然期待していない。それは自分の生活の中でそのような経験をしたことがないからである。

「信仰の深さが結果をきめる」

「王様（神）のところに行くときには、大きな頼みごとをもって行け」などということばもある。罪に対して徹底的な処置をした上で本気で奇跡を期待するならば必ず奇跡はおこるであろう。

ブックマン博士は人を盲信するようなことはなかった。牧師だからといってバーテンよりも罪が少ないなどとは思わなかった。博士にとって王であろうが、炭坑夫であろうが、罪は罪であった。ある大国の総理大臣と話し合っていた時に、「罪」が話題となったことがある。同席してい

た首相夫人が口をはさんだ。「博士、罪などとおっしゃらないでください。私はその言葉が大きらいです」「それは失礼しました。なんと呼んでもいいのです。それではリューマチとでも呼びましょうか」「リューマチですって？　いやですわ。私は全身リューマチにかかっているんです」と夫人は答えた。

罪は人をしばり、盲目にし、無感覚にし、しかも罪はふえてゆくとブックマン博士は言った。

罪は人をしばる――われわれは自由だからなんでもしたいことはするというのがはじまりである。それでしたい放題のことをやりはじめる。次に、自分の良心をマヒさせるためにいろいろな理屈を考える。その中に、制御できると思っていた習癖に支配されて、その奴隷となってしまう。「思いは行動となり、行動は習癖を生み、習癖は品性をつくり、品性は運命を決定する」

罪は人を盲目にする――個人も国も善悪の区別がつかなくなってしまった。白と黒の見極めがなくなり、すべてがうすよごれた灰色一色に塗りつぶされてしまった。中国大陸で国民政府最後の総理大臣をつとめた何応欽将軍は言った。「われわれの知らない中にとんでもないことが起こってしまった。われわれは国を愛していたが、同時に不純潔におぼれ、多くのものは妾をもっていた。その中に共産主義者がいることには一向気がつかなかった」「愛は盲目だが、他人にはよく見える」という諺があるが、今日の民主主義の状態がまさにそれである。民主主義の強さはそ

れを唱える人の生活の質によってきまるのである。現在自由世界の人々は、この事実を忘れて自分たちの生活を棚にあげて会議の席上で立派な演説をくり返していることに気づかずにいる。

罪は人を無感覚にする——自己中心な生活をつづけている人は「我」にだけ支配されて、それ以外はまわりに何が起ころうとも全く無感覚になってしまう。女、酒、睡眠薬、強壮剤、煙草、その他の刺激がなくては生活ができなくなる。しかも、自分が生きた屍であることには一向気づかずにいる。そればかりでなく他人の生命をも奪ってしまうのである。というのは、こういう人が社会にふえると、独裁者がでなければ収拾がつかなくなり、専制政治がはじまるからである。こういう精神的に死んだ人たちに限って、今日の世界は共産主義か原爆戦争のいずれしかないというまちがった選択を信じるようになる。

罪はふえていく——罪というものは個人的な問題ですむものではなく、病源菌のように人から人へ、国から国へと伝染するものである。映画、ラジオ、テレビ、新聞、雑誌などは、人間の敗北の姿を何百万の人たちに伝播する。不道徳は魅惑的に飾りたてられる。そして進歩という名のもとに国々は腐敗し、破綻して行く。

しかし、罪には解答がある。混乱は道義的妥協から生まれ、明晰さはチェンジからくる。「病源は罪であり、それを癒すのはキリストの力である。その結果、奇跡が生まれる」とブックマン

博士は言った。罪を早く見極め、すぐ次の段階に動くことが大切である。そして直ちに反応してチェンジする鋭敏さをもたなければならない。罪を最小限度に扱ってはならない。最大限に強調すべきである。チェンジし、早くそれを償って先に進むべきである。チェンジし、融合し、戦うこと、これが自然の順序である。

人と国をつくりかえようと思う者は朝、目をさますと同時に静かに考える時間を持ち、人や国のために深く思いを至さなければならないと博士は信じていた。すなわち、自分を離れて神の力と方向を求め、それによって一日の生活を規正していくのである。

これからというときにやめてしまってはいけない——神の計画は人が自分のためにもつどんな計画よりもはるかに大きくすぐれていると博士は信じていた。善良な人間をつくることには博士は興味をもっていなかった。その人が神の指示のもとに全世界に革命をもたらすための全面的な役割を果たすようになることが博士の目的であった。チェンジするということは、たとえば、ブレーキをかけ、エンジンをとめ、タイヤから空気をぬいて、おとなしくなるだけだと思うことは大変な間違いである。神によって清められ、導かれたときは正しい方向に向かって前よりもより強く、より早く、前進できると博士は考えていた。いわゆるクリスチャンくさい、変に静かな人格、敬虔なしゃべり方はいっさい無用だと博士は思っていた。これから帰国しようとするアジア

のある指導者に向かって博士は言った。「国を救いたいと思うなら、自分のことをいっさい忘れて全力をつくすことです」人が神に聞く場合、やめるべきことと進んでするべきことと二種類の指示を与えられる。両方とも重要ではあるが、博士は積極的に行なう事柄に興味をもっていた。

博士はまた人や国に対していつも遠大な構想をもっていた。たとえば日本の総理大臣に向かっては「日本はアジアの燈台となるべきだ」と言った。数日後、これは国の方向として国民に伝えられた。また、キプロス島のマカリオス大統領に対しては、「キプロスこそがギリシャとトルコ、ヨーロッパとアフリカを結ぶ黄金の橋となるべきだ」と言った。大統領はキプロス独立後、最初の公式声明の中にこの考えをもりこんでいる。キプロス島が独立した日に大統領と副大統領は、感謝の意をこめて最初の国旗をコーのブックマン博士のもとに送った。

自分の生き方によって周囲の人々がチェンジし、国の政策に影響を与えるような生き方をすべての人がすべきだと博士は期待していた。

あるとき、八人の日本人が博士のところへきた。昼食の座につくや否や、博士は聞いた。「日本に対する君たちの計画は?」一同、だまっていた。

博士はさらに言った。「君たちお互い同士、完全に融和しているかね」再び沈黙がつづいた。

ブックマン博士はつづけて言った。「日本で相当の仕事をしてきたことは認める。しかし、国

はどういうことになっているのか。日本はますます危険になっているではないか」

そして日本の一番大きい問題は何かと博士が聞くと、一同口をそろえて「共産主義です」と答えた。

「そうではない。汚職と不純潔だ。君たちは国の指導者たちに対してこの点についてはっきり戦う勇気があるか。私は日本を心から愛している。だから日本の現状が心配なのだ」と博士は言った。

八人は部屋を出た。そして互いに正直に話し合った。隠されていたお互いの間の嫉妬心、不純潔、憎しみなどが表面に現われた。それを処理したとき、新しい融和が生まれ、八人はともに国の現状に直面し、これの対策についてガイダンスをもった。三日間で「光の矢」という劇が書かれた。きわめて単刀直入に国の現状を描写した劇で、上演の際には、本人や家族たちに危害が加えられることをおそれるほどだった。台本を読んだ博士は言った。「険しい道を行かなければならない。君たちは撃たれるかもしれない。しかし、国は救われるだろう。そして将来の世代はこれに感謝するだろう」

一ヵ月後に、この劇は国会議事堂に近いある劇場で上演され、日本をゆすぶり動かすこととなった。劇中には政府部内の汚職や共産主義者の妾を持った閣僚が出てくる。ある政府高官がこれ

を見て言った。「これは誇張だ。こんな劇はやめるべきだ。これは危険だ」しかし数日後に彼は再びやってきた。「私は間違っていた。調査してみたらあの劇に書いてあるすべては真実だ。状況はきわめてわるい。そしてこれしか答はないようだ」閣僚も財界人も、労働指導者も、多数がつめかけてこの劇を見た。テレビもこれを取りあげ、全国放送を行なった。

この人たちは総理大臣に招かれた。彼らは総理に対して、日本の実状、そして彼自身の内閣のあり方についてはっきり事実を語った。そして日本の徹底的浄化を挑戦した。総理は言った。「わたしに真実を言ってくれた君たちの愛国心に感謝する。今後もつづけ合いたいと思う」一九六〇年に共産主義の作戦は学生を中心としたデモで日本をゆさぶった。その戦いの中にあって「光の矢」を通してチェンジした人たちは国を守るために大きな役割を果たした。

ブックマン博士にとってこのようなことは決して珍しいことではない。人に対するときには、いつでもはっきりとまた直接的であるべきだと彼はすべての人に要求した。彼にとってはこれが革命家としての正常の生き方であった。ごく普通の人でも神に導かれれば非凡のことができると彼は信じていた。ペンシルバニアのブックマン家の墓地を見おろす丘の上で彼はあるときかたわらの友人をふり返って言葉少なく言った。「神はすばらしいやり方でわたしを導いてくれた」神の導きを受け入れる決意をした人々には、あらゆる夢や空想をこえて、さらに大きな結果が与え

られるということを彼はその経験から深く信じていた。

十　将来のリーダーシップ

二十五年ほど前、ブックマン博士はこんなことを言った。「この仕事を私以上によくやることのできる人を大ぜい訓練しなければ、結局私の仕事は失敗に終ってしまうだろう」長い間、博士は自分がいなくても仕事が進んでいくように努力してきた。この点で博士は他の多くのいわゆる「指導者」たちと非常に違っていた。

あるとき、博士はこんなことを言った。「私は諸君にひとつのことを約束します。私は後退しません。ほかのだれが背を向けようとも、またその犠牲がなんであろうとも、私は後退しません。私がいるからという理由だけで、諸君に一緒にきてもらいたくはありません。そんなことではないのです。そんなことだったら貧弱な革命です。貧弱な同志です。キリストが十字架につい

た光景を思いおこそうではありませんか。もし諸君がこの大十字軍に参加するならば、十字架の道が与えられるでしょう。私は物質的な成功という希望で諸君を釣ろうとはしません。また諸君が英雄になるだろうと誘いもしません。……十字架を自分自身が体験することです。私ではなく、キリストです。私が先頭に立っているのではない。キリストがひきいているのです」

博士は本気でこれを言い、本気でこの精神を生きたのである。同志たちが一緒に働き、心を合わせて神の意志の中に戦いの方向を求めるように彼は戦った。博士に無理に権威をもたせ、その命令がなければ動きたがらないような人に対して彼は怒りを隠さなかった。だから博士の死後、その後継者はだれであろうとか、MRAの将来の指導者はだれかというような推測をしているのは意味がないわけである。MRAの仕事は今までと同様、嫉妬や野心から解放され、心を合わせて神の意志の中に正しい方向を求めて全面的に戦う人たちによって受けつがれていくであろう。ブックマン博士自身がその生前において拒みつづけてきたいわゆる「指導者」の地位を今さら特定の個人やグループがこれを継承する理屈はないわけである。

博士の死後、各国の指導者がその生前にも見られなかったほど多く、つぎつぎとコーにつめかけてきた。

その中にはビルマのウ・ヌー首相の姿もあった。コーでウ・ヌー首相はきわめて強い言葉でM

RAの急速な発展がいかに必要であるかを強調した。われわれがフランク・ブックマンの秘訣を学び、これによって世界の問題をすみやかに解決しなければ、人類は破滅してしまうだろうと、首相は断言した。

ウ・ヌー首相が周囲の人に対する扱い方の中から、首相自身がブックマン博士の秘訣を会得しはじめていることがうかがわれる。

亡くなる前、ブックマン博士がウ・ヌー首相に言い残したものの中に次のような言葉があった。「われわれは活字になった文章を読むように、はっきり人の心のうちを読むことを学ばなくてはいけない」

一九六一年九月、ブックマン博士が亡くなってから五週間後のことであるが、当時、コーを訪問したウ・ヌー首相は食卓の席でブラジルのある港湾労働者と隣り合わせになった。その人は首相に自分がどのようにして、チェンジしたかを語り、暴力沙汰を好む心がなくなって、世界再造の戦いの中に身を投ずるに至った経緯を物語った。「私はひどい大酒飲みで、そのためにもう少しで家庭を破壊してしまうところでした」

「私もよく大酒を飲んだものだ」と首相は言った。「十歳の時から飲みはじめて、一度はやめたけれど、生来、意志が弱くてまた飲み出してしまった。二十六になってやっと本当にやめたの

だが、今では死んでも飲まないことにしている」

港湾労働者は次に彼の憎しみについて語った。「今はその感情はなくなったのかね、本当に憎しみの心から自由になったと感じるかね、もう一滴の恨み心も持っていないかね」と首相はかさねて確かめるのだった。

こういうふうに思いやりと細やかさをもって、首相は相手の心にひそんでいる憎しみの原因を引き出し、これに解答を発見することを助けたのだった。

コーで、ウ・ヌー首相は、「共産主義が全世界を征服するのをとめるには、まず汚職や賄賂や酒や女の問題から解決してかからなければならない」と言った。首相はすでにビルマにおけるMRAの活動の効果を知っている。七万五千名にのぼる仏教僧侶を擁するビルマ仏教僧院長会議の一九六一年度大会では、MRAが主要議題となり、その結果、ブックマン博士の八十三歳の誕生日を祝うため、五人の大僧正がスイスのコーにでかけた。この五人はMRAをビルマの国策にしなければならないという堅い決意をもって帰国し、今では僧侶たちの手によってMRAの映画、書籍、雑誌などが全国に広範に配布されている。

相手が普通の人であろうが、国の指導者であろうが、これに対するブックマン博士の影響力は

非常に永続性をもっていた。もちろん、中には消えて行く人もある。それは今にはじまったことでなく、聖マルコもそのことを自分の本の第四章に書いている。しかし、きわめて多くの場合、博士との接触によって心の中にまかれた種は、何百倍にも育っていった。

一九五六年に、ベルリンのチタニアパレス劇場ではＭＲＡの音楽劇「消え行く島」が上演されていた。さしもの大劇場も観客であふれ、雪に蔽われた舗道には入場を待つ人々が長く列をなしていた。あまりの盛況に市の公会堂を借りて、はいりきれない人たちを収容するという状態だった。

ところが満員の公会堂の客席の後ろのほうに、みすぼらしい服装をして腰のまがった年老いた男が二晩つづけて立っているのを、ＭＲＡの一行の中にいたあるカナダ人が気がついた。二晩目にそのカナダ人は補助椅子を持ってきてすすめた。劇が終ると老人は彼のところにきて、「私を覚えていますか」と聞いた。

いくら考えても思い出せなかった。

「あなたは一九三六年にブックマン先生といっしょにこられた方じゃないですか」と老人は言った。

「そうです。でもどこでお目にかかりましたっけ」

「私はあのころ、ホテルのエレベーター・ボーイをしていました」年老いたドイツ人は糸もあらわになった洋服と破れた靴先を見やりながら言葉をつづけるのだった。「私は今、失業しているのです。仕事がなかなかありませんでね」

ポケットに手をやると老人はぼろぼろの紙入れを取り出し、中を捜していたが、やがてはじのほうがすりきれた名刺をとり出してカナダ人に見せた。名刺の片側には活字でフランク・ブックマンとしるされ、裏返して見ると、博士自身の筆跡で、「友人であり、同志であるマックスへ。フランク」と書かれていた。

「毎晩、先生がホテルに帰られると、どんなにおそくとも私に話しかけてくださったものでした。私を部屋に連れて行ってくださって、長いことお話したこともたびたびあります。先生は私の家庭を救ってくださいました。私はそのころ、ひどい大酒飲みだったのです。でも先生のおかげで信仰を与えられ、神の導きによって、正しく生きることを教えられました」男は再び紙入れの中を捜して、五十マルク紙幣をとり出した。おそらく全財産にも近かったのであろう。彼はそれをカナダ人に渡して言った。「先生にお会いになったら、これをお仕事のためにわたしてください。そして『マックスはまだ信仰をもっています』とお伝えください」

人を変えていなければ、今日の世界の危機の解決にはなんの役にも立っていないのだということを博士は、つねに彼の友人たちにわからせようとしていた。一九二五年、博士はインディアン・スタンダード紙に記事を書いた。それはちょうど、全世界にわたって博士の仕事の基礎が築かれつつある時代であった。その記事の内容は、以来今日に至るまで変ることなく、MRAの根本をなしている。

次に少しその記事から引用してみることにしよう。

新約聖書の中に、ちょうどわれわれがここで強調しようとしていることを、巧みに言い表わしている二つの物語がある。

第一はキリストが盲人を癒す話である。キリストが最初にこの盲人に手をふれて何が見えるかと聞くと、盲人は「人が森の木のように見えます。木が歩いています」と言った。キリストは再び盲人に手をふれて同じことを聞く。こんどは彼は「すべてがはっきりと見えます」と言ったという。

多くの人はこの最初の経験にとどまっている。つまり人を木としてしか見ていない。統計にあらわれた「数」、自分の大学なり、学校にいる学生の数とか、教会に来る人の数とか、森の

木を考えるのと同じである。人々を群衆としては見ているけれど、「一人々々をはっきり」見ることができない。大事なのは第二の経験である。その癒しを得たとき、一人々々をはっきりと見ることができるようになる。各人の必要、可能性、喜び、罪、成功、失敗などのすべてがはっきりと見えてくるのである。

第二の話はキリストが、サマリアの娼婦と井戸のそばで会う美しい物語である。キリストはあらゆる人種的偏見、慣習、形式をはなれて、世の中からさげすまれた女の罪に苦しむ心に救いの手をさしのべた。女はチェンジした。直ちに町へ行き、人々に向かって「あの人は私のすべての罪を知っていて、しかも私を助けてくれました。行ってあの人に会ってごらんなさい」と言った。この結果、「多くのサマリア人がチェンジした」と書いてある。この話はいつの時代にもあてはまる真実を伝えている。罪を知り、しかも助けてくれる人、それを世界は求めている。勇気といたわりと愛とをもって遠慮や慣習の壁をおし開いて、罪に苦しむ心にキリストの持つ癒しの力を与えることのできる人、それを世界は待ち望んでいるのである。

われわれはただ人に会っただけでは十分でない。この話のように、そこからさらにチェンジの体験に導いていくような仕事をしなくてはならないのである。罪に苦しむ心、いわば死んだ魂が神に導かれた人の生きた魂に接触するとき、キリストのもつ癒しの力が働くのである。こ

れは魂の医療である。罪が病源であり、キリストはその癒しであり、キリスト教徒は医者でなければならない。その時はじめて奇跡が生まれるのである。

われわれの多くは、実際に苦しんでいる人々と直接の接触を持とうとしない。そのために人の心の必要がわからなくなってしまうのである。だれにも話したことのないような心の秘密を人から打ち明けられた経験をもたない人が多い。そこまで相手の信頼を勝ち得ていないのである。だから当然チェンジされるべき相手がチェンジしないでいても自分の失敗に気がつかずにそのまま過ぎてしまうことになる。

先日私は実業家の人たちと話し合った。彼らは町の刷新のために懸命に努力していた。その中のひとりが言った。「われわれはもっと深く突っ込む必要がある。われわれには善意はあるかもしれない。しかし、物事の根本にまで触れていないのだ」彼はわれわれの仕事の失敗の大きな原因を言いあてている。すなわち、われわれは病気の根源を知らずに、治療の方法ばかりを口にしている。だから人々は両者の関係を見失ってしまうのである。罪が病源であるならば、第一にその罪を処置しなければならない。そのためにはまずわれわれ自身の中にある罪を解決しなければならない。「小さい罪」は事実、われわれの力を奪い、罪に悩んでいる人たちに対する心のほとばしりをも阻害してしまうものである。他人に対する悪意、嫉妬心、野心と

わがまま、批判の心、こういったものがどれほどたびたび忍びこんで、われわれの力を奪っていることか。

次は他人の中の罪をどのように処置するかである。われわれは、ともすればキリストの教えの中で人々に受け入れやすい面だけを強調することによって、人を勝ちとろうとする。しかし、実際に人をキリストから遠ざけている罪を解決しようとはしない。多くの場合、おそれがわれわれを支配している。他人の人格を侵害してはいけないなどといって遠慮をする。本当は心の秘密を話したがっている人がわれわれのまわりにはたくさんいるのだ。それなのにわれわれ自身の中にあるおそれと無理解がそれをさまたげているのである。井戸端にいたサマリアの女はキリストが愛をもって、悩みの根源にふれたのに対して、人格を侵害されたなどとは決して思わなかった。

人は、自分を理解して、しかも慣習をのりこえて、真実を語ってくれる人を待ち望んでいる。苦しみにあえぐ心がキリストの力によって輝かしい勝利に導かれていく。そういった体験を人は待ちのぞんでいるのである。

われわれのまわりの人々の間に奇跡が起こっているだろうか。心にキリストからくる十分な満足がなく、何か満たされない要求が心にあるのは周囲の人々にチェンジが起こっていないか

らである。われわれは神の存在は知っているかもしれない。しかし、われわれに必要なのは人の心にもっと深い理解を持つことである。人生の真の満足というものは、われわれの生活を通じて周囲の人々に次々とチェンジが起こっていくときにのみ与えられるものである。

ブックマン博士は五十年以上にわたって人を変えるという仕事にすべての情熱をかたむけてきた。

一九三八年、博士が六十歳のとき、時のカンタベリー大僧正コスモ・ゴードン・ラング猊下は博士にメッセージを送って、博士が「全世界を通じて数限りない人々に神の力をもたらし、チェンジの経験を与えた偉大な業績」を称賛した。

その数週間後に、ブックマン博士はスエーデンで次のように述べた。「自分が変ると当然、こんどは他の人を変えたいと考え始める。そしてさらには、文明全体を救いたいと思い、そのために何百万の大衆に到達したいと考えるようになる。これが人間の考え方の自然の発展である。世界で最も有能な人たちが破壊的な革命を計画し、すでに広範に動き出している。われわれが彼ら以上の抱負と視野のもとに精神革命をまき起こさない限り彼らがその革命に成功することになるであろう。問題はわれわれがヨーロッパ全体のあり方を変えてしまうような、真のキリスト教哲

学を打ち立てるか否かにかかっている。そしてまた、われわれがそのような精神革命をつくり出し得るキリスト教徒であるか否かにかかっているのである」

晩年の博士の演説の一つは次のように結ばれている。

「全世界は崩壊寸前の線を彷徨している。われわれは全力をあげて国を救わなければならない。人が変り、純潔と正直を生きて燃えるような情熱にとらえられた時に奇跡が起こる。新しい世界の基盤は汚職や妥協の砂上におかれるものでなく、神に導かれた人や国の、堅実でかたい巌のような基礎の上に築かれなければならない」

ブックマン博士の人の扱い方にはきまったやり方というようなものはなかった。臨機応変、時には全く思いもよらない彼の態度が機縁となってチェンジした人がたくさんいる。

インドのガンジー翁もブックマン博士によく世話になった。あるとき、ブックマン博士はロンドンで翁と令息のデバダス・ガンジー氏の二人を昼食に招待した。当時、英国ではガンジーの評判はきわめて悪く、また彼の偉大さを理解しない人たちは「はだかの異教徒」などという悪口を書きたてていた。

したがって、ガンジー翁は全く困っていた。食事がすむと博士は二人を外まで見送りに出て、

タクシーを止め、行く先を言って、あらかじめ運転手に代金をわたした。そしてちょっと考えていたが、さらに心付けとしていくばくかを渡した。二十年後にデバダス・ガンジー氏は次のように言った。「金持ちではあそこまでは気がつかない。ブックマンは神に導かれていたのだ」

ガンジー翁の一生を映画に撮影するときに、デバダス・ガンジー氏はMRAの国際コーラスに頼んでガンジー翁の好んで歌った「やさしき光よ、導きたまえ」という讃美歌を吹きこんでもらった。デバダス氏はこう言っている。「もしも、すべてのキリスト教徒が博士のような生き方をしていたならば、アジアの歴史は全く違ったものとなっていたであろう」

ブックマン博士は神が、国々をゆるがすような大きな仕事をしてくれるのだと信じ、かつ期待していた。彼はしばしば言った。「神の手から偉大な成果を期待すること、そして神のために偉大な仕事をすることにつとめること」同時にまた博士は人および国の中に働いている悪の力の強さをもよく知っていた。

ある時、博士の友人の一人がイギリスでも名のある小説家に会った。この男は同性愛の常習者でそれを隠そうともしていなかった。彼は博士の周囲で人々がチェンジしていくのをみて心を動かされ、自分もこの性格的な欠陥から自由になれるだろうかと、半ばおそれ、半ば望んでいたの

である。

数日後、彼はロンドンのあるクラブにくだんの友人を招いて言った。「ご承知のように、ぼくは同性との肉体的交渉なしには暮らせない人間なんだ。子供のころ、母が父になぐられ、血だらけになって倒れているのを見たときから、ぼくは変質者になってしまった。後で、ある小説家から強制的に交渉をいどまれた。それ以来、この習癖が生活の一部になってしまった。もっとも、都合のいい面もある。何しろ、英国の劇界で売り出すには同性愛を実行するか、少なくとも是認しなければだめなんだから」

そこで博士の友人は自分自身が不純潔な習慣や女性とのふしだらな関係から自由になった経験を話し、神の力によって自由になることが可能だと言った。しかし、相手はこれに反応を示さなかったので、話はそれで終ってしまった。彼はこの男が自分を信頼してくれたことをうれしく思って、これ以上追究して彼の友情を失うことを恐れたのである。

次の年の夏、ブックマン博士がイギリスに戻ってくると、くだんの小説家が博士に会いにきた。三十分ほどの会見の間、彼はほとんどひとりでしゃべりまくっていたが、自分の一番深い問題にはふれようとしなかった。彼が帰ったあと、ブックマン博士は、「あの男は信用できない」と言った。それを裏書きするように、男はまもなく姿を消してしまった。彼はブックマン博士の

中にごまかすことのできない人間を見たのである。間もなく彼は新聞を通じて博士に対する猛烈な攻撃をはじめたのであった。

それから一年後、ブックマン博士は例の友人と散歩をしていた。博士は突然こう聞いた。「君の周囲の人々の間に同性愛が行なわれているだろうか」「まさか、そんなことはないでしょう。あれば私にわからないはずはありません」と友人は答えた。博士はまた言った。「他人を支配することを好む人と、支配されることを好む人がいるものだ。人間同士の関係を大切にするあまり、言うべきことも言えなくなってしまう。つまり神よりも人が大切になってしまうのだ」

「そういうことなら確かによくあります。しかし、それと同性愛とどういう関係があるのですか」しばらく沈黙がつづいた。博士は突然言った。「君はこの前の例の小説家を助けることができなかったね」

会話はそれで終った。数年たってから、その男はようやく博士の言葉の本当の意味がわかるようになった。彼はその小説家に肉体的な魅力を感じたわけではなかったが、彼が自分に好意をもっていることに満足を感じていた。それはつきつめて見れば、彼との肉体的交渉に満足を求めるのと同じ性質のものであった。彼との友情を犠牲にしてまで彼の必要のために戦うことをしなかった。つまり、彼との友情の方が神との関係よりももっと重要なものになっていたのである。

そう考えて見ると、この男は自分の周囲のすべての人から常に愛情と称賛のみを求めていたことを知った。相手がだれであろうとその人との関係を神との関係以上に大切に思う場合には、それは不純潔な関係なのである。こうした自分の性質の根本に直面し、正直にそれを認めたとき、彼はこの不純潔を断ち切る神の力があることをも発見した。そしてはじめて同性愛のとりこになっている人たちにも自由を与えるために真っすぐに戦うことができるようになったのである。

ブックマン博士は「罪を憎んで人を憎まず」という昔からのことわざを生きぬいた人である。どんなに悪意をもった人に対しても彼は決して心を閉ざさなかった。しかし、人間的な妥協によってキリストの標準を引き下げるようなことには決して同意しなかった。博士は決して反共主義者ではなかった。それどころか、多くの共産主義者たちは博士の中に、自分たちの革命よりももっと広く、深く、そしてもっと効果的な革命を生きている人を見たのである。

MRAの扉はひろく、すべての国のすべての人に向かって開かれている。ロシア人、アメリカ人、アフリカ人、中国人、日本人、ドイツ人、オランダ人、ギリシャ人——この地上のすべての人に対してこの扉は開かれているのである。しかし、あらゆる世界の悪に対してMRAの門は堅く閉ざされている。非共産世界にばっこする利己心——社会不正をつくり出し、経済的不公平を許して顧みようとしない利己主義に対してMRAは決し妥協しない。同時にまた共産世界の悪に

対してもこの扉は閉ざされている。例えばクリスマスに際し、モスクワから次のような放送を送った共産主義の間違った精神に対しては断じて妥協しようとしないのである。「ソ連のロケットは月を回った。そして太陽に近づいた。しかし、われわれはそこに神を見なかった。われわれの力はついに天国の火を消したのである。二度と再びこの火をつけることはできないであろう。大衆を幻惑する福音の首かせは粉砕された。今こそ前進のときだ。キリストの名は間もなく神話の彼方に消え去るであろう」

MRAは組織でも、宗派でも、また宗教でもない。それはイデオロギーである。それは人々の生き方であり、また生きる目的である。あるカトリックの牧師はこのことを次のように説明している。「教会そのものは必ずしもMRAを必要としないかもしれないが、カトリック信徒にはMRAが必要である」

フランスの有名なカトリック哲学者であり、フランス学士院会員であるガブリエル・マルセルもこの点をはっきりと理解している。一九五六年一月二十八日付けのフィガロ紙に彼は次のような記事を書いている。

「MRAとは何か。これは宗派ではない。MRAは種のようなものである。種を播かれた人

は心の中から変ってくる。その顔には輝きが現われ、一種の放射能を持つようになる。彼らに会ったことのある人はすぐこれを感得せざるを得ない。

ＭＲＡの仕事の大きさを証明する材料のひとつは、クレムリンがこれに深い憂慮を示していることである。タシケント放送はＭＲＡを共産主義イデオロギーの根本をくつがえすものとしてたびたび警告を発している。

たしかに経済的な理由によらず、人々の考え方が突然に変るということほど、共産主義の前提条件と相反するものがあるだろうか。私の心を特に打ったのはアルジェリアのある回教徒の教師の話であった。彼はフランス官憲の独断によってとらえられて拷問にかけられ、ついに母国から追放されることになった。ところが、ＭＲＡのフランス人で、自分たちのあやまちを率直にみとめ、自己の信念を勇敢に生きぬいている人たちに会ったとき、彼の心の憎しみが消え、そのフランス人とともに新しいアルジェリアをつくるために働こうと決心した。このことを彼が感動にふるえながら語ったところ、それを聞いていたフランスの北アフリカ植民地関係の高官が非常に感激し、自分たちフランス人の植民地でのあり方が現在の悲劇のもとであることについて謝罪した。

これは確かに希望である。いや、ただ一つの希望であるかもしれない。道義的なガラス張り

の生活の中で人々の心が完全に一致するこのような精神がなければ、われわれをとりまいている社会の復讐と欺瞞の悪循環を断ちきることはできない。今日、カナダからノルウェー、中央アフリカからイラン、インドから日本とあらゆるところで人々がMRAを通じて、単に生きがいを見出しているばかりでなく、驚くべき幸福をも得ている。会う人すべてが感じとり、その人から輝き出るこの幸福は真の平和への道である。実在する人類愛に輝く生きた平和の道である」

ブックマン博士はMRAこそが真に伝統的な教会のあり方だと信じていた。彼の友人たちもまたそう信じている。

ブックマン博士は生きている。彼の友人たちの心の中で、また全世界にひろがっていく彼の仕事の中で、博士は永久に生きつづけるであろう。この章を終るに当たって、ドイツのフロイデンシュタットにおけるブックマン博士の最後の言葉をつづって見たいと思う。フロイデンシュタットこそはMRAの構想がはじめて生まれた土地であり、また博士終焉の地ともなった場所である。

「この土地で私は大きく使われることになるだろう。この土地で神はかつて世界の問題をはっ

きりと私に示された。

神の計画はすみやかに実り
刻々とその結果はあらわれる
蕾(つぼみ)は苦(にが)いけれども
花はやさしくほころびるだろう
盲目の不信仰は必ずつまずき
神の仕事を見のがしてしまうだろう
神には神の表現の方法がある
神の計画は明らかに示されるであろう

ここへきたことは正しかった。神はわれわれに対して親切である。われわれのたどるすべての道は明るく照らし出されるであろう。

ここを世界の仕事の中心にすべきだ。ここで私はすべてを与えつくして死んでいくだろう。ここからの展望は広く、大きい。それは神の示す驚異にみちた世界の姿だ。

私に金銀の貯えがあるならば、一人々々に分かち与えたいと思う。私の持つものはきわめて少

ない。私に属するものはすべてをあげてMRAにささげる。オックスフォード・グループやMRAを通じて、みなに、そして私に与えられた限りなく尊い新しい生活をみなで分かちあってほしい。この贈りものを本当に生かすには、世界の危機に答え得る思想をますます前進させることである。この思想は全人類が待ち望んでいる輝かしい黄金時代を招来するだろう。そしてキリストの十字架にあらわされた精神が、世界のすべてのあり方を一変させていくであろう」

十一　勇気ある人は選ぶ

聖書の中で困るのはわからない点よりも、むしろわかりすぎている点だと、マーク・トウェインは言った。多くの人にとってブックマン博士の仕事についてもこれと同じことがいえる。

博士は現代の世界の動向を変えようとして立ち上がった。一九六一年の夏、オックスフォードのある学長が、「近ごろの人は道義標準などを、もはや問題にしていない。それどころか、善悪の区別すら存在しないと信じている」と言った。

こうした傾向の中にあって、ブックマン博士は半世紀にわたって、おそれなく前進をつづけた。古くから伝わった真理を新しい方法で説き、頽廃した世代に神の道を受け入れることをうながし、個人はもとより国々も徹底的に清掃する決意をせまった。博士は政治家や、普通の人が高

い生活規範に従って今までの考えや、生き方を根底から革命化するように戦った。道義がくずれ、放縦の名のもとに世界の基礎がぐらついているこの世代に、永久の真理と価値を土台にした堅実な基礎を与えようとした。

もちろん、博士は迫害を受けた。このような仕事に挺身した人は、歴史上いつでも迫害を受けている。キリスト教徒と称しながら、離婚、性的紊乱、飲酒、賭博、金銭、共産主義などの点で妥協している人たちは、昔キリストを十字架にかけたのは当時のいわゆる有識者たちであったことを忘れている。キリストが十字架にかけられたのは、彼が間違っていたからでなく、彼が正しかったからである。何人のキリスト教徒が今日、自分たちの住んでいる社会に、強い道義的な線を引くような生き方をしているだろうか。

ブックマン博士はキリストを単なる善意だけの存在だとし、人や大陸の陥っている病弊に対して無力であるとする考えには決して同調しなかった。そういうふうに考える無力なキリスト教徒こそ、自分の信仰を自ら否定するものであると博士は強く感じていた。

博士を愛し、その仕事に忠実な友人は多かった。しかし、中には彼を憎み、さげすみ、偽って伝え、あざける人もいた。しかもそれは博士が正しかったためである。博士に敵意をもつ人たちは彼の死後も攻撃と侮辱をつづけている。しかし、博士の平安は決してさまたげられないであろ

う。

博士はこうした反対、攻撃の表面だけを見て、驚くようなことはなかった。突き刺されて痛む良心の反発、また挑戦を受けながらチェンジを拒否して反発する人間の意志の毒を含んだトゲ、そういったものを博士はよく知っていた。悪意にみちた人たちの復讐心のかげには、しばしばそういったものが隠されていた。すべての人が神の命令のままに、そして神の支配を受けて生きるべきだという強い挑戦を博士はつねに人に与えた。それに対して、自分勝手な生き方をしようと決意した人たちは長年にわたって博士の仕事を傷つけ、その人格を抹殺しようと努力してきた。非戦主義者、共産主義者、ナチ、日和見主義者などの言葉が彼に投げつけられた。これらの言葉は、人々に自由を与え得る真理を故意に遠ざけるために創作されたうそである。

「迫害は予言者をきたえる焔だ。批判のつぶては一日を迎える気魄をつくってくれる」と博士は言った。そしてまた次のような確信をいだいていた。

「極端な悪には極端な善で対処しなければならない。狂信的な悪への追随は情熱的な善への追求でこたえなければならない。情熱のみが、情熱をいやすことができる。相互いに争い合うイデオロギーによって分裂した世界をいやすものは、全世界を包含する、よりすぐれたイデオロギーでなければならない」

道義的勇気がきわめて不足している今日、博士の生涯はまさに英雄的なものであった。

残された問題は、「一体われわれに何ができるか」ということである。

これに対する答は、ブックマン博士が一九六一年、六月四日に、コーの世界大会の開会にあたって発表した「勇気ある人々は選ぶ」と題した演説の最後の言葉に明らかにされている。

「われわれは世界の革命に直面しています。われわれの前には三つの可能性しかありません。一つは戦いをあきらめることです。すでにそのつもりになっている人も大分あるようです。もう一つは武力で戦うことです。それは人類全体の自殺の危険をはらんでいます。そして最後の道はわれわれが共産主義世界にも、非共産主義世界にも次の段階を示す、よりすぐれたイデオロギーを発見することです。根本的な相違がないかのように、あるいはあっても大して問題がないかのようによそおって、その場をつくろっただけではどうにもなりません。また思想的な挑戦に対して、経済的、政治的、軍事的な方法だけで対抗できると考えてもそうはいきません。

絶対道義標準というものは、現在では単なる個人的な問題ではありません。それは国の存続の条件なのです。われわれは国家生活、政治生活、経済生活、学生生活、あるいは家庭生活の中から人をチェンジすることによって、すべての悪を一掃しなければなりません。

神の占めるべき座を他の人間に渡した場合、奴隷制度がはじまるのです。

「人は神に導かれることを選ばなければならない。さもなければ、独裁者の支配に屈することになる」

善と悪との戦いには中立はありません。安価な代償では国は救われません。人類を救うためには私たちの生涯も必要ですし、また国々の最も優秀な人々が必要です。私たちが神とともに全面的に戦うならば必ず勝ちます。

勇気ある人は正しい道を選び
臆病な人は選択を避ける
しかし臆病者が拒否した道を
大衆が自らとりあげる日が必ずくる」

非常時になし得るただ一つの正気なことは人を変えることである。

ブックマン博士は、人間性は変り得るという経験にもとづいた信仰を生涯生きぬいた。それが解答の根本である。

人々が変るとき、国の経済機構が変ってくる。それが解答の成果である。

多くの人々が変るときに、世界の歴史も変る。それが、われわれの時代の使命だと博士は言った。

人々は平和を唱えながら、戦争の準備をしている。ブックマン博士は、平和とは単なる観念ではなく、人間が変ったとき生まれる現実であるといっていた。世界中の人が、神の支配のもとに生きるように、自分の生涯をささげて戦う人こそが、真の平和をつくることができるのである。

それが博士の生涯とその秘訣のすべてであった。

今こそわれわれも立ち上がって、博士の道を歩もうではないか。

訳者あとがき

この本はFrank Buchman's Secret, by Peter Howard, Published by Heinemann, London, Melbourne, Torontoの日本訳である。

英国では初版二百万部が印刷され、ドイツでは初版三万五千部が一週間以内に売りつくされ、続いて版を重ねている。その他、スペイン語、スカンジナビア語、フランス語、インドの各地方語に翻訳され、ブラジルでは幾週間も継続してベストセラーの上位を保っているという。本書の日本語版を毎日新聞社から出版できることは大きい喜びである。

この本は博士をただほめそやすために書かれたものではなく、真実を伝えることが目的であると著者は言っている。あらゆる階層、あらゆる民族の人たち、また信仰をもった人も持たない人もだれもが、ブックマン博士に接して、人生の転機を経験し、チェンジしていくありさまがこの

本には生き生きとえがき出されている。そうした人々のチェンジをとおして世界が注目するような大きな出来ごとが生まれていったのである。ブックマン博士のこの秘訣こそ、現代文明に忘れられた大切な要素ではなかろうか。

ブックマン博士は大正四年以来日本に何回も来朝し、多くの日本人がこの生き方考え方に有形無形の深い影響をうけている。わが国の国際的地位の変遷にもかかわらず、戦争中もまた平和の日にも博士は日本に対して変らぬ愛情を寄せ、また日本が今後の世界の上に持つ大きな役割を信じつづけてきた。「日本はアジアの灯台でなければならぬ」と強く主張して敗戦後、呆然自失していた国民の心に新しい希望と方向を与えられたことはまだ私共の記憶に新しく、衷心感謝のきわみであった。

科学の驚くべき発達によって人間が宇宙を支配する可能性すら夢ものがたりでなくなってきたが、われわれは残念ながら地球上で互に平和にくらすことを学んでいない。世界を分裂している両陣営とも、未だに利己心を克服できる新しい型の人間をつくり出すことができずに行き詰っている。

『フランク・ブックマンの秘訣』はこうした時代の根本的な病源に対して答を与えようとするものである。

それは共産世界、非共産世界の双方を通じて人類が将来進むべき道を示し、しかもそれを私たちの生活の中から実現できることを教えている。国際情勢の緊迫、さらに文明の崩壊が叫ばれる今日、あえてこの本を世に送るゆえんである。

一九六二年四月

訳　者

訳者紹介

相馬雪香　　尾崎咢堂の三女として1912年東京に生る。女子学習院卒業後，英国に学ぶ。現在尾崎記念財団理事長代行。
訳書にフランク・ブックマン『世界を再造する』ポール・キャンベル博士『人間の改造』などがある。

フランク・ブックマンの秘訣　　〈検印省略〉

著　者　　ピーター・ハワード
訳　者　　相　馬　雪　香

発行所　　国際ＭＲＡ日本協会
〒113
東京都文京区千駄木4—13—4
TEL 03—821—3737（代）